

D story

Azzoo

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

便利な世の中。それは幻想郷ではあつてはならないことだ。

そのことを防ぐために、八雲紫はDワールドに幻想郷の住人を移住させた。

だが、何らかの手違いで、一か所ではなく、関東各地にちりばめられてしまった。

そこで、研究所（幻想郷住人管理センター「技術開発も含む」北関東支部）の所長である豊里耳神子はレミリアにあることを依頼する。

「幻想郷の住人の所在を確認してきてくれないかしら？」

それをレミリアは快く引き受け、GodWingsというチームを立ち上げるのだっ

た。

この作品のブログ改訂版をピクシブに投稿しております。

ブログについて意見でしたら、そちらにお願いいたします。

ついにニコニコ動画の方にブログをアップしました

↓<http://www.nicovideo.jp/watch/sm2337>

3
4
6
3
3

目次

プロローグ編

第1話「シロの誕生」 | 1

第2話「レインボーウイング」

4

第3話「相棒」 | 10

第4話「ロータリー」 | 14

第5話「??とFD」 | 18

第6話「赤城の魔法使い」 | 22

第7話「私は霊夢。」 | 26

God Wings 誕生編

第8話「いろはのコンビ」 | 29

第9話「Godへの道」 | 33

第10話「R's Driver」

37

第11話「因縁」 | 42

第12話「けんかバトル」 | 46

第13話「カーナビ改め、ハク」

50

第14話「酔いにご注意を」 | 54

第15話「エースと罨」 | 58

設定集 | 62

V S月の兔編

第16話「月の兔」 | 68

第17話「4WDダウンキラー」

73

	第18話「大事な人」	79
	V S もこけーね編	
	第19話「着火」	85
	第20話「雨のプラクティス」	
90	第21話「レインレーシングバトル」	
96	第22話「鳳凰」	101
	V S Family's 編	
	第23話「Big Family 前編」	
	109	
116	第24話「Big Family 後編」	
	第24, 5話「とあるエンジンノック」	
	第25話「ブラックコントロール」	125
	憎しみの雷編	
	第26話「狂気」	138
	第27話「限界」	146
	第28話「デモカー」	155
	第29話「代車の仮面をかぶった怪物」	
	第30話「憎しみの雷・裁きの雷」	165
172	第30, 5話「ハクの彼氏」	179

第31話「白いハク 黄色い魔理沙」	185	第39話「私ⅡFD FDⅡ私」	255
第32話「白魔理沙」	192	V S M R S編	
設定集2&用語集	201	第40話「アリマリ☆」	262
V S 命蓮寺混合チーム		第41話「迷走」	269
第33話「不安」	208	第42話「やり直しと魔女の儀式」	287
番外編「レミリアの納車」	215		
第34話「ナズとレミとあの車」	221	第42, 5話「魔女の儀式」	287
第35話「私にできること」	228	第43話「パペットマスター」	292
第36話「全開走行(意味深)」	238		
第38話「1本目」	247		

プロローグ編

第1話「シロの誕生」

フランドール・スカレット（以後フラン）は埼玉の山の中、正丸峠の入り口にいた。自分がどこにいるのかはさっぱりわからない。

「……？」

「あれ？私……？紅魔館にいて……それで姉さんと話してて……それで……？」

ふと、目を前にやると、ある1台の車があった。GT-R32。しかもフルチューンの。

「これは……？誰の？」

あたりを見回すが、そこには見慣れたアスファルトの道が続くだけで、誰もいない。さっと、上も見てみる。青い空が、木の合間から見えている。GT-Rに乗ってみることにした。

「だけどいいなかなあ……。まあいいか。私に乗れって言ってるように感じるし。」

エンジンをかける。とても野太い音が車内にわたる。

「いい音だ……。よるしくね、GT-R。」

フランはとりあえず、正丸峠に行ってみることにした。

正丸峠は、2つのチームがひしめき合っている。チーム永遠亭（以後チーム亭）。チーム白玉楼（チーム楼）。どちらも、幻想郷からやってきた、八意永琳（以後えーりん）、蓬萊山輝夜（以後輝夜）、鈴仙・優曇華院・イナバ（以後鈴仙）、因幡てゐ（以後てゐ）《以上チーム亭》《以降チーム楼》西行寺幽々子（以後幽々子）、魂魄妖夢（以後みよん）である。

なぜ、この人たちは先に来ていたのか。それはとても単純なものである。

なにも、無縁塚の異変は、紫たちだけが知っていたわけではない。ただ、異変を知って住人がパニックを起こさないよう、隠ぺいしていただけだったのだ。しかし、知らせていたメンツもあった。四季映姫・ヤマザナドゥ（以後えーき）、幽々子の、つまり、幻想郷を上から見守るみぶんである。紫は2人にもし結界が壊れたとき用の、緊急避難場所を用意するように、たのんだ。そしてこの世界を見つけ、数日間管理し、ここが適切だと認識したのである。

つまり、この世界にやってきたのは、幽々子率いる、チーム楼が一番最初であった。

特に気にしていなかったフランはそのまま、移動を続けた。すると、上りの終わりの区間に、大きな建物が。ここが、チーム楼の事務所兼住居（以後事務兼）である。チーム亭の事務兼は、コースの終わりにある。

フランはそこに降りてみることにした。車を降りると、秋の冷たい風が体をつついた。そばには、みよんが立っていた。

み「何やって・・・!? フ、フラン!? なんでここに?」

フ「それはこつちが知りたいわ。」

しばらくの沈黙の後、幽々子がやってきた。

ゆ「あら、フランちゃん。あなたもここに来たのね。」

フ「はい。気が付いたらここにいて・・・。ここいいっただこなんですか?」

ゆ「ここは、埼玉県 飯能市にある、正丸峠。あなた、無一文だったら、しばらくここにすんでも、いいわよ?」

み「いいんですか!」

ゆ「いいのよ、別に。」

フ「ありがとうございます!」

フランは、お金がないと生きていけないことも、自分には家がないことも、すべてわかっていて。だから、このように即決したのである・・・。

第2話 「レインボーウイング」

住み始めてからというものの、フランは幽々子に様々なことを教えてもらった。その中でも、とっておきのものを紹介しよう。といっても、幽々子に教わった最後のことだが。冒頭で言ったように、正丸では2つのチームが争いあっている。何か月前、最後の大一番をやろうとえーりんがいつてきたのだ。

え「じゃあ、ここの往路を一番速く走り抜けたものがここに残る。それでいいわね？」

ゆ「ええ。」

み「私にやらせてください！幽々子様！」

ゆ「だめよ、みよん。第一、あなたの乙だつて、まだ仕上がってないのよ？」

み「そつそれは……。」

フ「ばとる？」

ゆ「そうよ。ここを誰が一番速く走れるかを競うの。その大一番。負ければここを潔く出でいかなければいけないのよ。」

フ「そんなあ！」

ゆ「まあ、おちついて。まだ負けと決まったわけじゃないのよ？それと、フランちゃ

んには隣に乗ってもらうわ。」

フ「いいんですか？」

ゆ「ええ。これが最後の私のここの走りになるか、味方としての走りになるか。どちらにしても、あなたに教えられるのはこれで最後よ。よく見ておきなさい。」

フ「はい！」

ゆ「それじゃあ、はじめましょうか。」

・・・・・・・・・・・・・・・・

案の定、結果は見えていた。幽々子が一番最初にやってきたということは、一番正丸峠を攻め込んでいるのも、また幽々子なのである。さらに、バトル内容では、チーム亭側は鈴仙セリカG T F O U R、チーム楼側は幽々子スズキカプチーノと、コーナリング性能が高いカプチーノのほうが圧倒的に有利なのだ。

セリカを降りて、鈴仙はどこか、悲しげな表情を浮かべていた。

れ「ごめんなさい、師匠。わたし・・・。」

え「いいのよ、ある程度、結果は見えていたわ。だから、てると姫には荷物をまとめとってもらったわ。」

れ「私が負けるってわかってたんですか!？」

え「ええ。私は結果がはつきりしないと、むずむずするし、いい峠も見つけてあるわ。」

ここからそう遠くはないわ。だから安心して。」

鈴仙は言い返そうとしなかった。自分が負けたのは事実だからだ。覆そうとしても、代わるものではない。

いつぼう、チーム楼側。フランは圧巻してまったくなにも考えられなかった。

ゆ「大丈夫？」

フ「え？あ、はい。大丈夫です。」

ゆ「ふふふ。かわいいのね。これで私たちの勝ち。だから、」

フ「だから？」

ゆ「今からフランちゃんには、引越しをしてもらうわ。」

フ「え!?え?」

ゆ「あなたも、いつまでも家にいるようじゃ、成長しないから、ここに、(元チーム亭の事務兼)引越して私たちに敵対する勢力となってもらう。そうすれば、もつとあなたのテクニクはすごいことになるわ。」

フ「・・・。わかりました。」

少しさみしい気もしたが、それが事実だ。それから2年間は、フランはたった一人でチーム楼に挑み続けた。

転機が訪れたのは、実に当然であった。住み始めてからというもの、フランは幽々子

に様々なことを教えてもらった。その中でも、とっておきのものを紹介しよう。といっても、幽々子に教わった最後のことだが。

冒頭で言ったように、正丸では2つのチームが争いあっている。何か月前、最後の大一番をやるうとえーりんがいつてきたのだ。

え「じゃあ、ここの往路を一番速く走り抜けたものがここに残る。それでいいわね？」

ゆ「ええ。」

み「私にやらせてください！幽々子様！」

ゆ「だめよ、みよん。第一、あなたの乙だつて、まだ仕上がってないのよ？」

み「そつそれは……。」

フ「ぼとる？」

ゆ「そうよ。ここを誰が一番速く走れるかを競うの。その大一番。負ければここを潔く出でいかなければいけないのよ。」

フ「そんなあ！」

ゆ「まあ、おちついて。まだ負けと決まったわけじゃないのよ？それと、フランちゃんには隣に乗ってもらうわ。」

フ「いいんですか？」

ゆ「ええ。これが最後の私のここの走りになるか、味方としての走りになるか。どち

にしても、あなたに教えられるのはこれで最後よ。よく見ておきなさい。」

フ「はい！」

ゆ「それじゃあ、はじめましょうか。」

・・・・・・・・・・・・・・・・

案の定、結果は見えていた。幽々子が一番最初にやってきたということは、一番正丸峠を攻め込んでいるのも、また幽々子なのである。さらに、バトル内容では、チーム亭側は鈴仙セリカGTFOR、チーム楼側は幽々子スズキカプチーノと、コーナリング性能が高いカプチーノのほうが圧倒的に有利なのだ。

セリカを降りて、鈴仙はどこか、悲しげな表情を浮かべていた。

れ「ごめんなさい、師匠。わたし・・・。」

え「いいのよ、ある程度、結果は見えていたわ。だから、てると姫には荷物をまとめといてもらったわ。」

れ「私が負けるってわかってたんですか!？」

え「ええ。私は結果がはつきりしないと、むずむずするし、いい峠も見つけてあるわ。ここからそう遠くはないわ。だから安心して。」

鈴仙は言い返そうとしなかった。自分が負けたのは事実だからだ。覆そうとしても、代わるものではない。

いつぼう、チーム楼側。フランは圧巻してまったくにも考えられなかった。

ゆ「大丈夫?」

フ「え? あ、はい。大丈夫です。」

ゆ「ふふふ。かわいいのね。これで私たちの勝ち。だから、」

フ「だから?」

ゆ「今からフランちゃんには、引越しをしてもらおうわ。」

フ「え!?! え?」

ゆ「あなたも、いつまでも家にいるようじゃ、成長しないから、ここに、(元チーム亭の事務兼)引越して私たちに敵対する勢力となってもらおう。そうすれば、もつとあなたのテクニクはすごいことになるわ。」

フ「・・・。わかりました。」

少しさみしい気もしたが、それが事実だ。それから2年間は、フランはたった一人でチーム楼に挑み続けた。

転機が訪れたのは、実に当然であった。それはフランが500年余り生きてきた中で、一番の天気であった…。

第3話 「相棒」

「これから、Dワールドという世界に行く。そして、散らばったみんなを取り戻す。それが、この世界の私の役目。」

レミが悟ったのは、目の前に光が入った瞬間であった。そして、光の中である能力にめざめる。

『未来を見通す能力』・・・まるで今そこにあるかのように、未来が見える。だが、それを変えることはできない。ただ、見えるだけ。見通すことさえも、世界に入ってしまったら、衰えていくだろう。

目が覚めると、見知らぬ町の、歩道の上だった。(とにかく、まずはお金を稼いで車を買う。集めるのは、そのあとだ！)

レミはアルバイトに没頭した。店員、ウェイター、工事のバイト、稼げるならなんでもやった。2年かかって、やっと1台の車にありつけた。中古のS2000。色はイエロー。宇都宮 50 ね 93-911 (やつと・・・ありつけた。よし、次は相手を負かすほどのスピード、テクニック。)

れ 「時間はかかるけど、やれるだけやってみよう！」

そういうながら、街を走っていると、ある文字が書かれていた。そこは、『東堂塾』だった。

「東堂塾って……プロDと戦った、あの……?」

思い切つてレミはその門をたたいてみた。塾生は少々戸惑いながらも、歓迎してくれた。それから、レミの塾生生活が始まった。昼はバイトで金稼ぎ、夜は塩那峠でテクニツク稼ぎ。それが1日だった。

転機が訪れたのは、入門して、9か月が経過していた。

東「こいつが新しい塾生、秋静葉君だ。ロードスターに乗っている。」

塾内がざわめく。「またも女か。」というものもあれば、「どんなものか試してみたいなあ」というものもいる。

静「悪いですけど、私は手加減できないんで。よろ。」

レ「静葉って……?え?」

静葉が去る際、レミにこつそりこつこう言った。

静「後で会議室に来て。」

「その日の夕方」

静「あなた、レミリアね?」

レ「えっええ。それが?」

静「よかったー！あんたを探してたのよ！」

レ「もしかして、あなたも幻想郷のメンバーを集めにここに!？」

静「ええ！これからは2人で！」

レ「ええ！」

そして、それからまた時が過ぎて、数か月……。塾生生活に終わりが来る……

と「突然だが、君たちには交流戦をやってもらおう。……塾内でな。対決するメンバーを発表する。」

レ「(ゴクリ……)」

静「(ゴクリ……)」

と「まずはヒルクライム。酒井とレミ。」

酒井「はい。」

レ「はい。」

と「続いて、ダウンヒル。二宮と静葉。」

二宮「はい！」

静「はい。」

と「なお、対戦開始は今日の午後23：00から、明日の午前2：00までだ。なお、さつき言った4人は、今日の21：30から、一切のセッティングを禁止する。」

4人「はい。」

と「では、解散。」

レミと静葉は解散後、東堂のところに行つて、こう言つた。

レ&静「あの。東堂さん。この交流戦が終わつたら、そのお・・・。」

と「この塾を辞める。だろ？別にかまわんさ。あんたらがどこに行こうと、俺が縛る

権利なんてないんだからな。」

↪八方ヶ原 22：50↪

二宮「よろしく。」

静葉「よろしく。」

まずはダウンヒル。そしてヒルクライムだ・・・。

この後、レミと静葉は東堂塾を脱退し、一路いろは坂に入つたのであつた・・・。

第4話「ロータリー」

咲夜が目覚めると、碓氷峠のC-121峠の、ギャラリーコーナーのところにいた。そばにプレハブ的な何かが建っていて、そばにはFC3Sが。

「誰のでしょうか……」

いきなり、エンジンがかかり、大きな音に、咲夜はビビった。

「うわ！なに!?なにがおこった!?!」

あたりを見回す。もちろん誰もいない。

「乗れ?乗れって言うてるのね?」

FCはそう答えなかつたが、そう言うてる間隔がした。むろんキーは刺さっている。

「……。まつまあ、そんなにゆうなら、乗ってみますか。」

ゆつくりとアクセルを入れる。とても独特なロータリーサウンドが車内に響く。

「すごい。この独特な音。私、これ好きかも……。じゃあこの音をもつと響かせるため、そ

してあなたと出会った祝いをするため。」

「私、プロになるよ!」

「…….…….…….…….」

咲夜は、答えないFCに話かけつづけた。苦しい時も、だ。

よって1年後、咲夜は国内A級ライセンスを取得することができた。《ツカイミチハキマツテナイケドネ》

戻ったときに、あることを思い付いた。

「このライセンスを使って、シヨップでも開こう！」

シヨップ。といつてもいろいろあるが、咲夜は『自分と受講者が、ともに成長するよ
うなシヨップ』を目指し、精進した。拠点は自分が一番初めに出会った、大きなプレハ
ブ的な何か。

シヨップを開いたのはいいが、なかなか人が集まらなかつた。だが数日後、シヨップ
にある人物が訪れる。それは以外にも、幻想郷の住人であつた。リグルだつた。

リ「あのー。」

咲「いらつしやい。あなた、車は？」

リ「はい。外に置いてあります。」

リグルに案内された。彼女の愛車は、アルテツツアだつた。出会いを聞くと、目覚め
たすぐそこで車が捨てられる瞬間を見たのである。そして、かわいそうになつて持つて
きたという。

咲「んで、持つてきちゃつてよかつたの？」

リ「はい。なんかかわいそうだったので。」

咲「そんなんで車が手に入ったら、この世界で苦労しないわよ。」

咲夜は一瞬、嫌な顔をした。

リ「そんなことより、やるんですよね？入団テスト。」

咲「……………。わかったわ。だめだったら、容赦なくはじかせてもらうわ。」

リ「承知のうえです。」

咲夜は、そうでなくてもはじくつもりであった。（こんなやつに、車の運転ができるわけない。）と。

しかし、その常識は覆される。咲夜はテストの際、放った言葉がただ一つある。

「あんた、ほんとに初心者なの!？」

リグルの車を降りた、咲夜は思わず安心してしまった。

リ「だつ、大丈夫ですか？」

咲「ええ、大丈夫よ。すごかったわ。もちろん入団テストは合格よ。」

リ「はい！これからよろしくお願いします！」

それからしばらくは、シヨップとしては活動できていた。

しかし、悲劇の始まりは、突然にやってくる。それは、『ムーンライトデビル』。そう、レミリアの群馬進出であった……………。

プロローグ編FINAL
咲夜編に続く。

第5話「??とFD」

魔理沙は、特に何も感じてはいなかった。無縁塚の異変を聞いた時も、だ。とにかく落ち着きを払い、誰にもばれないようにした。しかしそれはただの自己満足でしかなかった。

目覚めると、ある建物が見えた。赤城峠にある観光案内所だ。

魔「……。とにかく、情報を聞き出さないと。」

売店に向かって動き出そうとした瞬間、耳の奥で、なにか言葉が聞こえた。

魔「？」

??? 「……めだ……ぬす……だ……」

魔 「なんだぜ？ まあいいか。」

??? 「う……して……」

とりあえず、売店に入って現在位置だけ聞いてみた。

ここは、群馬県、前橋市富士見町にある、赤城峠だ。

魔 「ここにあるFDは、誰のなんだ？ まあ、誰のでもいいけどな。んじゃ、死ぬまで借りてくつつか。」

??? 「……よくね」

魔 「いい加減聞か、おまえは誰なんだ？」

??? 「わ……ハ……こ……F……に……つ……幽……」

魔 「!?幽霊？」

??? 「……」

魔 「まあいいか。」

??? 「よ……し……ね。」

魔 「ああ。」

魔理沙は赤城を下った。下る間、1台ともすれ違わなかった。こんな真昼間なのに、
だ。

何も思わなかった魔理沙を、包んでいるこのFDには、とんでもない秘密があったの
だ……。

魔理沙のFDについては、後日話すことにしよう。

魔 「まずは、宿探しだ。それも、なるべく長く泊めてもらえるようにしないと。」

??? 「そ……だ……」

魔理沙は、いいところを見つけた。看板に、『走りや御用達の宿発見！』と書いてあつたのだ。その看板は、ある走り屋チームとの出会いでもあり、黒歴史の始まりでもあつ

た。

魔「ちわく・・・？」

レッドサンズメンバー1（以後RS1・2・3）「おつ？初心者か？」

RS2「初心者が来るとこじゃないんだけどなく。まあ、好きにしるよ、どうせ表の看板を見てきたんだろ？」

魔「ああ、そうだが何か？」

RS2「・・・。おまえ、車は？」

魔「FDだぜ。」

RS2「じゃあ、一度啓介さんに会ってみることだな。あの人はプロになってるけど、今はこっちにいるからな。」

魔「啓介？」

???「た・・・プロ・・・D・・・ヒル・・・関・・・名を・・・おと・・・よ。」

魔「プロDか。それなら私も聞いたことがある。」

魔「そいつにはいつ会えるんだ？」

RS3「そうだな、今日の22時にぐらいにでも、呼んでみるか。」

RS4「んで、初心者が何でここにいるんだ？こっから辺のやつらなら、ここがレッドサンズの寮であることぐらい知ってるはずだが。」

魔「ああ、それならな、私はこの世界に来たばかりなんだ。．．．．．幻想郷からな。」

RS5「ああ、それなら聞いたことあるぜ、たしかネットの中の世界だとか。」

魔「．．．．．だからなんだ。」

RS5「．．．。」

RS4「そういうことなら、話は早い。どうだ？俺と1戦やらないか？」

魔「ああ、よろこんでやらせてもらうぜ。」

RS4の搭乗車は、FDVI型だった。かなりいい勝負になるかと思いきや、決着はあっさりとつく。魔理沙の圧勝だった。

RS4「まじかよ．．．．．こんなにおまえつて速かったのかよ．．．。とりあえず、名前を聞こうか。」

魔「霧雨魔理沙。みんな知ってると思うが、普通の魔法使いだ！《使う場ないけどな。」

第6話「赤城の魔法使い」

　その夜　赤城山　22:00

啓介「あんたか、最近うちのチームに入りたいつて言ってるやつは。」

魔「ああ、そうだけ。」

啓介「……いい感じだ。おまえなら、バトルしなくてもわかる。なんというか、兄貴から聞いた、昔の俺によく似てる。さいしよからそんなオーラを出してれば、うちのチームに入っても問題ないだろう。」

魔「それで？バトルはやんのか？」

啓介「ああ、むしろやらせてもらうぜ。俺の趣味の領域になっちまうけどな。」

　そしてバトルは始まった。誰もが予想していた啓介の勝利が覆された。　

啓介「速いな……。予想はしていたが。」

魔「だろ？」

　こうして、魔理沙のRS生活が始まった。

　そして、RSに所属して2年後。思わぬ客が現れる。（RSメンバーには、魔理沙はマリと呼ばれている。）

RS 2 「マリ。おまえに手紙だ。なんか、おまえに親しい住人とか書いてあるが、ほんとか？」

魔 「まあ、読んでみないことにはわかんないさ。どれどれ？」

??? 「……?!?! は……!」

魔 「おまえにもわかるか。これは親しいなんてもんじゃねえ。私の師匠からだ。」

RS 2 「は!?!おまえに師匠いんのか!?!んで、なんて書いてあるんだ？」

魔 「……。『魔理沙へ。RS についてはいけない。おまえは、もつと違うチームにいるべきだ。3か月以内に、RSを出なさい。それでもいる場合は、私が直接行く。』だつて。」

RS 2 「……。そうか。出るのか?おまえ。」

魔 「出るわけないだろ?言つとくが、ここは私の住居みたいなものだぜ?そう簡単に立ち退くかよ。」

RS 2 「……。そうだな。」

むろん、魔理沙は3か月間、RSを出ることはなかった。そして、手紙が送られてきた日からちょうど3か月後……。

魅魔 「ほんとに出ないとは、馬鹿な奴め。」

魔 「なぜだぜ師匠?私がここにいちやいけない理由でもあんのか?」

魅「……。走っているうちに教えてやるよ。」

バトル中、魔理沙は魅魔に、こう教えられた。

「おまえはRSにいるうちは絶対に成長しない。どれだけ時を重ねようが、しよせん無駄だ。成長したかったら、チームでなく、フリー。そう『ワンダラー』として活動しろ。と。」

魔理沙は負けた。初めての敗北だった。そして、自分がいかに車に乗せられているか分かった。そして、魔理沙は泣いた。魅魔が窓越しにこう語った。

魅「強くなりたかったら、車を知るんだな。後、いろんな峠を回ってみること。よかったら、八方ヶ原に来ないか？」

魔「……。遠慮しときます……。師匠。」

魅「そうか。気が向いたら来い。じゃあな。」

そう言い残して、魅魔は去った。その後、魔理沙はRSを引退して、ワンダラー『FDの魔女』として活動した。RS後の活動もあつてか、その名はすぐに広まった。

魔「RSのときバイトしといてよかつたぜ。だいぶ金がたまってる。これでアパートが買えるな。」

???「で……。しよ……?」

魔「おまえのしよべり方もだいぶ聞こえるようになってきたぜ。あんとき言ってくれ

てあんがとな。」

??? 「お……うよ……。」

魔 「んで、どこを借りようか……？」

今度は看板に惑わされず、ごく普通のアパートを借りた。

そして、1年後……。彼女は引っ越してきたという、
霊夢の知らせを受け、
霊夢のもとへ向かったのであった。

プロローグ 霊夢編へ続く

第7話「私は霊夢。」

私は、失敗を犯した。そのせいで、幻想郷のみんなには、迷惑をかけた。でも、なんだろう……。私が見たようには穴があつて、それがだんだんと大きくなってきたように見えた……。まあ、細かいことを気にしていたら負けだ。今は、目の前のことをかたづけたいと……。

みると、眼下には町が広まっていた。むろん、見たことなどない。後ろを見ると、見覚えのあるような、ないような、そんな人が私を見つめていた。

霊夢「誰？」

千代「あ？（怒）誰ってあんた、私はあんたのおかーさんよ。」

霊「はい？」

千「……。まあいつか。」

霊「いつか。じゃあ、聞くけど。ここどこ？」

千「そんなの知らないわよ。」

霊「……。。」

その後1か月ぐらいは、ほんと、何でこんな奴と一緒に暮らしてるんだろうと、何回

思ったことか。でも、慣れというか、だんだん慣れてきた。しかも、この女、私にやたら指示してくるけど、それが速くなるためのことだってことも、わかった。守れば必ず速くなる。そして、この人が『本当に母』だってことも、紫が言つてた、『先代』だってことも、だ。

千「あんたは。またぼーつとしてる。まあ、そんなもんかな。」

霊「なによ、そんなもんで。」

千「そうそう、ここについての情報がわかったのよ。」

霊「ほう、んでここはどこなの？」

千「神奈川県 小田原市にある、ターンパイクの一角らしいわ。」

霊「ふうくん。」

ちなみに、私と千代の所持している車だが、むろんそこらへんに置いてあったものを麓の修理ショップにオーバーホールしてもらったものを使っている。私はロードスター（NA）、千代はシビック（EG6）だ。

突然、言い渡された。

「すみませんが、ここから移転していただけませんか？」

その後、私たちは、群馬県の安中榛名市にある、秋名峠の中腹の、博麗神社（仮）に引越した。博麗神社と書いてある割には、かなり閑散としていた。引越しのかた

ずけが終わった時、魔理沙が来た。気が付くと、千代がいなくなっていた。

霊「……？あれ？母さんは？」

魔「ん？おまえに母さんなんていたか？」

霊「いるわよ、あんたに親父さんがいるようにね。んで、1日前ぐらいまでいつしよ
だっただけど……。」

魔「1日ってお前……（笑）ずいぶん前だな……（笑）」

霊「……（汗）」

魔「んで？どうする？よければ案内するが？」

霊「ええ。たのむわ。」

その後1日、魔理沙に案内してもらい、群馬観光をした。

そして、魔理沙の誘いによって私は秋名峠を攻め始めた。毎日走るわけではなかったが、秋名を攻めに行くたびに、すごいギャラリーがわくまでになっていた。

……。

この後は特に変わったことはなかった。……2年間は。

レミリアが進行してきたんだ……。

レ「霊夢。お願いがあるの。」

「私とバトルして、TRRDのメンバーになってくれない？」

God Wings 誕生編

第8話「いろはのコンビ」

いろは坂では、さまざまな出会いの連続であった。研究所の所長になつていた豊聡耳神子（以後太子）・静葉の妹、秋穰子（以後穰子）・研究所の受付、ミステイア・ローレライ。

（なぜ研究所にはいることになつたのかは、考えてない（キラツ☆）

研究所に入つてから、何か月か経つた後々そして時は動き出す

太子のある言動から始まる。

レ（プロジェクトD かあく。）

太「いまからあなたの考えてること、当ててみましょうか？」

レ「（。D。）へなんですか！いきなり!？」

太「『プロDみたいなチームを作つてみたい。』でしょ？」

レ「・・・え？あつてる・・・」

太「ふふふ。プロDの功績表見てるんだもの。そりや、そう考えるでしょ。」

レ「ま、まあそうですね・・・」

太「そんなあなたにプレゼントがあるから、ちよおつとあとで来てくれる?」

レ「あ、はい。」

〔PM22:00 所長室〕

レ「なにがあるんです?」

太「今日の夕方のこと、覚えてるわよね?」

レ「はい。」

太「あなたにびったりな計画があるの。ほら。」

レ「……。はい!?!」

そこにはこう書かれていた。

『計画 レミリア用 TRRD (チームレミアレーシングドライバーズ)として、メンバーを収集後、チーム名をGod Wings (通称 GW)に変更。もともと幻想郷にいたメンバーを特定後、所定位置を我研究所に報告する。各キャラが所属していると思われるもの↓(以下略)』

レミは見せられた瞬間、戸惑った。これは自分が見てもいいものなのか、と。しかし太子は、レミがそれを言う前にこう言った。

太「これを見たからには、これ通りにやってもらうわ。」

レ「これ通りに……ですか。」

太「ええ。そのためにあなたの車をちよつとばかしいじらせし」

レ「エエエエエエエエエエエエ!!!
エエエエエエエエエエエエ!!!」

太「しようがないじゃない。あなたもそう思ったんでしょ? 『チームを作りたい』と。」

レ「え、ええ。そ、そ、そ、それですね。」

太「そんなにシヨックだった?」

レ「もちろん。」

太「素直でよろしい。じゃあ、それ通りにやってね?」

レ「はい。」

レミは、ふと渡された紙の下のほうに目をやる。小さな文字で書かれていた。

『チームメンバー候補 須藤京一(栃木) 小柏カイ(栃木) 秋静葉(栃木) フランドー

ル・スカーレット(埼玉) 十六夜咲夜(群馬) 霧雨魔理沙(群馬) 博麗霊夢(神奈川)』

レ(これの一つずつ回れってことか。骨が折れるなあ、まったく。とりあえず、京一

とカイは除外して、静葉。か。

く23:00 第2いろは坂スタート地点く

静「で?なによ、話って?」

レ「うん。実はチームを作ろうと思って。それで、あなたを誘おうと思ってね。」

静「いいわ。その話、乗ってあげる。だけど条件があるわ。」

レ（ゴクリ）

静「私に2連勝しなさい。できなければ、チームには入らないわ。」

レ「・・・。わかった。」

静「じゃあ、始めましょうか。悪いけど、タイヤの交換はだめだから。」

レ「承知のうえよ。」

静葉は今まで見せたこともないような威圧をしながら、走った。残念ながら、レミはその威圧に耐えられず、2連敗をしてしまった。

第9話「Godへの道」

レミはさほど落ち込んではいなかった。なぜかというところ、チームメンバーは静葉がすべてではない。そのほかにもいるのだ。そう、心の中で言い続けた。

静葉に負けた次の日、レミアは自分の巣を捨て、チームメンバーのスカウトへと旅立っていった。この日、最速といわれた（静葉×レミア）のコンビは解散したのである。

ところ変わって、ここは正丸峠。フランの通り名である『レインボーロード』のもとに、ある噂が流れる。「ムーンライトデビルがやってくる。」フランはこれを聞いただけで、それがレミアアのことだと分かった。

フ「姉さんが……。なぜ……。？……。！まさか！とりかえしにくるたか!?!」

フランはその日から、何かに取りつかれたように走りこんだ。寝る間も惜しんで走り続けた。そして……。

レ「やってきたわ。フラン。」

フ『『やってきたわ』じゃねーよ。なにしにきた？私に何をする気だ？！』

レ「あなたをスカウトしに来たのよ。」

フ「スカウ・・・ト・・・？」

レ「ええそうよ。私がつ作ったチームに参加してもらおうと思って。」

フ「そういうことなら、こうしよう。あんたが私に勝つたら、入ってやつてもいい。」

レ「そういうと思ったわ。そつそくやりましょうか。」

バートル中、レミリアはフランからあるものを必死に感じとろうとしていた。

その正体は、『神域』である。これは、選ばれた者にしか出ないもので、その効果は『バートル中』これを出すことによつて、自分に有利な展開になる』というものである。選ばれしものにはそのオーラが少しずつ出始めるというのをレミリアは知っていたのだ。

くそしてバートル後く

フ「ふうく。負けたあく。」

レ「さすがに向こうの地元ね。簡単にはいかなかったが、とりあえず勝つたし、いいか。」

フ「約束通り、姉さんについていくよ。よろしく。」

レ「ええ。よろしく。」

レ「次は・・・咲夜か。ここ3年以上ほつたらかしにしたまんまだからね。また従つてもらおうわ。咲夜。」

そう眩きながら、レミは関越道を碓井方面に進んでいた。

・ ・ ・ 碓氷峠 C-121プレハブ前 24:00・ ・ ・

咲「あら、お嬢様。どうさrハツ…!」

レ「私のほうから、通達は行ってるはずよ。まさか、『ない』なんてことは・」

咲「そ、そんなことあるわけないじゃないですか。ほら。」

レ「あ、あるのね。で?何を察したのよ。」

咲「察したというわけじゃないんですが…。それが、私にも心の準備というものが・」

リ「咲夜さん!ちよつと来てk・ ・ ・。あれ?d(ヒデブ!)

レ「あなたのシヨップの唯一のメンバー。リグル。こいつを倒したら、私のチームに入る。それでいいかしら?」

咲「いえ、ここは私と勝負してください。もし私が勝ったとしてもお嬢様のチームには入るつもりです。リグル!」

リ「はい!」

咲「あなたには一つ。やってもらわうことがあるわ。」

リ「やってもらわうこと…ですか。」

咲「あなたには、関東の峠を回ってもらわう。群馬、栃木、埼玉、神奈川。全部回ってもらわう。」

リ「はい。」

咲「これで準備は整った。始めましょう。」

レ「ええ。」

・・・(安定のバトルカット)・・・

レ「やっぱり速いわね。でも、あなたが言うなら、チームに入れるわ。よろしく。『市ルーバーインパクト』」

咲「こちらこそ。『ムーンライトデビル』」

その後、レミは群馬の中心地、赤城と秋名に行き、霊夢と魔理沙にそれぞれ声をかけた。

「私のチーム、TRRDに入らない？」

第10話「R's Driver」

：2年後。TRRDは、事務所を群馬県内に持ち、『幻想レーシング』と偽名を使って、自動車の修理や、走り屋たちの見学に行っていた。それは言わずもがな資金調達に過ぎない。資金が十分に達した現在。

——止まっていた時が動き出す——

魔理沙は、工場の前の自分のFDの前で、呆然と立ち尽くしていた。

魔（ここ2年、変化はなかったが、なんかこう、胸がざわざわする——なぜだろう。絶対に変わりはしないという自分の殻を、今にも破り障りたい気分だ。）

フ「どうしたの？魔理沙。FDの前で立ち尽くしちゃって。もしかして、エンジンのこと、なんか考えてたの？」

魔「え？あ、いや、なんか、変な気分だと思ってな。それより、大丈夫なのか？お客の車直すんだろ？」

フ「休憩時間だよ。」

魔「お、そうか。」

フ「にしても、変じゃない？この車。魔理沙は拾ってきたっていうけど、絶対なんか

あるって。」

魔「なんかって……。(汗) まあ、あるのは確かだな。私が出かけようと思ったら、勝手にエンジンがつくし、な。」

フ「ちよつと、エンジンもつかい見てもいい？」

魔「……。まあいいぜ。せいぜい、時間に遅れないようにしろよ。私はちよつと寝る。」

フ「寝るって……。まあいいけど。どうせ今日も遠征でしょ？」

魔「たぶんな〜。(去り際に)」

——社長室——

咲「失礼します、お嬢様。」

レ「あ、来たわね。咲夜。あなたに一つ断っておきたいことがあるの。」

咲「断っておきたいこと……。ですか？」

レ「ええ。あなたは今、ロータリー関連の車を修理し、遠征時には魔理沙のFDのメカニックをしている。」

咲「そうですね。」

レ「その、メカニックとして、私の考える新チームに参加してほしいの。」

咲「新——チーム？」

レ「そうよ。今まで『TRRD』メンバーとして、あなたを去ったのはわかるわよね？その誘ったメンバーは新チーム。『God Wings』にそのまま受け継ぐわ。」

咲「新しいチーム・・・ですか。」

レ「ええ、新しいチームよ。」

咲「古いほうはどうされるんですか？」

レ「むろん、廃止よ。——そろそろ来るころね。」

——来た。

霊「おつようございまあああす！」

レ「さすが霊夢ねえく。今、ちょうど9：30なんだけど。」

霊「ぎりぎり間に合ってるじゃない。」

レ「ぎりぎり間に合ってるじゃないわよ。ここの始業時間が9：00で、あなたに許したのは始業から30分『以内』のはずよ。」

霊「あるえく？おつかしいなあく？」

レ「・・・。まあいいわ。あ、そうそう。」

霊「何？」

レ「あなたにちよつと、頼みたいことがあるの。——その、——私とバトルしてほしいのよ。私の地元で——ね。」

霊「あんたの地元ってたしか、栃木の——いろはだったわね。」

レ「そうよ。あなたとは、一度立ち会ってみたかったし。チームに入るときに、あなたと魔理沙は試験を受けたもらわなかったし。」

霊「じゃあ、なんでこの場にいることができるのよ。」

レ「勘よ。」

霊「勘!？」

レ「私にはわかるの。あなたと魔理沙からはものすごいオーラが出てるの。」

咲（ルナティック出ていきたくてえ〜〜!）

レ「じゃあ、明日の午後22:00。第2いろは坂の終点で待ってるわ。——後、魔理沙とフランもきちんと連れてきてね? 咲夜。」

咲「え? え? あ、はい。」

レ「それと——。ちよつときて、場所を変えるわ。あ、霊夢は持ち位置にきちんとついでいてね。」

霊「へいへい。」

——普段は使わない会議室 午前10:00——

レ「私の車。もしかしたら——いえ、エンジンブロー『するわ』。」

咲「——わかりました。では、私はキャリカーでお嬢様の地元。」

レ
「ええ、たのむわ。」

第11話 「因縁」

——翌日 第2いろは坂終点地点 22:00——

霊「ここが……。でも、なんで第2いろはの終点地点なのよ？ 頂上のエネ〇スでもよかつたんじゃないの？」

レ「それが、私のたくらみよ。あなたと魔理沙には特別なオーラがある。そう言ったわね？」

霊「ええ。」

魔「ああ、話は霊夢から聞いてるぜ。」

レ「だから普通の試験ではダメなの。だから今回は『のぼりと下り両方』やつてもらわ。それも、『霊夢だけ』ね。」

霊「——わかつたわ。それともう一つ。」

レ「何？」

霊「なぜ第1いろは坂を走らないの？」

レ「見ればわかるでしょ？ 閉鎖されてるじゃない。きつとここら辺の走り屋が事故でも起こしたんでしょ。」

霊「理解したわ。始めましょう。」

レ「ええ。」

咲「それでは、カウント始めます！」

————— あなたの實力、篤と見せてもらいましょうか。 —————

咲「5！4！3！2！1！GO！」

ドギヤギヤギヤヤヤヤヤ・・・

フ「咲夜。一つ聞いていい？」

咲「なんですか？」

フ「どうして、キャリーカーなんかで来てるの？」

咲「今にわかりますよ。」

————— キャキャキャキャ・・・ —————

————— そしてバトルカッツDE☆SU —————

————— ヒルクライムバトル終了。頂上エネ〇ス付近 22:03 —————

霊「あんた先行でスタートだから、これくらいは妥当よね？」

レ「まあ、そうね。差もそんなについてなかったし。じゃあ、下り。やりましょう。」

霊「ええ、そうね。」

レ「5. 4. 3. 2. 1. スタート。」

——第2いろは坂33コーナーあたり（カイが拓海を抜いたところ）

霊「クソツ、全然速い・・・まるで余裕なんてないわね……！ここ、ちよつと空いてる・・・行くしかない、いつけえ！」

レ「——フ」

霊「——！だめだ、抜けない！どうすりやいいのよ！」

——第2いろは坂最終5連続ヘアピンあたり——

霊「ここで一気にスピードを上げて抜き去る！やってやる！」

レ「あなたにそんなことはできないわ。MR（マジオーラ）出してる私を抜くことは絶対に不可能よ！」

霊「やってやる・・・やってやる・・・。そこだ！」

レ「しまっ！くっ！やられてたまるかあ：絶対に最後の直線で——！！」

霊「!!?何!!?レミのS2000が・・・落ちていく……」

——ゴール付近 22:10——

——ボカン！——

咲「来たわね：魔理沙、フラン、道を開けておいて。」

フ「何があったの・・・？あ、霊夢だ。おかえりー。」

霊「ねえ、咲夜。何か知ってるの？」

第12話 「けんかとバトル」

数日後——幻想レーシングガレージ 15 ; 30——

フ「ねえ、魔理沙。ちよつと、いい？」

魔「ああ。いいが、今日は何を見るんだ？ここ数日、毎日私の車を見てるんだが。」

フ「いいでしょ？私、一応メカニックだし。」

魔「『霊夢の』だけどな。」

フ「むー。」

——キュルルルグロオオオオオン

フ「…………。やつとわかった。こいつが変な理由。」

魔「…………で、なんだ？」

フ「この『カーナビ』だよ。」

魔「それは…………。」

フ「どうする？このまま変なままでいるのか。それとも変な理由を取り除くか。」

魔「……………………。」

フ「わかった。じゃさつそ——（ガシッ）何…………するの？」

魔「もし、おまえが私たちのために思ってやってるんなら、大賛成だ。が、私は何も答えていない。というか、無言の抵抗を見せた。なら——」

フ「……………（その場を立ち去る）」（あなたに許可はとらなくても、これはやるつもりだからな。魔理。）

———— ガレージ 20:00 ————

———— キュルルルグロロオオオオー———

魔「ん？なんだ？こんな夜中に……………まさか！」

———— ドタドタドタ…………—

魔「おい！フラン！何やってる！」

フ「チッ！」

魔「クソツたれがあああああ！（降りてきた勢いでフランを殴る）」

フ「……………！あんたのた——」

魔「もしおまえがフリーのメカニックならいい！買い換えればいいんだからな！だが、お前は我、『幻想レーシング』の一人のメカニックだろうが！それn———なんだ、その顔。ああ、そうか。いいぜ！なら決着はバトルでつけてやろうじゃねえか！」

フ「望むところだ！」

———— ガレージのそば ロビー ————

霊「ふう……。眠れん」

レ「激しく同意。」

霊「そういえばさ、あんたのS2000。どうなったの？最近全然見かけないんだけど。」

レ「ああ、あれね。私がかもともと所属していたチームに申請してみたら、新しいレーシングエンジン探してくれるって。」

レ「——にしても、うるっさいわね……。目がさえるわ。」

霊「ええ。よく咲夜は寝てられるわね。」

レ「そりゃあ、そうでしょ。私と、フランと、咲夜は寮暮らしだから、衣服とかもやんなきゃいけないし。食事とかも半分ぐらいは咲夜が作ってるし。」

霊「それは……。たしかに寝れるわねえ。」

レ「そうね。あ、こっち来た。」

フ・魔「おい！レミ！明後日のの午前0：00。正丸峠でバトル！書いとけよ！（レミアの近づけて言った）」

レ「ヒイイイイ〜〜！！」

霊（かわいい〜）

翌日 午後23：45 正丸峠

妖「あれ、言ってなかったでしたっけ？今日はフランと、魔理沙のバトルをここでやるらしいんですよ。」

幽「ふーん。フランちゃんが・・・ねえ。」

妖「来ましたよ。」

ブロロロロロロロオオオオオオオオオオオオオオオオオ——ン

幽「いけないわね。」

妖「？なにがです？」

幽「フランちゃんに、焦りが見えるわ。勝ち急いでるように見えるもの。」

妖「私には、普通のじやれてる感じに見えましたよ？」

幽「まだまだね。妖夢も。」

妖「・・・。」

——？

フ「クッ。離れない。ぴったりとついてきてる。さすが、魔理。やるじゃない。」

魔「とらえてみせる。絶対に離されるもんか。自分がどんな立場だろうが、関係ない。」

まずは前のやつにプレッシャーをあたえ、隙ができれば——抜く！

フ「！」

魔「チッ、逃したか。まだ、まだいける。」

そして・・・カット

——正丸峠復路スタート地点——

ドギャギャギャギャギャギャギャギャギャギャ・・・

フ（ターンした。いいぜ。）

魔（おう。）

フ「速い——なぜ？私がこんなにも速く走ろうとしても、ちよつとずつ：ちよつとずつ・・・離れていく——」

魔「いいか、フラン。私がこのFDと出会ったのは、運命だった。そう——こいつともな。」

??「魔・・・理沙。」

魔「ハハ。そうだろ？それからこいつに乗るのが楽しくなったんだ。地上にいるのが退屈になるぐらい・・・な。だから、FDのことは、誰よりも知ってる。」

——この『カーナビ』は、FDそのものなんだ：誰かに壊されようと、盗られようと・・・こいつとは切っても切られない存在なんだ——

??「あのー・・・私・・・ちゃ・・・ん・・・とした・・・名前・・・あるん・・・だ・・・けど・・・」

魔「お？そうか。で？名前は？」

ハク「ハク・・・って・・・いうよ・・・よろしく・・・魔理沙・・・」

魔「おう！よろしくな！ハク！」

フ「くっ・・・さらにペースが・・・上がった・・・くそおおお！」

——ガキン！

フ「!!?ぶつかった!？」

魔「？」

ハク「・・・？」

魔「いなくなった：私の・・・勝ちだ。」

フ「・・・。負けた。だめだ。あんなペース・・・私には・・・無理・・・だ。」

——正丸峠往路スタート地点——

霊「帰ってきたわね。お帰り。魔理沙。」

魔「それより、フランの心配をしてやれよ：あいつ、車ぶつけてんだぜ？」

霊「——そうね。」

フ（反応薄っ！）

第14話 「酔いにぐ注意を」

—— 魔理沙VSフランから1日後 ——

霊夢と魔理沙の正式採用を祝い、宴会もとい歓迎会が開かれていた

—— 21:00 宴会場拓(ひら) ——

咲「それでは、魔理沙と霊夢の正式採用を祝って——！ かんぱーい！」
皆「かんぱーい！」

—— 2時間後 ——

フ「zzzzzzz・・・」

レ「さて、フランが寝たところだし、そろそろ裏話なんか聞かせてもらおうかね？」

咲「そうでしゅねえ〜。なんかはなひいなしやいろお〜。

「

魔「うわ、咲夜がデロンデロンに酔っぱらってる。」

霊「そりやそうよ、咲夜はお酒に弱いもの。」

レ「速く話さないよー！」

魔 「レミも何となく酔ってるし・・・」

レ 「酔ってないよってない。幻想郷に来る前にワインたくさん飲んでたから」

霊 「これはひどい。」

咲 「おい！れいみゆ！」

霊 「な、なに？」

咲 「わついと勝負だ！くりゆまで勝負うであ〜」

霊 「い、いいけど、どこでやるの？」

咲 「はい！2ちゆきやぎよのうしゆいちようげでえ〜まつちえりゆわあよお〜（2日後の碓氷峠で待つてるわよ）」

霊 「はいはい。2日後の碓氷峠ね。」

魔 「聞き取れんのか？すごいな。」

霊 「そりや、宴会毎年のようにやってたからね（笑）」

魔 「それもそうだな——って、全員寝ちゃったし。」

霊 「じゃあ、帰りましょうか。こいつら（笑）つれて。」

魔 「そうだな・・・入るかな。車に。」

霊 「入るでしょ。」

その後1日は看病に追われた2人だった——

——宴会から2日後　午前11:30——

フ「ふう〜。」

魔「よう、フラン。休憩か？」

フ「うんそうだよ。……どうかしたの？」

魔「いや、咲夜どうなのかな〜と思つて。」

フ「咲夜？今頃寝てるんじゃない？寮で。」

魔「それなんだけどき、知ってるか？今日、霊夢と咲夜でバトルすんだぜ？」

フ「え!?それ本当？」

魔「ああ、マジだぜ。気に何なら、霊夢に聞いてみな。」

フ「うん!今すぐ聞いてくる!」

魔（そんなに私のことが信用ならないのかよ〜。）

——幻想レーシング（元）ガレージ横——

霊「ねえ？レミリア？私に言うことがあるんじゃない？」

レ「『看病してくれてありがとうございました』と、『付添してくれてありがとうございました』

います』どつち？」

霊「どつちもよ。——ん？フラン？」

フ「ねえ、霊夢。今日咲夜とバトルするって本当!？」

霊「本当よ。」

レ・フ「!？」

レ「え、なにそれ。初耳なんだけど!？」

霊「言つてないもの。あんたの指示が忙しすぎて。」

レ「ちよつとデータ書き換えてくる! フランは咲夜起こしてきて!」

フ「了解!」

——タッタッタッタッタッタ……

霊「行つちやつた。まあ、私がやることといえは車の調整と、碓井の調査だけど。隙を見てやつておいてよかつたわ。——ちよつと眠いから寝ようかな。」

第15話 「エースと罨」

咲「う〜ん。寝すぎたかなあ〜。頭が痛い…。」

フ「お〜〜〜い！咲夜〜！起きて〜〜〜！」

咲「フラ・・・ハッ！バトル！いけない！今日バトルだった！」

フ「気づいたんだ！はやく！」

咲「ええ！」

—— 碓氷峠ダウンヒルスタート地点 午後23：40 ——

霊「来たのね。咲夜、大丈夫？」

レ「咲夜なら大丈夫よ。問題ないわ。さあ、さっさと始めましょう。」

咲「待ってください、お嬢様。現在は宴会から1日後の23：45。私が——」

レ「あーはいはい。要するに、明日が今日になる午前0：00に始めろってことでしょ。」

咲「そういうことです。」

霊「酔ってたくせに細かいのね。」

咲「ええ（怒）。」

13分後

レ「それじゃあ、車を準備して。始めるわよ。」

「(時計を見ながら) 5! 4! 3! 2! 1! GO!」

GOカウントと同時に午前0時になる。

ギャギャギャギャギャギャ・・・

レ「ん? そういえばフランは?」

魔「置いてきたぜ。あいつ、咲夜の部屋で爆睡してたしな。」

レ「・・・。(困惑)」

—— さて、見せてもらおうかしら、これから『God Wings』の石末
となるダウンヒルエースの実力を——

霊「後攻選んだのに・・・なんだろう、この見られている感じ…。嫌な感覚ね。」

咲「フフフ…。私の罠にかかってしまえば、抜け出せるものは…いない。」

C—121プレハブ付近——

リ「・・・? なんだろう。咲夜さんが帰ってきた? この独特なロータリーの感じ。」

——ライトが・・・見える。

霊「抜くといえば、ここぐらいなもんだ！いつけえ！」

咲「こんなところで抜けるわけ・・・違う。ここじゃない。抜くポイントは…C—12
1の次のコーナー！」

霊「耐えた…ちよつと擦つちやつたけど、抜けた！」

咲「向こうが行けるならア——。」

霊「何!?今まで感じたこともないようなプレッシャー…。つらい…走っているのが…
辛すぎる…！」

・・・キャン！キュルキュルキュル・・・

咲「くつ。スピン・・・か。」

霊「逃げ切った…。私の・・・勝ちだ。」

——碓氷峠ダウンヒルスタート地点 午前0：15——

咲「ふう・・・。なんか、すつごい目が覚めたわ。」

霊「よかつたじゃない。」

咲「あんがとさん。(ニコツ)」

霊「こちらこそ。(ニコツ)」

レ「さーて、帰りましょうか。」

皆「ええ。」

——10分後——

リ「あれ、いない——。咲夜さん。あなたはいつたどこへ行くというの——？」

——1か月後 幻想レーシング（元）社長室——

魔「なんだよ。急に呼び出して。」

霊「そうよ。」

レ「来たわね。エースたち。」

——これからは、あなたたちは、新チーム『God Wings』のダウンヒル・ヒルクライムエースとして、活躍してもらおうわね。

——博麗 霊夢 と 霧雨 魔理沙——

設定集

ここは、D w o r l d。頭文字Dや湾岸ミッドナイトといった、架空のアニメの舞台となった世界。

そこでは、あらゆる身体に対する影響（飲酒、風邪など。）に影響されず、安全運転ができた。

例えば、頭文字dで、文太がお酒を飲んでいるというのに、無事豆腐屋に帰ってこれることなどだ。それをいいことに、ここではあらゆる暴走行為が、許されている。ちなみに、自動車関係以外は現在の世界と変わらない。

博麗霊夢 搭乗者種 マツダ ロードスター (N A) 赤

チューニング (参考) 頭文字Dストーリーステージ (以後ストステ) Bコース

地元 秋名 通り名『・・・秋名峠は半分程度しか走ったことがないため、通り名はついていない。

現在はGod Wingsのダウンヒルエース。自分の走りに自信はあまりない。幻想郷とのつながりはあまり感じられない。だが、かなり速い。直感で走るため、勝つためならば、やれるところはとことんやる。

霧雨魔理沙 搭乗者種 マツダ FD3S 黄色

チューニング（参考）頭文字Dストステ Cコース

地元 赤城 通り名『赤城の魔法使い』・『普通の魔法使い』より

現在God Wingsのヒルクライムエース。車と出会ったのは『運命』
 と言いつける。FDにはなぜかカーナビがついており、そこにはハクが幽霊として住んで
 (？)いる。もともとRSに所属し、啓介を負かした存在として、かなり恐れられている。

レミリア・スカーレット 搭乗者種 ホンダ S2000 黄色

地元 いろは坂 通り名『ムーンライトデビル』・『S2000が黄色な
 のと、『スカーレットデビル』より

現在はGod Wingsを取り仕切る社長（的存在）。もともと所属して
 いた研究所の所長である、太子から『幻想郷の住人の確認』を命じられている。性格は
 冷淡。だが、あわてるときはあわてる。バイトをしていたためか、かなり力持ち。

フランドール・スカーレット 搭乗者種 日産 GT-R32 白

チューニング（参考）頭文字Dストステ Cコース ホイール↓ノーマル

地元 正丸 通り名『レインボーウィング』：虹色の羽をときどき出していたことから。(キレたときは必ず出します。)

現在はGod Wingsロードスターのメカニック。幽々子の教えがあるため、基本的なことは完璧にこなす。何か嫌な殺気を感じたときは口をなるべく利かず、走りに集中する。居候の際、妖夢と喧嘩して、バトルで決めようとなったとき、ぶつちぎりで勝ったとか。

十六夜咲夜 搭乗者種 マツダ FC3C 白

チューニング(参考) 頭文字Dストステ Dコース

地元 碓井 通り名『シルバインパクト』：地元のインパクトブルーの名と、咲夜のイメージカラー(だと思っている)シルバーをかけた。

現在はGod WingsFDのメカニック。かなりのロータリー好き。なんと、国内A級ライセンスを持っているため、車に関しての知識はピカイチ。

メイドから解放されたためか、かなりフリーダムに動き、ものすごいことを平気でやろうとする。ショップの名前は『Night Shop』。リグルには修行(?)に行かせているが、現時点では旅立ってはいない。

西行寺幽々子 搭乗者種 スズキ カプチーノ 赤
 チューニング（参考）頭文字Dストステ Cコース

地元 正丸 通り名『軽'sドリフト』・・・言わずもがなドリフトでほとんどのコーナーをクリアしているため。

Dワールドを来ようと決めた張本人。ゆっくりな感じは変わらず、でも走りは超一流。滑りやすい正丸でも、逆にスピンを生かして走る。

魂魄妖夢 搭乗者種 日産 Z32 銀

地元 正丸 通り名『走り屋修行中』

Zが仕上がってないため、まだどれだけ走れるかはわからない。幽々子の世話に追われている。

八意永琳 搭乗者種 不明

地元 不明 通り名『』

まだわからないことが多い。だが、幻想郷時代以上に永遠亭組には力を入れているようだ。

鈴仙・優曇華院・イナバ 搭乗者種 トヨタ セリカGT-FOUR 白
 チューニング(参考) 頭文字D ストステ Aコース

地元 不明 通り名『』

師匠思いだが、あまり速くはない。

因幡てゐ・蓬莱山輝夜 すべて不明

秋静葉 搭乗者種 マツダ ロードスター(NA) 赤

地元 いろは坂 通り名『いろはの神様』・・種族が神様だったことと、

キレるとものすごく速く、「いろはで最速を目指すなら倒さなければいけない存在」であつたから。

口調が甘いのはご愛嬌。レミリアとコンビで、『God And Win
 g』と呼ばれていた。

豊郷耳神子 搭乗者種 不明

地元 いろは坂 通り名『』

静葉、レミリアがいた研究所の所長。一応規律には従うが、甘いところも

ある。

秋穰子・ミスティア・ローレライ　すべて不明

リグル・ナイトバグ　搭乗者種　トヨタアルティツア　緑

チューニング（参考）　頭文字Dストステ　Cコース

地元　碓井　通り名『復活の虫けら』・・・もともと虫（の神様）で、現在も触角が残っているため。

もともと咲夜が建てていたシヨップ唯一のメンバー。だが、店長（咲夜）がいなくなったため、実質解散した。咲夜に指令された峠周りは、まだ実現していない。

博麗千代　搭乗者種　ホンダ　シビック（EG6）　赤

チューニング　無限ホイールのみ

地元　ターンパイク（最終に確認されたため。）　通り名『』

もともと、霊夢の母親（？）だった人。現在、どこにいるかは不明。

VS月の兎編

第16話「月の兎」

——動き出した、私の計画……。もう、止めることなど、できはしない——。

——『God Wings』誕生から1週間 サンドガレージ《元幻想ガレージ》

—— 舎内の会議室 9：45 ——

ここでは、次回の遠征相手について、話し合い（会議）が行われていた。

レ「で、今回の相手なんだけど。永遠亭。言わずもがな月のうさぎと戦うわ。……フランとは結構かわりが深いわね。」

フ「何言ってるの。私とかかわり深いのは白玉楼のほうだよ。」

レ「それもそうかもね。で、ステージのほうだけど。埼玉県の定峰峠よ。ほら、エースたちビデオ渡しとくから見といてね。」

レ「ミアがダブルエースに事前に撮っておいた、定峰峠のビデオを渡した。」

魔「へいへい。」

霊「私の家にテレビがないんですがそれは。」

レ「知るか、んなこと。じゃあ、5日後。向こうに向かうから。」
咲・フ「はい。」

魔「ほいよ。」

霊「ぐぬぬぬ。」

——その日の夜 埼玉定峰——

鈴仙「師匠・・・行つてしまわれるんですか。姫様も一緒に。」

永琳「もちろんよ、姫様もそうしたいんでしょう？」

輝夜「ええ。神奈川のほうは、なかなかいい技術があるみたいだし、私自身を立て直すにもとてもいい場所だと感じたから。」

てゐ「えーりん・・・。」

永「てゐ。ちよつと来てちようだい。」

て「?。」

——永遠亭(仮) ガレージ——

ガレージには、永琳が事前に作った、プロカー(?)があった。

て「・・・!これって・・・。」

永「あなたに差し上げるわ。」

て「でもっ・・・。これは師匠の・・・!。」

永「いいの。たった今からあなたのなのよ？幻想郷にいたときはよくやったじゃない。」

て「……。(泣)」

永「ふふふ……。この車を頼むわ。てゐ。」

て「はい。(泣)」

てゐは涙をポロリポロリと流し始める。

永「頼んだわ。ふふふ……。どうしたの？てゐ？」

て「……。」

——5日後 埼玉県定峰峠ダウンヒルスタート地点

レ「ふう……。やっとついた。」

咲「フランをスカウトするときに来てたんじゃないんですか？」

レ「アンマリダ。」

咲「じゃあ、挨拶行ってくるもので指示しといてくださいね。」

咲夜が、プラクティスの前のあいさつに行く。

咲「こんばんは。」

鈴「はい。こんばんは。通達は来てますよ、プラクティスするんですよね？どうぞ。」

咲「では、さっそく。」

咲「やってきましたよ。」

レ「ええ、じゃあ早速やり始めましょう。霊夢。魔理沙。会議で言った通りよ。」

魔「あれだろ？60%が2本、80%が3本で、ラストに一回マジで走って終わりなんだろ？」

レ「そうだけど、ちゃんと道の状況とか、コーナーとか見てくるのよ。」

魔「へいへい。」

霊「承知のうえよ。」

・・・・ギョルルルルグオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

2台のエンジンが目覚めるようにかかる。

——FDの中

咲「じゃあ行きましょうか。」

魔「ええ。」

——ロードスターの中

フ「じゃ。」

霊「うん。」

・・・・グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

レミリアはそれを見送り、ポツリとつぶやく。
レ「さて、どんなもんかしらね。」

——
チーム『月の兎』さん
——

て「なんでもないよ……。今日は……。勝とうね、鈴仙。」
鈴「……。うん。」

——定峰峠ダウンヒルススタート地点 午後22:00——

レ「じゃあ、ダウンヒルからスタートするってことで。」

鈴「うん。私が先行で。」

鈴仙はてゐのことを気にせず、むしろ、てゐのために勝とう。そう思っていた。

て「……。。(ため息)」

霊「さっさと始めましょう。」

レ「じゃあ、並べて。」

「5!4!3!2!1!GO!」

——じゃあ、始めましょうか……。真の戦いつてもんを——。

鈴仙は早速、あるものを使い始める。

「……。キユキユキユギユギユウウウ

霊「……。?なぜかコーン……。が!うわ!」

霊夢にはぼやけてコーナーが見える。それは鈴仙特有の凶器。『レッドアイ』のせい

だった。

鈴「これで最後よ！」

霊「クソツつ……。——ふう……。抜けたあ……。」

ガードレールすれすれでコーナーを抜けるロードスター。鈴仙は不満であった。

鈴「ちつ。逃したか……。」

霊「そんなことするのね……ここの走り屋は……。いいわ。やってやろうじゃない。」

霊夢のロードスターは鈴仙のセリカの後ろにピタリとつけ、ヘッドライトを消した。さらに、霊夢自信も目を閉じていた。

鈴「ここのらでブラインドとは……。ふん。舐められたものね。ここから先はかなり街灯がある……。あんたは消えてるつもりでしょうが、こっちはそっちが丸見えなんだよ！」

霊（鈴仙のやつ……。きつと私のこと馬鹿にしてるでしょうね。でも、こっちはこっちでちゃんと策がある。だてにエースの名を名乗ってるってわけじゃないことを見せてあげる）」

——ゴール付近

鈴「……。まだいる！なぜ……。離れない！」

霊「は、はあ。『なるべくぶつからないように走る』とか？」

レ「不正解。正解は、『車を犠牲にしても、速く走る』よ。」

霊「…！」

レ「フフ。あなたもそうしてみたら？」

キヤキヤキヤ・・・ぐおおおおお———ン

霊「さあ、スパートだ！」

鈴「・・・！振り切られる…でも、この先はきつい右コーナー。そんなスピードで曲がれるはずない！まさか・・・自爆に陥ってくれるとは…勝った。」

霊「あのモットー。少しぐらい無理をしたって、速いスピードで抜けられれば、結果的にはとても速い。つまりコーナーギリギリ曲がれきれなくても・・・」

・・・ガン！

霊「ぶつけても、リズムを崩さずに走れば早い段階でちぎれる！」

右のバンパーを少しぶつけ、走り去るロードスターに続き、安全なスピードでセリカも続く。セリカが抜けたとき、もうロードスターの後ろ姿はなかった。

鈴「うそでしょ・・・。こんなに早くちぎられるなんて・・・。」

— V S 鈴仙（通り名 凶器のレッドアイズ） 勝利 勝因置き去り —

第18話「大事な人」

——埼玉県定峰峠 ヒルクライムスタート地点

RSメンバーから恐れられ、至高の存在として育った魔理沙にとって初めての試合。魔理沙は気合十分であった。

魔「さーて。次は上り。私の出番だな！」

フ「頑張ってるね！」

咲「FDの準備はできてるわ。」

魔「よし……あとは相手の問題だな。」

フ「……？」

魔「みろよ。」

鈴「ごめんね。てる。負けちゃったよ。」

て「言われなくてもわかってるよ。ただ……」

鈴「ただ？」

て「なんか……うまく言えないけど……。気持ちが悪くないんだ。」

咲「カウント行きます！」

「5!4!3!2!1!GO!!」

—— わかって見せる。あんたの言った真の意味ってやつを——

魔「さーて、路面の悪い環境。それに相手は4WDのインプレッサと来たもんだ。どう攻めつかない。」

て「なんか、とつても楽な感じ……。楽しい。右足がうづくよ……。いつでもフルブースとはかけられる。でも今は我慢。ラストの直線で引き離す……」

魔「チツ。まったく、パワー馬鹿とはこのことだぜ。かなりやってあるな……。だが、こつちも負けてないぜ！」

ハク「う……。ん。がんばれ……!」

魔「おう！」

—— とあるギャラリーコナー——

モブ1「うおー!すげーな！」

モブ2「どつちもハイレベルなバトルしてやがるぜ！」

??「どうだい?魔法使いを見た感想は。」

?? 「何とも言えないねえ。何かが足りない。まだ覚醒してない感じだよ。」

?? 「やっぱり、あんたもそう感じるか。あたしもそうだよ。」

?? 「フツ」

グオオオオオオオオ——ンキュル

魔 「このコースのリズムは大体頭に入ってる。だから、向こうのリズムに合わせればいいんだ。」

て 「まだついてくる・・・？もしかしたら、私が思ってるより・・・速い？」

て めは少しずつ、少しずつ、焦り始める。FDがものすごいペースでヘッドライトをぎらぎらさせているのだ。無理はないだろう。

魔 「さーて、中盤セクション。ここらで抜ききってやる！」

て 「・・・。ちよつとずつペースが上がってきてる…。でも、向こうは私のペース以上は上げられない。何せこの巨体だ。向こうもなかなか幅がある。だから、こんなところ——」

魔 「中盤セクションの終盤。わずかに道幅が開くところがある。私はそこを——突く！」

魔 理沙のFDが一気にペースを上げ、ギャラリーコーナーすれすれで間に入ってくる。

モブ3 「あぶねえ〜!」

モブ4 「あそこまでして勝ちたいのかよ!」

モブ5 「馬鹿っ!ここでペースを上げなきや、上の直線でちぎられるに決まってる!」

て「な!?!外から!?!でもな・・・こんなところで：抜かれはしない!」

魔 「レミアアから教えてもらったペース配分的には、もつとも上がるところがここなんだ!抜いてやる・・・絶対にぬいてやる!!」

て「・・・!!壁が・・・!」

—— キュキュキュ

ブレーキング勝負。負けたのはてゐだった。内心勝ちたいとは思っていても、本能がそれを受け付けなかったのだ。

魔 「弱さが出たか。そんなら容赦なくちぎらせてもらうぜ!」

て「何このペース!まともについていけない!」

—— VSてゐ(通り名クリスタルラビット) 勝利 勝因ぶち抜き ——

—— ダウンヒルスタート地点 午後23:10 ——

て「ふう。負けたあ。」

魔「お疲れ。てゐ。どうだ今の気分は？」

て「敵に言うのもあれだけど、すごく清々しい気分だよ。ありがとう。」

魔「おう！それはよかつたな！」

て「うん！」

レ「じゃあ、そろそろ引き上げるわよ。」

ブオオオオオオオオオオオオオオオオオオ——

鈴「どうしたの？清々しいなんて言っちゃって。」

て「いいじゃん。自分が感じたんだしさ。」

V S もこけーね編

第19話「着火」

——V S 月の兔から7日後 サンドガレージ舎内——

魔理沙はてゐるの事を思っていた。天気曇りがちだった。

魔(てゐ、うまくやつてつかない。まあ、あの分なら問題ないんだろうけどな。)

レ「おつ、魔理沙。ちょうどいいところに来たわね。これ見て。」

レミアが持っていた新聞を見せる。

魔「ん? どうした? これか? 『明日の降水率 80%』!？」

レ「そうよ。明日は遠征の日だってのに。」

魔「そりゃ、まずいな。雨の中で本気で走れるやつなんて、そうそういないと思
ぜ。」

そこに霊夢が通りかかる。

霊「ん? 何? 明日雨なの?」

魔「お、霊夢。そうなんだぜ。明日と明後日は雨の可能性が高いらしいんだぜ。」

霊「ふーん。いいことじゃないの。新しいデータが取れることだし、ねえ? レミア?」

レ「あんたねえ・・・プラクティスの時だけ降るならまだしも、バトルの時も降水率高いのよ？そりやあ不安にならないわけないじゃない。」

霊「うゝん。言われてみれば。」

魔「そういうえばレミ、バトルの相手って基本的にどうやって決めてるんだ？」

レ「そうねえ。『基本的』にはこつちから申し込むって感じにしてるわ。でも、今回は違うの。」

魔「あつちから申し込まれたわけか。」

レ「ええ。これが証拠よ」

レミリアが持ってきた手紙は、毛筆で書かれたものだった。

魔「ほう、なかなかのもんじゃないか。」

『 拝啓 God Wings 社長 レミリア・スカーレット様。』

早春の候、貴社のますますのご清祥のことと思います。

さて、こちらのもとに、もともと幻想郷にいた住人を探し、バトルを申し込んでいると聞きました。

こちらには、チームもこけーねとして、『藤原妹紅』『上白沢慧音』

チームR&Rとして、『河城にとり』『鍵山雛』がいます。

ぜひバトルを申し込まれてください。10日後の八方ヶ原でまっています。詳しくはインターネットをご覧になってください。

敬具

上白沢慧音

』

れ「でもね、このチーム。よく調べてみると、レーシングチームなのよ。」

魔・霊「えっ!？」

レ「ここにはあまり詳しく書いてないからどっちが走るのかわからないし。それだけ、もこけーねのドライバーは慧音、メカニックは妹紅。R&Rのドライバーが雛、メカニックがにとりつてこともわかったんだけどね。」

魔「謎すぎ。怖すぎるぜ。」

レ「この手紙、表向きはかなり神聖なものだけど、よくよく調べると、相手にもものすごくプレッシャーを与えるものなのよね。」

—— 同時刻 栃木県八方ヶ原 ——

慧音は、数日前に彼女の車であるNSXをスピンさせ、事故。全治2か月の負傷を負ってしまっていた。

け「いや、すまないね。妹紅。私があんな事故をしたばつかりに妹紅を走らせることになってしまつて。」

も「いいんだよ、慧音。私は公道でやろうと決めたときにちょうどこんなチャンスが転がり込んできたんだ。むしろうれしいよ。」

け「なにその、『事故つてくれてありがとう』みたいな言い方。」

も「いいじゃないか（汗）」

け「で？どうなの？あんたの86のほうは。」

も「いい感じだよ。中古の拾いもんだつていうのに、エンジン積み替えだけでこんなに馬力出るもんなんだね。」

け「まあ、そのせいと私の事故でチームは絶賛閉鎖中だけだな。」

も「あはは。（汗）ところで慧音。もうちよつとだけ付き合ってくれないか？あとちよつとで覚醒しそうなんだ。」

け「いいよ。それじゃあ、行こうか。」

も「うん。」

・・・ブオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ——ン

も「あとちよつとなんだ。あとちよつとで、着火しそうなんだ。この上がってくる感

じ——いける。」

ブウワサツ！

も「来た！できた、よし！明後日のバトルはもらった！」

け「お、おい。雨が降ってきたぞ。妹紅。」

も「ふうふう。そろそろやめようか。慧音。明日遅くに来る予定なんだよな？そのG od Wingsっていうチームは。」

け「ああ、そうだよ。妹紅が目覚めて、ますます楽しみになってきた。楽しんでやろうな！つてててててててて……」

も「まずは、その傷を治すことのほうが先だよ。じゃあ、また病院まで送ってくよ。慧音。」

け「すまないね。妹紅。」

第20話「雨のプラクティス」

閑散としたサンドガレージに、5人の人々が乗り込んでくる。それぞれ、レミリアは1号車（ロードスターのパーツ搭載車）、フランは2号車（FDのパーツ搭載車）、魔理沙はFD、霊夢はロードスター、咲夜はFCに乗り込む。

霊（さーて、行くわよ。）

ロードスターのエンジン音が響いたのとほぼ同時に他の車のエンジンもかかる。そして、ゆっくりとシャッターが上がリ、夕暮れ前の紅くなりかけた空が広がる。

（栃木のほうは雨が降っているのだろう。）

そう誰しもが思いながら、ゆっくりと車を前に進める。この時、前話から、1日後の午後15；30分。今日は今もこけーねとの対戦の日だ。

—— 同時刻 栃木県八方ヶ原

け「どうだい？86の様子は」

慧音がそう話しかけると、妹紅が振り向かずに、

も「ああ、調子がいいよ。今日の夜が楽しみでしょうがない。」

け「そうか。わたしもそわそわしてる。」

会話はそれだけだった。それだけでもとても意味のあるものだが。

——栃木県八方ヶ原 午後21:00——

いつもは静寂につつまれているこの峠で、今日。何かが起こる。そんな空気がここを包み込もうとしていた。

フ「いつも以上にギヤラリーがわいてるね。やっぱり、レーシングチームだからかな？」

フランは何となく、いつもと違う感覚を感じた。

フ（まあ、いいか。）

——八方ヶ原往路スタート地点——

フ・レ・魔・霊「!？」

皆驚愕するのも無理はない。なぜなら、ドライバーである慧音がギブスをしているのだ。

レ「え!?!慧音。だいじょうぶなの?」

け「なーに。気にすることはないさ。私は今日は走らないから。走るのはこっち。」

慧音はそういいながら、妹紅を指さす。妹紅は不服そうな顔をしている。

も「私で悪かったな。まあ、これでもそれなりの知識を持つてるつもりだけどね。で?今日はどっちが私の相手をしてくれるの?」

レ「違うって、何が？全然普通通りじゃない。」

フ「え!?なんで!？」

フランは言いながら、レミリアのうえに乗り上げる。

レ「え、な、何よ!？」

フ「だってさ？咲夜はFCで来るし、どっちか一台でやるって言ってたのに1号車2号車どっちも持ち出すし、きつと何か変だよ!」

レ「そんなことはないわ。フラン。両方持ち出したのは、魔理沙に希望を持たせるためよ。」

フ「魔理沙に…!」

フランはレミリアの顔をひん曲げようとかかる。

レ「ちよ、ちよっと!」

フ「あんたねえ・・・社長気取りでやってんじゃないよ!言い方が悪いのかもしれないな。確かに魔理沙は負けしか考えられないような顔してたよ!?!でもさ、希望っていうぐらいなら、もっとパーツを積みなよ!私2号車の運転だったからまるっ遠見通しだよ!」

レ「わ、悪かったわ。」

ドアがガラツと開く。

フ・レ「!？」

霊「はい。そこまでー。フラン。セッティング見て。」

フ「う、うん。わかった。」

そういつて、3人が外に出てくる。

魔「ん？なんかあつたのか？霊夢。」

霊「ううん。なんでもないわ。それより、大丈夫？顔。」

魔「ああ、問題なくなつたぜ。レーシングドライバーだつてことで、ちよつとビビつてたのは本当だけど、なんか。ほつとしたぜ。」

も「ほつとしたつて、何がだよ？」

魔「も、妹紅。そ、それはだな…。」

も「ふん。まあいいか。」

もう一度魔理沙の顔が悪くなる。

霊「ほ、本当に大丈夫なの？」

魔「やつぱ、ダメだ。休んどく。霊夢、私がおびえてエースとしてどう思う？」

霊「別に。」

魔「じゃあ、言つておく。お前は『メカニックだから』とか、『86だから』とか思つてるかもしれない。だが、舐めない方がいい。絶対に何かあるぜ。100%出せるよう

にしといたほうがいい。」

霊「言われなくても、そのつもりよ。」

第21話 「レインレーシングバトル」

——翌日 午前10:00

VSもこけーね戦当日ということもあり、昨日以上にギャラリーが集まっている。：
こんな朝から。

魔理沙はあのと2号車で寝込み、今起きた。

魔「ふうう。よく寝たぜ。うーん。なんか、昨日は申し訳ないことしたな。どうせ今日は走るわけじゃないんだし、久々に裏方としての活躍か。・・・ん？」

フランが何か寝言を言っているようだ。

フ「むにゃく。魔理沙ーやったねー。」

魔「・・・フラン。ごめんな。」

魔理沙は申し訳なさそうに言い、再び眠りに付く。

——同日 午後21:30 八方ヶ原

レ「さて。じゃあ早速、今日走るメンバーを発表するわ。——今日走るのは、霊夢よ。」

フランは放心した。（ロスタのメカニックだけど。）

フ「……」

魔「フラン。ごめんな。」

フ「いいの。個人的なものだから。」

フランは魔理沙に微笑む。その微笑みは期待を裏切ることをわかっていたかのようにだった。

霊「わかったわ。」

も「じゃあ、並べてスタートする感じで。」

レ「ええ。じゃあ、霊夢。」

霊夢がうなずく。2台の車が少しずつ移動し、看板の前で止まる。相変わらず雨が降り続けている。昨日よりは弱まっているようだ。

レ「それじゃあ、始めるわよ！」

「5!・4!・3!・2!・1!・GO!」

2台がレミリアアすれすれを通過し、1コーナーに入る。

霊（加速では負けてない。ならたぶんいける!）

霊夢の思惑どおり、1コーナーの勝負は霊夢が制した。

も「……!やっぱりだめか。」

第1セクションはテクニカルセクション。細かいコーナーが続くため、当然小回りの

利くロードスターのほうが有利。

霊「うん。ちよつとずつだけど離れてってる。前のバトルよりは楽そうね。」

も「やつぱり離れてる。やつぱり伊達じや無いっほいな。エースの名は。」（今は我慢だ。3〜4セクションで仕掛ける。）

第1から第2セクションに移る。今まで細かかったコーナー群が一気に広がる。さらに雨が降っているため、第1で使いすぎたグリップがじわじわと無くなっていくセクションだ。

霊夢もその一員だった。

霊「・・・！何!？」

も「フツ。かかったみたいだな！」

ここはレミアアのモットーは通じない。そのことが分かった霊夢だが、時すでに遅し。隣には86の特徴的なヘッドライトが光っていた。

霊「クツ！」（譲ってやるわ！でもすぐに抜き返す！）

も「フツフ。面白いやつだよ、まったく。まあ、やれるだけやってみりゃいいさ。」

第2セクションに入る。VS智戦で智が86を抜き去ったスネークヘアピンがある。

霊夢はそこで抜こうと考えていた。

—— 1つ目。

霊（ここであるべくスピードを稼いで…。）

—— 2つ目。

霊「ここだ！」

も「甘い！ 甘いんだよお！」

霊（クソツ！）

—— 3つ目 4つ目

霊「抜けなかった。」

も「往路はもらったよ。」

霊「まだだ！ まだ終わったわけじゃない！」

第3、第4セクション。霊夢はこれでもかと様々なところで仕掛けたが、ことごとく失敗した。まるでそれが完璧に見えるかのように。

—— 往路スタート地点

レ「霊夢。やれてるかしら。」

魔「大丈夫だと思っぜ。あいつなら、絶対に先頭走って帰ってくるさ。」
レ「そうしんじたいわ。」

——復路スタート地点

も「ターンだ!」(…:まだ張り付いてる…だと!?)

仕掛けて失敗したとはいっても、遅れているわけではない。ぴったりと張り付いたロードスターが目をぎらぎらさせていた。

2台同時のターン。両方から車がスピンし、折り重なって交差し、復路に入る。

も「復路って言ったって、何も変わりやしない。ぜったにこのままゴールする!」

霊(タイヤは使い物にならないし、レミのモットーも使えば失敗する。やはりレーシングチームね。だけど!)

第22話「鳳凰」

——復路スタート地点

パイロンを中心に、2台がターンしていく。それをフランは黙ってみていた。

フ「・・・」

咲「どうしんです？黙ってみていて——」

突然、フランからポタツと涙が流れ、地面のアスファルトにしみこむ。

咲「!？」

フ「咲夜？よくわかんないんだ…。よくわかんないのに、なぜか涙が流れちゃうんだ。不思議だね。魔理沙が走ってても、同じことになるんだろうね、たぶん。」

さつきまで流れていた涙が話した途端、ピタツつと止まる。

咲「妹・様」

フ「その呼び方、辞めてって言ってる。」

咲「あ、はい。」

——復路の第1セクション

往路側では第4セクションにあたる。先ほどまではなんでもなかったはずのコーナー群がいきなりでつかく見える。上りだからだろうか。

も「離れ・・・ない!?!」

霊「ふん。」

霊夢は、ものすごい目で、86を睨み、（抜かしてやる・・・抜かしてやる・・・）そんな目でぎらぎら86を睨んだ。別に、こうすれば隙が生まれるとかいうことではない。本能。エースとして勝利を果たすという本能なのだ。

しかし、妹紅とて決して負ける気持ちはない。勝つ。その言葉で、頭の中がいっぱいなのだ。だが、だ。

ロードスターが『目』を閉じる。

も「ふん。ブラインドアタックだったってそうはいくもんか!」

霊（こんな初心者みたいな作戦じやいけないのはわかってる。でもツ!）

霊夢も目を閉じる。ロードスターが張り付いていたから、妹紅にはその光景がはつきりと見えた。

も「目を：閉じた!?!クソツ!動揺さたろうったって、そうはいくもんかよ!私は私のラインを行くだけ：それだけなんだよ!」

霊（感じるんだ：奴のオーラを：。）

も「クソツたれええええ！離れろ！何で食いついてんだよ！こうなったらあ……！」
妹紅はロスタの圧力に耐えられなかった。迫る光のないリトラクタブルのライトに
集中力を削られ、限界だった。そして我を忘れ、力の限り翼を飛ばす。

ブウアサツ！

目を閉じた霊夢にも、そばにいたギャラリーたちにも、その光景ははつきりと理解で
きた。紅く、大きく、されど美しい。『鳳凰』と呼ばれる翼である。

鳳凰の存在に気付いた霊夢は、とっさにライトを照らし、その翼を目に焼き付ける。

霊「あれが……魔理沙の感じていたものだったのか……」

鳳凰の付いた86は第2セクションの連続S字コーナを一気に駆け降りる。今ま
でついていけていたロードスターがズルズルとペースダウン……いや、86のすごいペー
スアップによって、その差はどんどんと開いていく。

霊（クツ……タイヤのせいじゃない……。集中するんだ……。絶対に導いてくれ
るはずだ……。）

ロスタは再び『目』を閉じ、同時に霊夢も目を閉じた。

霊（集中……するんだ……）

も「くそっ！まだついてきやがんのかよ！」

そのときであつた。――

スツとロードスターのプレツシヤーが消えた。当然、86のバックミラーにも、ギヤラリーの目にも、見えるはずがない。それは本当に『消えてしまった』のだから。

も「……！」

モブ6「な……なんだ!? 86の後には誰も走ってこないぞ!？」

モブ7「どつかで失速しちゃまったんじゃねえか!？」

――場所は復路の第3セクションに入る。

往路の際、駆け降りたスネークヘアピンを上る。1つ目のヘアピンですべてが決まってしまうようなような、ストレートからの急なコーナー。

霊夢はびつたりと86の後ろにつけ、離れなかつた。――突然、体の中から、熱いものを感じる。炎が上がってくる感覚だつた。

霊（感じる……。ロードスターの中から、ここだつて。ここしか抜き場所はないつて

――）。

そばにいたギャラリーたちも、妹紅も、とてもびっくりした。突然現れたロスタが、『鳳凰』を見せたのだ。

も「!!!なぜあれを！」

霊「も!らったからには遠慮はしない!一気に引き離してジ・エンドよ!」

も「向こうがブラインドできるなら!こつちだつて!」

妹紅の86も『目』を閉じた。

霊「おもしろい!やつてやろうじやない!」

霊夢のロードスターも『目』を閉じた。

奇妙なことだ。どうじにライトを消す2台が争っている。我先にと急ぐさまは決してギャラリーには見えない。なぜならそれは、存在自体を消して走る。

『真のブラインドアタック』なのだから――

――往路スタート地点

魔「来たみたいだぜ。」

レ「ええ。」

ブオオオオオオオオオン。

バトルは……終わった。霊夢の勝ちだった。

も「ふう……。速かったよ……。おつと。」

妹紅がめまいでふらつく。

け「だ、大丈夫か!?妹紅。」

も「大丈夫だ。」

霊「ふう……。ふう……。」

レ「勝ったみたいね。お疲れ様。霊夢。」

霊「お疲れ。」

——その時、1台の車が駐車場に入ってくる。

魔「ん?あのレビン誰だ?」

霊「さあ?」

一人が下りてきて、レミリアに声をかける。

??「あのー。あなたがレミリアさんでいいんでしょうか?」

レ「ええ。そうだけど。あなたはいつたい?」

??「私は——」

大妖精です。

V S F a i l l y S 編

第23話「Big Family 前編」

——八方ヶ原 往路スタート地点の駐車場。

降りてきた人物が大妖精だと分かり、みんなが騒然とする。

大「私…。大妖精です。」

レ「え!?あの湖に住んでた…大妖精!?!」

大「はい。そうですよ。」

も「やあ、大ちゃん。今日も来たんだ。」

魔「え?長い付き合いなのか?」

も「ああ。大ちゃんがなぜか突然来てね。それで相手してたんだよ。……ここ……

?」

大「半年ぐらいですね。」

霊「で、でもどうしてここに?」

大「その前に、ここに来た経緯を話しておきましょう。」

——1年前。私とチルノちゃんは、Family's というチームを組んでたんです。それで、地元・・・というか、最初についた場所である秋名でつるんでよく走っていたんです。それが・・・半年前。突然チルノちゃんに秋名山の頂上に来るように言われたんです。

『大ちゃんへ。』

今日の21:45に秋名山に来てください。プレゼントを用意して待ちます。時間厳守だよ！

チルノより

』

大「あ、チルノちゃんからだ。どうしたんだろう・・・。」

チ『あ、もしもし？大ちゃん？手紙行つた？』

大「うん。来たよ？で、プレゼントってな——」

チ『ううん。それは来てからの お 楽 し み だよ！』

大「えっ。」

チ『じゃーねー！』(ブツツ)

大「チルノちゃん……。絶対なんかある……。」

——あのとき、薄々気づいてはいたんですが……。なんか、プレゼントで頭が
いっぱい……。とにかく、行ってみようって決心して……。行ってみたんです。それが
あんなことになるなんて——。

——半年前 21:40 秋名山 頂上——

大「時間厳守とか言つといて……。チルノちゃん来てないし……。」

——ブオオオオオオオ——ン、ブオオオオオオオオオオン

——5分前に行つて、1分たったころかな。急に、レビン独特の4—AG+ター
ボの甲高いエンジン音が聞こえて。一発でチルノちゃんだつてわかりましたよ。——

大「この音……。チルノちゃんのレビンの音だ……。今から行けばギリギリ……ん？」

——ギリギリ。その言葉がなぜか私の頭をぐるぐるして……。締め付けられるよ

うに痛かったです。もしかしたら――

大（何？なんなの？この感覚。ギリギリなんて普通の言葉じゃない！何で私を締め付けるの!?!）

――そして。チルノちゃんが到着。

秋名山 頂上 21；44

チ「おまたせ。――大丈夫？大ちゃん。」

大「うん。大丈夫だよ。それより、どうしたの？急に私絵を呼び出したりなんかして。」

チ「うん。それなんだけど。はい。これ。」

――ふと、チルノちゃんが私に一つのキーを差し出したんです。それは、チルノちゃんのレビンのキーでした。――

大「え!?!これ!?!」

チ「うん。そうだよ。これが大ちゃんへのプレゼント。」

——それを言われたとたん。私は動けなくなりました。やっぱりそうなんだ。
——

大「チルノちゃん……。まさか……？」

チ「うん。お察しの通りだよ。私はここを離れて茨城に行こうと思うんだ。私は速く
なりたい。幻想郷で言っていたように、最強……いや、最速になりたいんだ。だからね、F
amily'sはいったん解散して、また——」

大「で、でも。チルノちゃんこれからどうやって帰るの？」

チ「うん。それなんだけどね。奥を見てみなよ。」

大「奥？」

——奥には、白いDC2のインテグラが置いてあったんです。それも、だ
いぶチューニングしてあるようで。きっと、もう何度も茨城に行つてるようでした。——

大「……！」

チ「だからね。大ちゃん。さよならしなくちゃならないんだ。」

——チルノちゃんが歩いていく。インテに向かつて歩いてく。何とかしなくちやつて思つて。別れたくないって思つて、必死にチルノちゃんの前に立ちはだかつたんです。

大「でもっ！私と離れる理由にはならないでしょ？だつたら私も行かせてよ。」

チ「だめだよ。」

大「!？」

チ「車見たら、茨城言つたつてことはわかりはず。そこで言われたんだ。『最速めざすならば今のものはすべて捨てなさい。』つて。」

大「そんなの…。」

チ「『言いがかり』なんかじゃないよ。大ちゃん。その人はね、東京から来て、親を捨ててストリートに入ったんだつて。」

——そう言つて、私を押しつけ——

チ「じゃあね、大ちゃん。」

(ボタン)

—— せめて、最後までいいは。いえ、本気でチルノちゃんを止める気でした。前に出て、カースタントのように止めてやろうって思ったんです。ほんとはそんなことできるはずもないのに。——

大(とにかく、止める！絶対止めて、何とかしてやる！考え直してもらおうんだ！)

—— キーを入れてエンジンをかける。チルノちゃんがいじっていいじって、完璧と言われたエンジン音が鳴る。それだけで、本当に号泣しそうでした。——

第24話「Big Family 後編」

——そりや、つるんで走るっていうぐらいだから、チルノちゃんの横にも何度も乗せてもらってますよ。だから、レビンの特性も大体わかってました。大体、ね。——

大「クツ。横と運転じゃまるで、わけが違うけど……。チルノちゃん。待つて。お願い！」

チ「大ちゃん。私だつて本当は、離れたくないよ。ずっと大ちゃんのそばにいて、一緒に走っていたい。だけどね。人には必ず、地元を離れなきゃいけない日が来る。それがどんな理由だろうと、自分が成長できるならば潔く去らなければならぬと私は思うよ。それが今なんだよ。大ちゃん。」

——スケートリンク前を過ぎたあたりから、だんだんペースを上げてきました。苦しかったですよ。今すぐにでも泣きたい。この世から去つてしまいたいとさえ思いました。でも、わかつたんです。チルノちゃんは本当に最速になりたかつたんだつ

て。今までと離れて、最速の名を受けて帰ってくるって。そう信じて、私は中間あたりのストレートでペースを落としたんです。そして、——

大「……うあああああああああ
!!!!!!」

—— 思いつきり叫ぶように号泣しました。 ——

チ「ごめんね。大ちゃん。さよなら。(泣)」

—— 次の日。私はここに来たんです。チルノちゃんが最速になるのなら、私もその友にふさわしい走りをしなくちゃって。そう思ったんです。 ——

大「これが、ここに来るまでの経緯です。」

魔・レ・霊「……。」

も「そうだったな。大ちゃんは悲しい過去を背負って戦ってるんだったな。」

大「ええ。」

霊「それで。どうしてここに？」

大「それが——」
皆が息をのむ。

大「God Wingsの方とバトルさせていただきたくて来ました。」
予想外ではないだろうが、みんな驚く。

レ「え!!」

魔「え!? まじかよ!」

大「本当ですよ。たしか、幻想郷にいた住人を確認に回ってるんですよ?」

レ「え、ええ。そうだけど。」

大「だったら、私は幻想郷の住人だから、バトルする権利あるわけですよ。」

レ「はあ……うん。そ、そうね。」

大「あ、やつぱり、事前予約しといたほうがよかったですかね?」

レ「そ、そんなことないわよ。で、希望とか、ある?」

大「特にないです。」

レ「じゃあ、ちよつと待ってて。」

大「あ、はい。」

レミリアは1号車からおもむろにトランシーバーを取り出し、それを復路スタート地

点にいる咲夜につなぐ。

レ「あ、咲夜聞こえる？」

咲『プーザジャー——プツツ　あ、聞こえますよ。どうかなさったんですか？』

レ「ちよつといい？」

レミアは、咲夜にさつき話された大妖精のことを話し、こう伝える。

レ「で、バトルしてほしいの。大妖精と。」

咲『はい!?!』

レ「だってあなた、FC持ってきてるわよね？」

咲『え、あ、はい。そうですが。』

レ「だったら、バトルしない理由なんてないじゃない。」

咲『でもm——』

レ「魔理沙は体調悪いみたいだし。第一、相手はレビンなのよ？FDでやったら弱い者いじめみたいじゃない。じゃ、よろしく。」

咲『え、ちよプツツ』

レ「と、いうわけだから。大ちゃん。咲夜が相手するわ。」

大「はい。わかりました。」

大妖精が了解すると、レビンに乗り込むと、エンジンをかける。

グオオオオオオン シュン

今まで白だったレビンのボンネットが、いきなりカーボンに代わる。

皆(?!?)

クロ大妖精(以下黒大)「じゃ、行ってくるよ。レミの姉さん。」

レ「え、ええ。」

レビンは一回ターンすると、勢いよく飛び出していった。

魔「な、なんだったんだ!?あの格好、あの色、どう考えても大妖精じゃなかったぞ!」
も「ああなるんだよ、大ちゃんは。本気になるの色を変えてくるんだ。でも、基本的には変わりはしないさ。」

魔「なるほど、フランとはちよつと違うな…。」

—— 八方ヶ原 復路スタート地点 ——

雨が止み、曇りの空になった。路面は少々濡れ油断できないような感じを醸し出している。

先ほど連絡を受けた大妖精が向かってきた。その前顔は、怒っているかのようにだった。

大妖精がレビンから降りる。しかしそれは、別の何かのようだった。真っ黒の髪。妖

精じゃないようなダークな服。しかし、顔ですぐわかった。

咲「あなたが…大妖精…?」

黒大「ああ、そうだよ。あなたと勝負するから…。いわゆる、コスチュームチェンジつてやつかな。」

フ「そ、そんな風にはとても見えないよ…。なんか、すっごい存在感。」

黒大「そうかな?」

咲「じゃあ、始めましょう。で、カウントは誰がやる?」

フ「私がやろう。」

咲「それはだめですよ。だって、あなたには同乗してもらわないといけないんですし。」

フ「あ、そっか。」

黒大「誰かカウントしてくれる?」

黒大妖精が、ギヤラリーに呼びかける。ふと、誰かが手を挙げ、こっちに来る。

黒大「あんたがやってくれるのか。じゃあ、よろしくね。」

A「はい。じゃあ、並べてください!」

その合図とともに、レ빈はターンし、FCはエンジンがかかる。

A「カウント行きます!」

「5!4!3!2!1!GO!!」

その合図とともに、FCとレビンは勢いよく飛び出す。

咲（私だつて…伊達にドライバーやってたわけじゃない。）

—— 見せてあげましょう。かつて碓井最速といわれたドライバーのテクニックを

黒大「最初は、連続コーナー。プラクティスであんたはセッティングに専念してたみたいだな。セッティング聞くだけでどれだけコースを把握できるか試させてもらう。」

第1セクションの連続コーナー群は、基本的には小回りの利くレビンのほうが有利のはずだが、何かが違う。

大妖精は何度もバトルを積んでるため、車の特性をある程度把握しているつもりだった。だが違う。いつもならほんの少しづつはなれるはずのFCが、逆に射程圏内にいるのだ。ギラギラと光るライト。しかし、焦る様子は全くなかった。

黒大（フン。God Wingsといえど、その程度でプレッシャーをかけたつもりな

のか。)

咲「こいつ…あんまりやらないわね。」

フ「え…そうなの？」

咲「そうですね。かなり勝ち急ぐ焦りが見えるし、しかもラインが踊ってる。これは、なるべく速くバトルを終わらせた方がよさそう。」

(次の第2セクションのS字を過ぎて、急に道幅が広くなるところで仕掛ける。どれだけ耐えられるかしら?)

相変わらず、FCとレビンは密着している。コーナーで離れようもんなら、ストレートで返す。

FCが一向に離れないのに、大妖精はいらだち始めていた。そもそも、このレビンはチルノからもらったものだ。だから。

黒大「何で…離れない?クツ。思ったより速い相手なんてこれまでいくらでも経験してきたじゃない!でも…。いや、だからこそ負けられない。チルノに会って勝つまでは誰にも負けられないんだ!」

問題の場所に入る。FCがペースを思いつきり上げ、仕掛ける。レビンはそれに合わせ、ペースを上げる…。かと思いきや、譲った。負けを認めたのだ。その少し前。黒大妖精にははつきりとチルノの声が聞こえた。

チ『大ちゃん…?』

黒大「!?チルノちゃん?」

チ『勝ち急いじゃダメ。ゆつくりとマイペースで。でも、ラストにしつかりと上げてくる。そんな大ちゃんが私は——』

大妖精のレビンが元に戻る。正気を取り戻したのだろうか。

大「ごめんね…チルノちゃん。私…間違ってたよ。」

そうして、バトルの決着があっさりつく結果となったのだ。

第24, 5話「とあるエンジンノック」

大妖精がペースを落としたのちは、特にバトルに動きはなかった。

(というかバトルじゃなくなってる)

—— 八方ヶ原 往路スタート地点駐車場 ——

大「私の…負けです。恐れ入りました。」

咲「あなた、後ろから見ると、結構走りが甘いわよ。」

大「やっぱりそういうのわかっちゃいますよね…。さすがGod Wingsです。」

大妖精はうつむき、こう言う。

大「あの、良ければなんですけど…。」

レ「ん? どうしたの?」

大「一緒に群馬まで付き合ってもいいですか? 来たはいいけど、帰れなくなっちゃつて。」

も「え、ずっとここにいるんじゃない?」

大「変わったんです。上には上がいるんだから、自分をやれるところまで鍛えぬく。

限界決めるのはいけないことなんですけど…とにかく、地元に戻りたくなかったです。」

も「わかったよ。いままで、ありがとう。大ちゃん。」

大「はい！」

レ「じゃあ、帰るわよー！」

その合図で、God Wings 側が動き始める。一齐に車に乗り、それぞれのタイミングで駐車場を出る。

大（ありがとう、これまでの自分。）

大妖精は、心でそう言い、半年の黒い自分に別れを告げた。

—— サンドレーシングガレージ ——

レ「ん・なにか、手紙が届いてるわね。車からも見えたけど。」

咲「そうですね。誰からでしょう。」

咲夜が手紙を開けた途端、仰天した顔をする。

咲「え!? これって：挑戦状って書いてありますよ!？」

レ「え!?! ちょっと貸して！」

咲夜がレミリアに手紙を渡し、レミリアが中を読む。

『 挑戦状 God Wings フランドール・スカーレット様

明日 午後20:00 秋名湖秋名峠をつなぐ道路秋名湖側にて待つ。

『

チルノ

レ「これって…フランにじゃないの。」

フ「ん？私に？って…これって、チルノからじゃない。あの⑨が私にバトルか…。いわ。じゃあ、ちよつと走ってくるよ、姉さん。」

レ「大丈夫なの？確かにチルノは確かなそう腕だけど…。遠征から帰ってきたばかりなんだし、あんまり無理しないでね。」

フ「わかつてるよ。じゃあ。」

そういうと、フランはG T—Rに乗り込み、再びエンジンをかける。あの時（奪（r y）授かったときからはかなり太くなったエンジン音になる。

ゆつくりとサンドガレージを後にするG T—Rを後目に、レミリアはガレージのシャッターを閉め、長い遠征の膜を閉じたのであった。

—— 同時刻 秋名山 中腹 ——

遠征から帰ってきた霊夢は、そのまま朝の練習に入っていた。下方から入りヒルクライム、頂上でターンしてダウンヒル、という練習だ。しかし…今日は違った。

中盤のストレートで、軽いエンジンノックが起こった。幸い、霊夢がすぐにそれに気

づき、エンジンを止めた。

霊「エンジンノックか。まあ、私も経験してないわけではないし。軽く応急処置して、終わりにしましょうか。このエンジン2代目だけど、だいぶ使ってるし。」

そういつて、応急処置（エンジンを少し数時間ばかり冷やす）をして、博麗神社（仮）に帰る途中だった。ふと、白のGT-Rが横を過ぎる。それはフランのだと、すぐに分かった。

フ「!? 霊夢が車を押しして帰ってる!?!」

のちにこれはGod Wings史上かなり重要な事件になるとは、この時誰も気づいてはいなかった。――

第25話「ブラックコントロール」

——次の日。フランは戦前の前に一眠りしていた。

そして、霊夢と魔理沙は、前日のロードスターのエンジンノックの本格修復にかかっていった。

魔「まったく、派手にやったな。結構金属が…いてつ。」

霊「そう？ 前回もこんなもんじゃなかった？」

魔「そんな前のこと、ぜんぜん覚えてないぜ。なにせ…もう何年前の話だと思っ
てんだ？」

霊「すまんすまん。」

そう愚痴をたたきながら、まずはエンジンルームの掃除、その後は——まあいろいろ。

一方咲夜は、自宅に無事戻った大妖精に昨日のことを連絡していた。(番号？ タ○ン
○ージで調べたんじゃないかな？)

咲「(プチッ) あ、大ちゃん？」

大『はい。どうしたんですか？ いきなり。』

咲「うん。それなただけど、チルノがここにいらしいのよ。」

大『え!?ほんとですか?』

咲「うん、そうなんだよ。昨日ガレージのほうに帰ってきたら手紙が置いてあつてね。それが、チルノからの挑戦状だったの。」

大『チルノちゃんから挑戦状……。それ、いつなんです?私も行ってみたいんです。』

咲「別にいいけど……。今日の午後20:00。秋名湖秋名峠連絡道秋名湖側だつて。来るのはいいけど……。何かできるかどうかはわからないわよ?」

大『いいんです。チルノちゃんが見れるならそれで。』

咲「はあ……。まあ、頑張つてね。」

大『はい。(プツッ)』

咲「はあ……。今の聞いた?魔理沙。」

ふと背後には、今まで修復作業をしていたはずの霊夢と魔理沙がいた。

魔「ああ、聞いたぜ。なんでも行きやあいってもんでもないと思うけどなー。」

霊「じゃあ、私も行こうかしら。」

魔「はあ?おまえのロスタ。まだ治つてないじゃんかよ!」

霊夢が急いでロスタノ持ち場に戻った。

霊「だから速く治そうって言ったでしょー！ほーらー！」
魔「お、おう。」

それからわずか2時間ほどで作業は完了した。霊夢は疲れ切って寝た。魔理沙も同じく。

レミリア？寝てますよ、さつきから。

咲「襲うんだったらご自由に。」

おお、怖い怖い。

午後19：30 秋名湖

フランは30分も前に秋名湖に入った。コースの感じをつかむためだ。ついでに霊夢も付き添いでいた。

フ「なんか、不自然だね。」

霊「なにが？」

フ「だってさ、いつもプラクティスの時は霊夢が運転席にいるじゃん？」

霊「あ、まあ確かに。」

フ「だけどさ、今は私がいるじゃん。」

霊「あのねえ…。これはあなたの勝負。あなたが運転席にいるのは当たり前じゃな

い。」

フ「そ、そうだよね。」

そう言いながら、フランはG T—Rを軽妙な手つきで動かす。

霊（こいつがかの埼玉で最強と言われたレインボーウイングか…。激しい。すごく息苦しいプレッシャーがかかってる・・・。）

むろん、フランはオーラは放っていない。だが、霊夢がそう言ってるのだからそうなのだろう。

——秋名湖 午後19:55——

フ「来たね。」

霊「ええ。」

道路の向こうから、白のインテと、白のレビンが来る。むろん大妖精とチルノだ。

ボロロロロロロロキユツ

中から2人が下りる。

チ「ふう……。久しぶりだったね。2人でツーリングなんて。」

大「……。うん。そうだね。」

チ「……。?どうしたの大ちゃん?」

大「な、何でもないよ(汗)」

チ「さて…。そっちの準備はできてるね？フランちゃん。」

チルノの目つきが変わる。走り屋の目つきだ。

大「・・・！」

フ「もちろん。さっさと始めようよ。」

チ「じゃあ、この秋名湖を3周して、速かった方の勝ちってことで。」

フ「うん。そうだね。」

霊「じゃあ、始めるわよー！」

連絡道路から出て、秋名湖のコースに2台の車が並ぶ。

「5！4！3！2！1！GO！」

ギユウウウウウウウウウウウウウンブオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

2台が飛び出す。

最初は緩やかな連続コーナー。有利な方といえば、インテグラだろうか。GTRよりは軽い。

しかし、先頭を取ったのはGTRであった。理由は言わなくてもわかるはず。

フ「フツ。先行できたなら、あとはブツチだね。速攻で終わらせてあげるよ。」
チ「フフツ。最後に笑うのはこっちの方だよ。フランちゃん。」

コーナーを抜けると、ちよつと長い直線。そのあとに唯一のヘアピンコーナーがある。

相変わらずの一驚大勢だが、ちよつとずつフランの心境に変化が現れる。

フ「・・・！なんか狙ってる？・・・怖いよ・・・。そのヘッドライト。」

チ「フフツ。なんといかすごいな。そのごつついボディ。それを操るドライバーの繊細さ。でも完璧じゃない。隙が見える。」

ヘアピンに入る。G T Rは減速するが、インテは減速しない。

フ「!?なぜ減速しない!？」

チ「私はわかったんだよ。あなたの弱点。それはコースの幅を十分に使いきれてないことだ!」

フ「クツ。譲るしかない・・・!」

インテがアウトからG T Rをぶち抜く。

フ「でも・・・!見てろ!」

フランがアクセルを全開に開ける。でも、追いつけない。その理由は明白だ。ヘアピンあとは3つの連続コーナー。決してアクセルを全開にしたところで、抜ける幅もな

い。

チ「無駄だということがまだわからないのか。馬鹿はどっちなんだい？フフツ。」

フ「…！よしわかった。遠慮しないぜ！」

2週目に入る。

ここに入つて、G T Rの動きに変化が現れる。

フ「私は…焦っていた。勝たなければ。そうとばかり思っていた。だが今は違う。前と同じフランドールと思うなよ！チルノ！」

チ「ちよつとずつペースが速まつてる。それでこそフランちゃんだ。こつちも遠慮しないよ！」

—— スタート地点 旅館前 ——

大「あの…。霊夢さん？」

霊「ん？どうした大ちゃん？」

大「私と一戦お願いしてもいいですか？」

霊「別にいいけど。どこがいい？」

大「秋名でいいです。」

霊「分かったわ。じゃあ移動して、フランたちが終わったらこつちも始めましょう。」

大「はい。」

そういうやり取りに振り向かず、G T—R V S インテグラのバトルは続く。フランとチルノは抜きつぬかれつのデットヒートを繰り返していった。

フ「ここだっ！」

フランが最初の連続コーナーで前が出る。

チ「こつちだっ！」

チルノも負けじとヘアピンで前が出る。

フ・チ「なんて楽しいバトル……。でも、負けたくない！」

そして、3周が過ぎ……。決着がついた。勝者はフランだった。最後の緩やかなコーナーで前に出たのだ。それにチルノは落ち着いて対処したが間に合わなかった。というのが決着だった。

フ「フ。勝ったあく！」

チ「負けちゃった。でも後悔はしてないよ！ありがとうフランちゃん！」

フ「こつちこそ！」

チ「あれ？でも大ちゃんいないよ？」

フ「霊夢たちどこ行っただろう……。たぶん秋名の峠じゃない？」

チ「そうかもね。行ってみようよ！」

フ
「うん！」

大（え!? ちょっと霊夢さん!!）

大妖精がそう思い、アクセルを踏んだ時はもう遅い。もうそこに、ロードスターの姿はなかった。

霊（しようがない…じゃない。勝手に動いちやっただもの…。大ちゃん。バトルはまた今度にしましょう。）

?? 「フフフ…。あなたの實力試させてもらうわよ。霊夢さん。」
そういう。

第1コーナーから第1ヘアピンまでのコーナー付近はかなりスピードが乗る。そこで並んだ、黄色のシビックと赤のロードスター。

霊（クツ！ 外見からも見えたけど、あいつは間違いなくレーシング仕様ね…。スピードのり方が段違いだわ。）

?? （向こうは県外遠征しようとはいえ、所詮はただのストリートチーム。私たちとはまるでわけが違う!）

霊（クソツ！ まだ伸びるのか!?!）

第1ヘアピンに突入する。ここで、シビックが前に出る。アウト側からコースインしたロードスターで、先ほどの区間で並んでいたわけだから、当然インに入る余裕などない。

だ。高速域で抜けられるはずもなく、ガードレールにロスタのボディをこすり付けて走る。そうするしかなかったのだ。勝つためには。

??（そこまで無理するか……。じゃあこっちもそれ相応の対応をさせてもらうよ。）

第4ヘアピンを抜ける。ここでも直線が速い（仕様の）シビックが立ち上がりを見せる。

霊（くそっ!!何で、何でくつけないのよ!）

誰も助けてくれない走る密室で、霊夢はほぼ極限状態にあった。——その時。

ビチツ

霊「な、何?!?!バッテリー切れ!?なんで!?なんで今なのよ?!」

??（ロスタが遠ざかっていく……。ついに諦めたのか。フン。まあいい。勘弁してあげるよ。）

霊「走れ!!走れ——!!!」

一瞬、バッテリーが元に戻り、再び走り始めるロスタ。だが、それはほんの一瞬だけであった。

霊「何故つ……。」

霊夢はこの時敗北を決したのであった。

といつても、バッテリーが上がっているのだ。帰れない。

——ふとその時。一台の車が止まった。大妖精のレビンだった。あの時からずっと追いかけていたのだった。

大「霊夢さん……。大丈夫ですか？」

霊「だめよ……。バッテリーあがっちゃって。電気ちよつと貸してくれる？」

大「いいですよ。」

そういうと、レビンのボンネットを開き、電気ケーブルをつなぐ。バッテリーを充電するのだ。

霊「あのね……。大ちゃん。必要最低限でいいからね。」

大「分かっています。そんなに貸しませんよ。」

霊「フツ。さすがだね。」

——次の日。

霊夢はおぼつかない足取りでロードスターのもとに向かう。

——ふと、ボンネットに手を触れる。湯気（つぽいもの）が出ていたからだ。霊「あつっ!!!何……。これ。クツソ熱いじゃない！」

そう、霊夢のロードスターにはかなり前から異変が起こっていたのだ。

原因は：『鳳凰』だった。あの技は、エンジンルーム内の温度を急上昇させ、一時的にエンジンの機能を向上させるものだったのだ。妹紅は前日に強弱を調整できるまでになっていたからよかつたものの、霊夢はあのバトルが一番最初に出したのだ。当然調整など利くわけがない。

霊「…。あなたに無理はさせないわ。今日はバスで行くから、ゆつくり休むといいわ。」

そういうと、麓にあるバス停目指して、歩き始めた。

ロードスターのボンネットには飽和となつて出てきた水滴で覆い尽くされていた。

—— 3時間後（ぐらい）サンドレーシングガレージ ——

霊「おはようございま〜す。」

レ「何言つてるの!?!もう午前11:30よ!?!いったい…何があつたの!?!」

霊「いや、今日はバスで来た。そう言えば大体わかるでしょ?」

レ「全然。っていうかあんた元気なそうよ?今日は安静にしてる?」

霊「いや、いつも通りにやって。こうなつてる理由はフランに言えば大体わかるはずだから。」

レ「え、ええ。わかったわ。今日はなるべく緩やかなのにしとくわ。」

霊「ええ。頼む。」

レ「ええ。じゃあ、持ち場に。」

霊「うん。」

そういうと、歩くのが何とかという歩き方で、持ち場に向かう。――

レ「ねえ！霊夢。今日はもう、休みでいいわ。」

霊「えっ……。でも……。」

レ「いいの。減給なんてしないから。ね？家まで送っていくから。」

霊「わ、わかったわよ。そんなに言うならよろしく頼むわ。」

そういうと、レミリアは霊夢を支えながら、S2000のもとに向かう。

レ「あなたのこんな姿見たことなかったから……。いつも元気で。明るい霊夢が見たい

の。ね？」

霊「べ、別に気にすることなんてないわよ？まあ確かに3時間ぐらいかかっちゃったけど……。でも、別にどうってことないわよ。」

レ「強がらないの。」

霊「ハイハイ。」

そういうながら、レミリアは秋名へと向かう。霊夢の元気な顔を見るために。

—— 午後0；00 秋名山 博麗神社（仮） ——

レ「じゃあ今日はゆつくり休んで。明日また来てね。」

霊「うん。」

ブオオオオオオオオオオオオオオオオ

レミリアのS2000を見ながら霊夢が言う。

霊「さて………。寝るか……。」

ブロロロロオオオオオオオオオオオオオオ——ン

霊「できる…はず。」

そういうと、車を赤城方向に走らせる。

その音は悲しみさえ覚えたいわばロードスターの

——
嘆きだった

——
赤城山頂上 午後21:05

魔「ほんとに来たとは。ま、遅刻してくるところを見ると、本当にどうかしてたみたいだな。霊夢。」

霊「はあ…。なにも、今やらなくてもいいんじゃないかって思うんだけど…。」

魔「いや、今日でなきやダメなんだ。」

霊「は、はあ…。で、誰か来るの？」

魔「来るんだぜ…。今日。」

——
奴の通り名は、B・Oだ。Black Organizationだぜ。——

霊 「誰なのよ、それ。」

魔 「次期にわかるさ。——ほら来たぜ。」

向こうから黒のGTR32がやってくる。そして、そこから辺から歓声が沸く。

モブ7 「わー！ボーさんかつこいいー！」

モブ8 「きやー！こつち向いて——！」

魔 「ほら、あいつだぜ。」

霊 「あんなの、どこにでもいそうなGTRじゃない。しかもニスモチューンってところも、また。」

魔 「はあ……。もう私は知らないぜ。私がお前とバトルさせるために呼んだんだからな。」

霊 「は!?何故につ!?ということとは私はどつちにしても周りから批判を受けることになつてたじゃない!!」

魔 「おまえが来たんだからそれはないぜ。」

霊 「魔理沙……てめえ……。あとで絞めてやる。」

魔 「ひううううううごめんさいいいいいいいい!!!」

霊 「だがしかし許されない。」

魔 「うううううううー☆」

霊「おいなんだ今の星マーク（怒）」

そんなくだらないやり取りをしている間に、G T—Rは凱旋走行を終え、頂上に着いた。

モブ10「降りてきたぞ！」

ガチャツ

霊「つてあれは…ぬえじゃやない！正体不明のぬえじゃやない！」

ぬえがこつちに来る。

ぬえ「おやおや、これは博麗の巫女さんじゃないか。お久しぶりなのかな？」

霊「突っ込みどころがいっぱいあるけど…。一つだけ聞かせてもらおうわ。」

ぬ「なに？」

霊「あなたはなぜこんなにも好かれているの？」

ぬ「そんなことか。私はね、魔法使いがいなくなつた隙を見てここの最速の座を奪つたのさ。その狙いどころを見て誰かがB・Oとか言い出したのさ。」

霊（聞けば聞くほどむかつくいい方してくるわね…。）

ぬ「ちよつとそつちの車見てもいいかい？」

霊「あ、ええ。見てもいいわよ。」

ぬえは霊夢に許可を取り、ロードスターに近づく……。しかし、すぐに止まる。

ぬ「霊夢？これ本当に君の車なんだね？」

霊「そうだけど……。どうかしたの？」

ぬ「フ。君はこんなにも車を大事にしないような人じゃないと思うんだが。」

霊「！」

ぬ「しいて言わせてもらうと、私と勝負するような状態じゃないってことさ。」

霊「!!」

ぬ「一目で見えてわかったよ。車に相当無理をかけてるみたいだね。悲鳴が伝わってくる。」

霊「あんたに……。何がわかるのよ！」

ぬ「分かるよ。私のG T—Rだって、こいつの悲鳴を聞きつけて私が代わりに運転しているだけの話。」

霊「あんたねえ……。！」

ぬ「そういうことさ。私とバトルがしたかったら、ちゃんと手入れをした状態でもう一回やろう。それじゃあな。」

ぬえは諦め顔で霊夢に微笑み、G T—Rのほうに向かう。

霊（そこまで馬鹿にされるなんて……）

霊夢も諦めた顔でロスタに乗り込む。

魔「お、おい霊夢！」

霊夢が魔理沙を睨む。

魔「ヒッ！」

G T—Rのエンジンがかかると同時に、ロスタのエンジンがかかる。

霊（・・・勝つ。）

G T—Rが案内所を出た時だった。いきなりロスタが急発進する。

ぬ「ふくん。無理にでも戦おうってか。いいよ、着いてきなよ。けつにつけるもんならね!!」

G T—Rの甲高い音が赤城の山にこだまする。

モブー「な、なんだ!？」

バトルが始まる。2台とも本気のエンジン音を響かせ、戦闘態勢に入る。

ぬ（私のニスモチューン。やられかけのリトラクタブルになど負けるはずがないんだ!!）

霊（・・・!!）

赤城第1ヘアピンからの、車をゆるする低速セクション。ここは、理屈で言えばロードスターのほうが有利だろうが、霊夢は赤城のくだりを一度も走ったことがない。だから真相は誰にもわからないのだ。

ロスタがすぐさまG T—Rの後ろに付き、射程圏内に収める。

ぬ（フツツやっぱりエースだね。ましてや今はものすごく怒ってる。だからそんなに無理をした運転ができるんだ。だけどね、このセクシオンはおそらく赤城峠で一番タイヤを食うセクシオン。そんなんだと、あとあと持たないよ。）

霊（勝たなきゃ……！絶対に……！）

ぬ（まあ、譲ってやるよ。）

G T—Rがスツとロスタをかわし、ロスタは一気に前に出る。

霊（勝つ……）

ロスタは、連続ヘアピンコーナーをちよつとふらつきながらも、完璧なラインどりで駆け抜ける。初めてとは思えないラインどりだが、ぬえは冷静だった。

ぬ（今まで、地元じゃないコースでも、勝ち続けてきたやつだ。それくらいで来て当然だ！）

低速セクシオンを抜け、高速セクシオンに入る。

ぬ（速いと思うけど、もうお遊びはおしまいにしようか。決めさせてもらうよ。）

G T—Rは抜こうとする。だが、抜けない。ロスタが幅寄せをしてくるのだ。

モブ12「なんてやつだ！」

モブ13「そこまでして勝ちたいのか！卑怯な奴め！」

ギヤラリーからブーイングが沸く。だが霊夢はきづかない。というか、一言もしやべらず、思わず、ただただロスタを操り、勝つことだけを祈っていた。

霊（……………!!）

ぬ（ふくん。そこまでして勝ちたいんだ。それじゃ、こつちもそうさせてもらおうよ。）
8番ヘアピン前。GT-Rがロスタに追突した。GT-Rのフロントと、ロスタのバックがつぶれる。

モブ14「なっ！」

モブ15「ボーさんが…キレた!!？」

ぬ（どうせつぶれるボロいロスタなんか、綺麗さなんていらなんだよ!!）

霊（…!!）

ヘアピンに入る。ロスタは事故らなかつたものの、結局抜かれてしまった。

霊（抜き返す…!!）

ここからはS字コーナーが続く。

キレたぬえはものすごく速い。霊夢のような赤城初心者がどうしていたどり着けないようなラインを取る。それにロスタはぴつたりと合わる。だが、じわじわとその差は広がっていく。

霊（追いつけ…!!）

だがしかし、追いつけない。なにせ、FRと4WDの差だ。いくらチューニングしたところで、初心者が到底たどり着けるようなところじゃない。

連続S字を過ぎ、だからだらくへアピンセクションに入る。

最初の連続ヘアピンを過ぎたころ、GTRは完全に見えなくなった。それでも霊夢は必死に追いつこうとする。もはやその顔は、いつもの顔ではない。狂気に満ちた顔であった。

霊（クソツタレ！オイツケエエエエエ!!!）

そう思った瞬間であった。

ボキユン！

霊「！」

ロスタがエンジンブローした。ロードスターがめまいをしたかのように回り、路肩に止まる。

霊（私…！私…！）

——霊夢は…絶望した。自分の愚かさに。自分を取り返しのつかないことをしてしまつたことに。——

第28話「デモカー」

——私は…何をやっていったんだ…ろう。——

落ち込む霊夢。その額からは涙がこぼれぼたぼたとロードスターに零れ落ちる。ボンネットからは、エンジンブローのせいからか、煙が上がっている。

霊「何で…あなたの声が聞こえなかつたんだろう…私。走りに行くつてだけで馬鹿みたいにあなたを乗り回しちやつて。ほんと…。」

——その時。霊夢のうるんだ眼に何筋もの光が差し込む。そちらの方を見る。涙のせいでよくわからないが、大きなレッカー車らしき車が見える。

??「ブローぐらいで泣くなんて。ほんと、ネガティブな考え方なんだから。もつとポジティブに考えなさいよ。」

霊「誰——？」

??「わざわざここまで来たのよ。あなたを迎えにね。とにかく、やれることやつちやいましょう。」

霊「う…うん。」

そう霊夢がうなずく。

うるんだ目がスツと乾く。

霊「か、母さん!？」

千「あれ？ 気づいてなかったの？」

そういう会話をしながらも、作業を進める2人。

作業が終わり、レッカー車に乗り込む。そして動き出す。

霊「ねえ——母さん？」

千「ん？ どうしたの？」

霊「今までどこにいたの？」

千「今から向かうところよ。」

霊「そっか——。」

千「あんだ。自分のせいだと思ってる？」

霊「う—うん。」

千「大当たりよ。でも半分不正解。」

霊「？」

千「あんだのロードスター。だいぶ型落ちなの。だから仕方がなかった。ということ

よ。」

霊「仕方ない——か。」

それから2人は一言もしやべらなかつた。

——目的地 午後21:30——

目的地に着く。そこはある工場だつた。

??「おかえりなさい。で、どう?」

千「うん。やっぱり落ち込んでるみたいね。」

??「そつか。まあ仕方ないね。」

霊夢が下りる。

霊「母さんその人——あなたもしかして蘇我屠自古?」

屠「そうだよ。すぐく落ち込んでるみたいね。こつちへ来て、ちよつと落ち着こう。」

霊「うん。」

霊夢と屠自己はガレージに横付している部屋に向かう。

千代はロードスターを見ながら、

千「また、こいつをどうしようつてのかね。屠自古ちゃん。」

と嘆く。

一方の霊夢と屠自古は部屋に入り、話し始める。

霊「…。」

屠「まずは、ここにいる理由でも話しておこう。私はここで——」

霊「どうせ、修理やらなんやらでしょ?」

屠「そういうと思ったよ。違うんだな。私は、レーシングモデルカー。つまり、各シヨップのデモカーを専門で扱ってる。」

霊「!?そんなんで商売成り立つもんなの?」

屠「成り立つもんなのよ、これが。」

霊「ねえ…。一つ聞いていい?」

屠「何?」

霊「ロードスターのエンジンブローの原因、わかるだけ教えてくれる?」

屠「そうだね…。一目見ただけじゃ…。わからないこともあるだろうけど…。なんていうか…。うん。『鳳凰』が原因だね、たぶんだけど。」

霊「それ…知ってるの?」

屠「もちろん。私は妹紅や慧音とも仲は良い方なんだ。うちのお得意さんだし。」

霊「あいつらの地元って、たしか栃木じゃなかったっけ?」

屠「それは違うね。たしかに本拠地は栃木にあるんだろうけど、あいつらは各地を転々としているんだ。もちろんここを訪れたときだつてある。そうだね——関係と

いえば、『ここにレースでつぶれかかっているエンジンはないか』とか聞いてきたのが始まりだったな。」

霊「!!」

屠「フフ。驚くのも無理はない。デモカー専門だから、どんなエンジン扱っててもおかしくはないさ。」

霊「ここに来たってことは…。私のロードスターも?」

屠「もちろんそのつもりだけど。あなたにはちよつとテストというか、練習をしてもらいたいんだ。」

霊「練習?」

屠「ああ。うちでロードスターを改良している間、あなたにはうちのデモカーを使ってもらおう。かなりパワーアップする予定だから、それを扱いきれなくても、駄目なんだ。あなたには最高の状態で今後のバトルに臨んでもらいたいんだ。」

霊「このの——デモカー?」

屠「ああ、着いてきて。」

屠自古に連れられ、第2ガレージに向かう。

そこで霊夢は唾然とした。昨日負けたシビックがあるのだ。

霊「え!?これって…。」

屠「そうさ。ちょうどデータ採ってる時に、あなたたちがいたから、足しにしたものさ。それで、急についてこなくなつたから、何かあると思つて、19:30ぐらいには千代さんを赤城の麓にスタンバイさせておいたのさ。」

霊「!!」

霊「それで…。いつから使つてもいいの？」

屠「もろん、今からだよ。ほら、これがキーだよ。」

屠自古の手元から、霊夢の手元にキーがわたる。

それを持ち、霊夢がシビックに乗り込み、エンジンをかける。

屠「あんたのロードスターもそれぐらいにするつもりでいるから、ちゃんと慣れておきなよ。それじゃ、行つてきな。」

霊夢がうなづく。そして、ガレージを出る。

霊（この感覚…。すごい。すっかりしたパワーチューンになつてる。これなら奴に——ぬえにも勝てると思う。）

そう思いながら、霊夢は帰路に就くのであつた。

一方の屠自古は第1工場にいた。

屠「さーて、さつそく修理…といたいところだけど。」

千「だけど？」

屠「今日はもう終わりにして、明日こいつをある場所に移動させる。」
千「どこに？」

屠「鳳凰が原因と言ったらわかる？」

千「全然。」

屠「はあ…。まあ明日明かすさ。今日はもう終わりにしようよ。」

千「うん。」

そういうと、千代と屠自古は、第1、第2ガレージの端にあるスイッチを押す。すると、ガレージのシャッターが下がるのだった。

翌日 7:30 博麗神社(仮) —————

霊「さて…。行こうか、新たな相棒さん。」

そういうと、霊夢はサンドガレージに向かう。

————— 午前9:15 サンドガレージ —————

霊「おはようさん。レミアさん。」

レ「おはようってどうしたの？今日は妙に早いじゃない。」

霊「速いって…。それでも遅れてるんだだけだね。」

レ「あはは。(汗)それで、昨日はどうだった？」

霊「昨日は散々だった、とだけ言っておくわ。」

レ「ふーん。寝たの？」

霊「寝てるわけじゃないでしょ。散々だったって言うぐらいなんだから。」

レ「あ、そっか。じゃあ持ち場について。」

霊「わかった。」

レミリアが社長室に入ると、電話が鳴っていた。

レ「あーはいはい今出ますよー。」

ガチャツ

レ「もしもし？どちらさま？」

文『射命丸ですが、レミリアさんですか？』

レ「そうですが。で、ブン屋。何か用？」

文『寝ぼけてるんですか？バトルの申し込みですよ？』

レ「あ、うん。そうだったね。うん。昨日は霊夢のことが心配で全然眠れなかったのよ。」

文『なんか変なk』

レ「バトル申込み拒否すんぞコラ！（激怒）」

文『すみませんでした。』

レ「よろしい。で、バトルはどこでやるの？」

文『土坂でお願いします。』

レ『はいはい。土坂ね。』

文『ちよつといいですか？ 霊夢さん呼んでもらえますか？ ぬえさんが話したいって。』
レ『ぬえが？ まあいいけど。』

——数十分後——

霊『もしもし、ブン屋？ はやくぬえ出しなさい。』

文『ちよつと待っててくださいね。』

ぬ『よう。霊夢さん。』

霊『ムカつくいい方してないで、はやく要件言いなさい。』

ぬ『へいへい。今度のバトル、土坂でやるってことは聞いているね？』

霊『ええ。レミから聞いているわ。』

ぬ『その復路なんですけど、私と再戦してもらいたいんだ。』

文『え!?! 何いってるんですか!?! 復路は椀のほずですよ!?!』

ぬ『椀のやつから連絡入って、『取材入っちゃったからいけなくなつた』って。』

文『椀の野郎…。』

ぬ『言つとくけど、私はあれがバトルだとは思ってないから。あんた、あの時赤城走

るの初めてだったんでしょ？」

霊「そうだけど。あ、あと私、乗り換えたから。」

ぬ『まじか。何にに乗り換えたんだ？』

霊「ひみつ。(ガチャッ)」

第29話 「代車の仮面をかぶった怪物」

—— 埼玉県某所 フリー新聞記者クラブ事務所 ——

ぬ「チツ。切っちゃったよ。」

文「そりゃあ、仕方がないですね。つて、切られちゃだめですよ！まだ予定の一つも話してないのに！」

ぬ「じゃあもつかいかけなおせばいいじゃないかよ。」

再び事務所の電話が鳴る。

（ガチャッ）

レ『いや、すまなかつたね。切っちゃって。』

文「ふうう。よかった。かけなおしてくれて。」

レ『とりあえず、日にちと時刻指定だけ言つてちようだい。そしたらすぐ切るから。』
文「2日後に19：30でお願いします。」

レ『ということはバトルは3日後ね、わかったわ。』

（ガチッ）

—— 群馬県某所 サンドガレージ会議室 ——

17：00 ——

レ「今回の相手は埼玉記者クラブらしいところよ。」

魔「記者・・・クラブ？」

レ「そうなのよ。ま、一応走ってはいるみたいだし、相手してあげなさい。」

魔「そういわれてもな。」

レ「今回の相手だけど、射命丸と封獣よ。」

フ「ぬえちゃんかく。記者としてやってるの？」

霊「それには私が答えるわ。一言でいうと、私に因縁つけてきた、ということよ。」

フ「因縁？」

霊「そうよ。つけるのは・・・私の方なんだけどね。」

咲「何かあったの？」

霊「ええ。実は昨日・・・車をブローさせちゃったの。」

咲「え!？」

フ「それほんと!？」

魔「そうか…。私が誘ったばかりに…。」

霊「別に魔理沙が謝ることなんてないわ。むしろお礼を言いたいぐらいよ。」

レ「そういえば、霊夢はどうするの？ダウンヒル代表として出られるの？」

霊「もちろん出られるわよ。代車で出るけどね。」

レ「代車？」

霊「そうか、皆にはまだ話してなかったわね。じゃあ、会議が終わったらガレージに来て。その代車つてやつを見せてあげるから。」

レ「まあ……。いいわ。じゃあ、今すぐ見に行きましょう。伝えることは、あと時刻ぐらいだから。」

魔「お、おう。で、いつなんだ？」

レ「明日よ。」

魔「え!？」

フ「え!?!それほんと!？」

レ「ミアの言葉に動揺を隠せない魔理沙とフラン。」

レ「冗談よ、冗談。明後日よ。」

咲「あんまり変わってない気が……。」

レ「しょ、しょうがないじゃない。むこうがそう言ってたんだし。」（震え

魔「ま、仕方ないって言われればそうだな。」

フ「速く見に行きたい！」

レ「そうね、じゃあ早速案内しなさい。霊夢。」

霊「案内しなくてもわかるでしょうが……。」

——サンドガレージ 工場内——

その姿を見た4人は驚愕した。それは明らかにディーラーで手に入るようなものはなかったかからだ。

霊「さーて、これが私の代車よ。質問は一人一つまでだからね！」

咲「え…？これが代車？」

魔「まったく理解できないんだぜ…。」

霊「そうに決まってるじゃない。今までダウンヒルエースだった私がわざわざノーマルしか売ってないディーラーに頭下げて『直してくださいお願いします』なんて言う？最悪、『ここまでやられちゃうと手の付けようがありません。』っていわれてつぶされる可能性だってあるのに。」

魔「ま、それもそうだな。」

レ「ねえ…。霊夢。」

霊「うん？どうしたのレミ。」

レ「これってどこかのデモカーじゃない？私もブローしたS2000の改修のためによく秋名に行くんだけど、最近よく見かけるようになったのよ。このシビック。」

霊「勘が鋭いわね…。大当たりよ。これは…えっと、『屠自古レーシングモデル』だった気がするわ。『ちよつと治るまでこれ乗ってろ』って言われたのよ。」

フ「ねえ？ 霊夢。このシビックちよつと見てもいい？」

霊「別にかまわないわよ。」

フランがジャツキを持ち、シビックの下に回る。

フ「どれどれ。」

今までペンライトをまわし回っていたが、その動きがぴたりととまり、下から出てくる。

フ「霊夢。この車使うと、たぶん私にならない人になっちゃうな。」

霊「そんだけやってあるの？」

フ「うん。おそらく、この状態だとエンジンも相当やりこんでるみたいだね。セツティングもロードスターのときは比べ物にならないぐらい霊夢に合ってるものだよ。今日乗ってきてるなら、わかるでしょ？」

霊「う：うん。まあ、ロスタの時よりも乗りやすいっちゃあ乗りやすかったわね。」

霊夢は顔をくもらせながらも、自分の意見を正直に話す。

レ「と、とにかく。専業のフランがそう言うなら、今度のバトルは出られそうね。」

全員がうなづく。

そういうと、チーム全員が解散。それぞれ明後日の準備に入るのであった。

—— 2日後 サンドガレージ ——

魔「なんだろうな……妙だ……。変な感じがする……。昨日までは何ともおなかつたはずなのにな……。」

——土坂 往路スタート地点 p. m. 19 : 35——

スタート地点をふさぐように、2台の車があつた。エボⅢとGT-R32だつた。

文「つたく。遅いですね。」

ぬ「せっかちだね、あんたも。」

文「おつ、来ましたよ！おおい！」

ぬ「あんまり出しゃばらないでくれよ、はずかしい。」

第30話「憎しみの雷・裁きの雷」

—— 次の日。 土坂近くのコンビニ 午前6：00 ——

皆熟睡し、寝息が車を支配する。

ふと、誰かが車を覗き込む。

?? 「うくん。寝てるのはいい顔だ。本気になった顔が怖いけどね。」

魔 「ん……。誰……。なんだ……。？」

よつこらしよでおきあがった魔理沙の寝ぼけた目には人の顔は映らなかった。

魔 「……。？」

またよつこらしよで眠る。

?? 「フフフ……。魔理沙。今日は楽しい夜にしような。フフフ。」

—— 夕方。 同場所。 午後6：00 ——

あたりは暗くなり始め、夕焼けがまぶしい。

駐車場は、今日は走り屋たまり場になっていた。話題はもちろんGod Wings V

S 埼玉フリー記者クラブのことだ。

モブ12 「なあなあ。今日のバトル……。」

モブ15 「このヒルクライムはきつと『魔法使い』と『走りの文』だろうな。」

モブ16 「当たり前だろ！もう一人のやつは・・・たぶん今日は来ないだろうな。」

モブ17 「そういえばダウンヒルはどうなるのかな？」

モブ18 「公表されてないから・・・。やらないか、やるとしても権か・・・。」

モブ17 「権か・・・。『記者の権』だからなあ・・・。絶対来るって・・・ことはないだろうなあ・・・。」

モブ18 「そうだな。」

—— 一方の土坂スタート地点 ——

レ 「こちらへんの走り屋・・・。ずいぶん団結力が高いみたいね。さっきネットで見たんだけど、どうも新聞を市役所前に掲載してるみたいだから、みんなそれを見に行ってるみたいなのよ。」

魔 「ふくん。」

フ 「どうりでコンビニにいたときうるさいと思ったよ。」

レ 「寝れたの？」

フ 「一応、5時間ぐらいは。」

レ 「十分じゃない。」

—— 土坂復路スタート地点 午後9：00 ——

ぬ「じゃあまずはこちらからだね。」

霊「ぬえ…。」

ぬ「なんだい？」

霊「前回は、ごめんなさい。むりやりバトルに誘ったりして。」

ぬ「フツ。いいんだよ、あれはもともと私が仕掛けたバトルだし。今回も、あんたは乗り換えてる。今回は正々堂々やろうじゃないか。」

霊「のぞむところよ。」

霊（ムカつく…。）

整列が終わり、いよいよ始まる。

霊（フウウウウ。さて、あなたに手伝ってもらうわ。）

—— やつに裁きの雷を。 ——

咲「カウント行きます！」

「5！4！3！2！1！GO！」

2台が順に走り出す。ぬえが先行、霊夢が後攻だ。

霊（あの時とは違う…。それを見せるだけ…！）

ぬ（実力はわかってる。だから、それ以上で走ってレア全然問題ない…。ダウンヒルは…ね。）

最初の複雑なコーナー付近で、一気に前に出るシビック。スパートをかけたのだ。それをぬえは自滅と判断。あっさりと前に出した。

ぬ（ここでの出しやばりは、あとあと響いてくるってことを、実力で示せばいいんだ。）
だがしかし。シビックは離れる。自分の手元から、1m、また1mと、離れる。

ぬ（……！ヒルクライムで決着つけようってか!?!おもしろいじゃないか。やれるもんなら……やってみろよ！）

先ほどまで何かを探るようなペースだったGTRが急変し、ツメに行く。

霊（やはり乗ってきたわね……。だがもう遅い。あなたが許してしまったことで、もうすでに決着はついているのよ。）

ぬ（くそっ！FFに4WDがヒルクライムでついていけないなんて、こんな屈辱的なこと、あつてたまるもんか！）

ぬえが限界までペースを上げる。

次のセクション。連続コーナーが続き、進む方向が変わる。

どんだんくる連続コーナーに、ぬえの精神は押しつぶされつつあった。だがそこに一つの希望がうまれる。ダウンヒルである。ここは諦め、ダウンヒルで一気にペースを上げるといったのだ。それ以外に選択肢はない。

ぬ（フン……フン……勝つ！勝つて帰ってやる！）

霊（つたく、あきらめが悪いわね。だったら、このセクションでけりをつけてやろうじゃないの。）

全力で逃げる霊夢と、必死に追うぬえ。

実力×車の能力が完全に重なるとき、真の速さが出るのだという。霊夢がまさにその状態だ。自分に99%あつた車に、適度な集中力。前しか見ない姿勢。

ぬえはどうだろうか。集中力はいいだろう。ものすごいものだ。だが、車があつてない。赤城統一できたのは、おそらく周りが弱かつたのだろう。だが、車があつてな

つまり何が言いたいかというと、差の付き方が激しいということだ。

どんどん離れていく怪物シビック。それを見て、集中力が一時的に切れる。それですたおいてかれる。

そう、これはバトルの殻をかぶつた、何かだつたのだ。

——ダウンヒルスタート地点（トンネル前）——

モブ12 「来たぞ！…つてあれ？シビックしか来ないぞ！」

モブ20 「どうしたんだろう…。」

モブ21 「来たぞ!!」

モブ22 「なんか…。すごい熱気は伝わってくるのに…なんていうか…なあ？」

モブ23 「お、おう。」

——埼玉の走り屋たちには、そうとう衝撃だったみたいだ。ぬえは赤城の時と同じく、かなり速い栃木から来た走り屋として知られていた。

——連続ヘアピン（オイル流してたところ）——

モブ23 「ウソだろ!?!? あのぬえさんが…こんなにちぎられてるなんて…。」

モブ24 「信じられねえぜ…。」

モブ23 「ああ…。」

——周辺の走り屋たちには優しく、よく教えていたそうだ。こんなぬえが必死になつてもついていけないのだ。落胆するのも無理はない。

こうしてついた埼玉ダウンヒル決戦は、今後受け継がれることになるだろう。

——往路スタート地点 午後10:00——

文「さて…。ひと段落したことですし、こちらも始めましょうよ。」

魔「あ? ああ。」

文「どうしたんです? 元気ないですね。」

魔「…。」

魔（FDの調子がおかしい。どう考えても変だ。やめるべきだと思うが、やめるわけにはいけない。だってこれが霊夢にとつての節目なんだからな。）

ハク（……………。）

フ「カウント行くよ！」

「5！・4！・3！・2！・1！・GO！！」

第30, 5話「ハクの彼氏」

「5!4!3!2!1!GO!!」

アクセルを踏む2人。バトルスタート。

2台とも1コーナ―を抜ける。

だが、異変が起こる。

魔「!?ギアが・・・入らねえ!」

ギアが3足までしか入らないのだ。

1コーナ―を抜け、2コーナ―。どんどん離れるエボⅢ。

魔「くっそ!入れよ!」

拒むように4足に入れても3足に戻る。

文「あや?どうしましたのかな?まあ、ちぎらせてもらいますよ。」

みるみるうちにFDとエボⅢの間が開いていく。

魔「何故っ!何故なんだ!入れ!入れよおおお!」

必死にコントロ―ルしようとする魔理沙だが、制御しきれていない。

ハク「……………魔理・・・沙。まって。」

魔「!!」

キュルルウウウウウ

突然FDがスピનする。ここはもともとプロD戦でまかれたオイルのど真ん中だった。

魔「くそ!こんな・・・こんな・・・」

モブ24「おい!大丈夫か!」

モブ25「無線で連絡しろ!」

モブ26「了解だ!」

そうして数分後…。エボが下りてくる。

文「ふう…。勝ちましたよ。魔理沙さん。」

魔「おまえ…。これで、この状態でお前が勝ったって言い張れるのか?」

文「勝ったって言って何が悪いんです?」

魔「ふ…。いつまでも馬鹿だな…。お前。」

文「そんなに言うならもう一戦やってあげてもいいですよ。」

魔「つたく…。そう来なきやな。言わせてもらおうが…。」

魔理沙の目つきが豹変した。鬼のような眼だ。

魔「貴様らのような埼玉の走り屋には、死んでも負けないからな。」

文「あなた……。なにか誤解してませんか？私は何もやってませんよ？」

魔「んなこたわかったんだよ。」

そういうと、魔理沙はFDに乗り、泣き始めた。

??「ちよつと！」

FDの外に人影があつた。

魔「誰だ？」

ハク「私だよ！ハクだよ！」

魔「ああなんだハクか。つて！ええ！」

魔理沙は驚き、外に出る。

魔「お、お前は……。本当にハクなのか？」

ハク「そうだよ。私はハク。天野ハクだよ。」

魔「本当の姿……。か。なあ、一つだけ聞いていいか？」

ハク「……。うん。」

魔「なんでカーナビの中にいたんだ？」

ハク「それは今は言えないよ。それじゃあ、明日の夜にまた会おう。」

ハクがスツと消える。

魔「あつ……。」

すると、魔理沙はまたシヨンボリした表情を浮かべ、FDに戻っていった…。

——土坂頂上 午前3：00——

夜が明けない真夜中。

朝日が未だ昇らぬ土坂に幽霊がやってきた。そつとFDに近づく幽霊。

?? 「よう。あんたが魔理沙か。」

魔 「待ってたぜ。で、あんたはいつたいたいどこの誰なんだ。」

?? 「俺か？俺はな、ハクの彼氏だ。」

魔 「は!？」

「そうだな、本名は地霊 針助だ。」

魔 「あんたが…彼氏？車がないようだが？」

針 「車は下に置いてある。そこにハクもいる。」

魔 「わかった。それじゃ、下に行くわ。」

針 「おう。じゃあ下で待ってるぜ。」（スツ

針助の姿が見えなくなる。

魔 「それじゃ、行くか。」

そういうと、魔理沙はFDに乗り込み、復路のスタート地点を目指す。

土坂 復路スタート地点 午前 3:10

ハク「来たね。」

針「ああ。」

ボロロロロロロロロロロロロロロロロ（ボタン

魔「来てやったぜ。で？ハク。私をどうするつもりだ。」

ハク「私は…あなたをどうするかそういうつもりはないよ。ただ針助君と勝負してほしい。それだけだよ。」

魔「なるほど。で、針助の車。FDなのな。」

針「おお、そうだけ。こいつはハクにいろいろやつてもらってできた車だ。で、走り込みに行ったその日にハクは死んだ。だから、俺は思ったんだ。俺が赤城にいたせいだ。とな。」

魔「で、あんたも自殺した、と。」

針「大体正解だけ。さつそくはじめよう。我々には時間がない。夜が明ければ我々の姿は見えなくなる。そうなると当然車も運転できなくなるわけだ。」

魔「おう。さつそくはじめよう。」

そうすると、魔理沙のFDが思いっきりターンして、針助のFDに合わせる。

ハク「それじゃあ、カウント行くわよー。」

「5. 4. 3. 2. 1. Go。」

2台並んだFDがハクの横ぎりぎりを通り抜ける。

ハク「なんとというか……。不思議な感じ。昔彼氏だった針助君と今相棒になっている魔理沙。バトルするなんて。」

第31話「白いハク 黄色い魔理沙」

「5. 4. 3. 2. 1. GO.」

2台がすり抜ける。

針（さて、まずは後ろから走りの把握からだ。どれだけやれるかわからせてもらう。話はそれからだ。）

魔（問題なのはあいつがどれだけやるか・・・か。）

もくもくとバトルを進める2台のFD。

第1セクションから第2セクションにかけて、上りが続く。さらにちよこまかと連続のコーナーが続くため、コースを覚えていなければ、確実に1つミスが出る。

針助はもちろん初見のコースで、コースを覚えてなどいない。だが、事前にプラクティスした魔理沙のペースについてくる。魔理沙はそれに怖さどころか、親しみさえ感じた。

魔「なんだろう…この感覚。妙だな。ハクが抜けて、おそらくこのFDも2, 3割は遅くなってる。だからついてきたってそれほど苦じゃないんだ。でも・変だな。」

針「いいか…。よく聞け。これはお前の脳に直接話しかけている。」

魔（…!!おまえ…そんなことできんのか?）

針（そりや、俺だつて幽霊だからな。お前に取りつきさえすれば、そんなことも可能だな。）

魔（……!!）

針（で、ハクがカーナビだった理由。それはな…。）

—— やつとは、ずいぶん前に出会った。

—— 何か普通なのに、魅力を感じる奴だったんだ。

—— 俺はその時かられっきとした走り屋だったからかな。やつも走り屋になりたいって言ったんだ。

—— その時ちょうど、やつの両親が死んだ。

—— そして、少したってから、奴はなんと俺と同じFDを買ってきたんだ。

——正直その時、びっくりしたんだ。

——そして、ある日だ。俺は赤城山にハクがいるってことで、麓でスタンバイしてたんだ。：もちろん、付き合うためにな。これだけ長い期間一緒にいて、付き合っていないってのもあれだったし。

——その時、一台の車が上がっていった。車種は：たしかFDだったな。

——そこでその後、奴は死んだ。崖から落ちて、検視の結果、即死だったそうだ。

——で、その知らせを翌日に聞いて、思いつきり泣いた。叫ぶように。

——その日の夜だった。突然、奴が現れて、こういったんだ。

——「ねえ、針助君。」

——「な、なんだよ。いきなり。」

「私、死んだのはわかるよね？」

「あ、ああ。」

「私のもとに来たいとは思わないの？」

「は!!？」

「だって、麓にいたんでしょ？あの時。」

「な、何でそれを？」

「幽霊になったんだよ、それぐらい当たり前じゃん。」

「……………」

「いい返事を待ってるよ。」

「その後は…。わかるよな？俺はその日のうちに自殺した。」

「俺は現実より、ハクを選んだんだ。」

「本題に入ろうか。」

「俺が幽霊となるとき、ハクがついてきてこう言ったんだ。」

「ねえ、ちょっとお願いがあるんだけど。」

「なんだよ。」

「私を生き返らせてくれる？」

「は!？」

「私、何かに取りついて、そこで生きようと思うんだ。それで、針助君には、取りつくところを見てもらいたいんだ。というか、手伝ってほしい。」

「そんなことで俺を誘ったのか!？」

「そうだよ。(ニコツ)」

「ま、しょうがねえか。で、ターゲットはもう決めてあんのか？」

「あるよ。ほら、あそこの私のお姉ちゃんのFD。あそこに今夜中に取りつきたいんだ。」

「ここ、今夜中…。わ、わかった。やるぞ。ほら。」

「うん。」

「それで、奴の姉。ハルのFDにあったカーナビに取りついたってわけだ。」

魔「そ、そうだったのか…。」

針「(どうだ？少しはあいつのことわかった気がするだろ?)」

魔「ま、まあな。」

針「(なら、行けるはずだ。)」

針「(このまま、下ってって、麓で折り返して、スタート地点に折り返すぞ。)」

魔「(おう。)」

その後は、FDVSFDのバトルが続いた。抜きつ抜かれつのデットヒート。3時30分くらいまで続いた。

——午前3:34 土坂復路スタート地点——

ハク「どうだった？魔理沙。私のこと、少しはわかった？」

魔「ああ…。お前のこと、少しはわかった気がするぜ。ありがとな。針助。」

針「いいんだよ。ほら、手をつなげよ。」

ハク・魔「は？なにいつてんの？」

針「ほら。」

いやいやながらも、2人が手をつなぐ。

すると、2人光り始める。

魔「な、なんだ、これ!？」

ハク「針助君何かしたの!？」

針「別に。」

数十秒すると、光るのが収まりその中から、一人の人物が出てきた。

それは、魔理沙でも、ハクでもなかった。

白っぽい魔女帽子に、銀髪の髪。ワンピースのうえに、前掛け。

それはまるで、ハクと魔理沙を足して2で割ったかのようなだった。

白魔理「な、なんだ、これ!?!なんか…。パワーが2倍になった気がするぜ!」

その瞬間、バツつとなつて、白魔理が2つに分裂した。

魔「な、なんだつたんだ?」

ハク「なんか…魔理沙と同じ景色が見えた気がする…。」

魔「あ、ああ。それじゃあ、今日もよろしくな。ハク。」

ハク「うん。」

するとハクの体はなくなり、魔理沙の黄色いFDに吸い込まれる。

そして魔理沙がFDに乗り込む。

朝が来る。山の外線には赤い光がかかっていた。

第32話 「白魔理沙」

魔理沙は朝の3：45ぐらいに就寝したためか、昼間に飯で起きた以外はほとんど寝ていた。

それを不安に思ったメンバーたちが、動き始める。(ただのおしやべり)

——土坂頂上 午後16：00——

レ「なんか、魔理沙すごい寝てない？」

霊「そう？あー……。でも、まあ、そういわれてみれば、そうかもね。昼に起きたとき以外は、寝てるもんね。」

レ「フランたちも、ね。」

霊「まあ、朝聞いた話だと、フランは早朝に一回、目が覚めてそれからしばらく眠れなかったそうなのよ。」

レ「あーだからかな。おそらく咲夜も同じ理由かと——」

霊「咲夜は日常の疲れでしょjk。」

レ「言われてみればそうかもね。(笑)」

——そして、夜が来る。明かりのない夜中が。

——土坂頂上 午後19:30——

文「わざわざ1日伸ばしてくるなんて、さすがですね。」

レ「皮肉っぽい。」

フ「文さん、ぬえちやんに似てウザくなってきたる気がする。」

咲「どうかウザい。」

霊「おつ、そうだな。」

文「あやややや…。」

魔「なにしてんだ？文。さつさと車並べて始めようぜ。」

レ「妙に乗り気ね。昨日とは大違いなんだから。」

魔「そりや、そうだな。だって今の私は昨日の私とは違う。それを今からお前らに見せてやるよ。」

ハク「そうだね。」

止まっていた2台の自動車。FDとエボⅢがそれぞれ往路のスタート地点を目指す。

FDからは何か漂っているようだった。

——土坂 往路スタート地点 午後19:45——

魔「どっちが先行にするんだ？」

文「また私が先行でもいいですかね？」

魔「分かった。」

咲「それじゃあ、カウント行きます！」

「5!・4!・3!・2!・1!・Go!!」

ドギヤギヤギヤギヤギヤギヤギヤギヤ……

文（さーて、頂上での自信のほうを拝見させていただきますよ。）

魔「ハク。あの時の融合、あれやるぞ！」

ハク「は!?あれって、私が実体化しないとできないんだよ!?針助君だっていないんだし……」

魔「ごちゃごちゃ言っても仕方ないだろ。今はバトルなんだから、勝たなきゃ終わらないぞ!」

ハク「分かった。魔理沙がそこまで言うなら、私やれるだけやってみるよ!」

魔「そう来なくっちゃ!それじゃ、行くぞ!」

ハク「うん!!」

FDが光り始める。

文「え!?何が起きてるんです?!?」

モブ30「なんかひかり始めたぞ!」

モブ31「いったい何が起きてるんだ!」

そして…光の中からは、白いFDが現れた。

白魔「そうだ！やればできるじゃないか。」

(そ、そうだね…。できたね。)

白魔「それじゃ、いくぞ！」

文(…！ペースが…上がってる!?)

前回、エボⅢにどんどんと離されたポイント。今度はFDが差を詰めている。

文「な、何が起こってるんです!？」

白魔「文。ペースが乱れてるぜ！そんなんじゃないぜ！」

FDがスツとエボの前に出る。

文「な!？」

白魔「これで…チエックメイトだ!」

文(まだだ…。まだ私は諦めない!)

エボは必死に隙を探しに行くが、FDには一切の隙さえもなかった。

アウトインアウトのしっかり取れた自信のあるラインどり。アクセルに迷いが無い。踏むところは踏んで、ドンピシャのブレーキタイミング。

文(クツ…！どれだけ隙がなからうと、私は絶対にあきらめるもんか！抜くポイントはいくらでもある！それを見極めていけばいいだけの話なんだ!)

白魔「文のやつ…。まだあきらめてないな。もうちょっとペースを上げてちぎるか。」
(わかった。)

さらにFDのペースがグンと上がる。
文(くそっ！なんで追いつけないの！)

——土坂頂上——

ブロロロロロオオオオオオン

レ「来たわ。」

霊「ええ。」

2人の目の前を、白いFDが通過する。

レ・霊「え!?!何今の!?!」

霊「ねえ、レミ。これって、魔理沙とブン屋のバトルよね?」

レ「え、ええ。そうよ。」

霊「何で白いFDが混ざってるのよ?!」

レ「知らないわよ!ちよ、ちよっと咲夜に聞いてみる。」

レミアアは1号車の中からトランシーバーを取り出し、咲夜につなぐ。

レ「ね、ねえ咲夜?」

咲『なんですか?』

レ「あなたがカウントした時、FDは何色だった？」

咲『もちろん、黄色でしたよ。』

レ「こっちでは白いFDが通り過ぎてったんだけど。」

咲『え!?!それほんとですか!?!』

レ「ほんとじゃなかったらなんでわざわざトランシーバーなんかにかけてるのよ。」

咲『と、とにかく、そちらに向かいます!』

レ「わかったわ。」

咲夜は急いでFCに乗り込み、頂上を目指す。後ろにはフランが寝ている。

咲（まだフラン寝てるし……。ま、まあ起こさなきゃいいべ。）

咲夜はFCを飛ばす。

フ「むにやむにや……。あ、咲夜おはよう。」

咲（なぜ今起きるんだく!!）「お、おはようございませう。」

フ「あの。疑問が二つあるんだけど。」

咲（今聞くな!あとだ!後で聞け!）「なんですか?」

フ「まず一つ目に。今何時?」

咲（あ?知るか!）「だいたい8時ぐらいですかね。」

フ「じゃあ二つ目。なんで今動いてるの?」

咲「ちよつと頂上のお嬢様から連絡がありました。」

フ「ふくん。どんな？」

咲「詳しくは、頂上で話しますよ。」

フ「分かった。」

——土坂頂上 午後20:03——

咲夜とフランが頂上に帰つてくると、魔理沙が帰つてきていた。バトルは決着がついていたのだ。

レミリアと霊夢が魔理沙に詰め寄っていた。

レ「ねえ！魔理沙！あなたちゃんとバトルしてたわよね!?あ、咲夜！」

魔「な、なあ助けてくれよ咲夜。なんか変なこと聞いてくるんだ…。怖くて仕方がないんだぜ！」

咲「助けてくれと言われても…。私はカウントした時のことしか知らないし…。」

霊「そうよ！だいいち——」

魔「あーもう！わかった！私の口からちゃんと説明する！だから落ち着け！」

レ「お、おう。」

フ「………?」

魔「白いFDに乗ってたのは私だ。それはな……。この、」

魔理沙がFDのボンネットを開く。

魔「このエンジンに取りついている幽霊、ハクと融合した姿が、お前らの見た、白いFDだったってわけさ。」

霊「取りついている…幽霊!？」

魔「そうさ。」

フ「なるほど…。これですべて合点がいった。」

魔「…フラン？」

フ「魔理沙。そのFDって、この世界に来てからずっと乗ってるんだよね？」

魔「ま、まあな。」

フ「私と魔理沙でバトルしてた時、どんどんあり得ないほどにペースが上がっていったんだ。それはおそらく、このハクちやつて子と魔理沙が融合仕掛けてたんだよ…。わかりやすく言うと…：そうだなあ、気が高まるとか、同じこと思ってるっていうか？とにかく、そんな感じだったんだよ。」

魔「なるほどな…。」

ハク「ふくん。」

霊「だ、誰!？」

ハク「私だよ。今魔理沙にご紹介を預かりました、ハクでございます。」
ハクが実体化して現れる。

レ「あなたが…魔理沙の言うハクってやつなのね？」

ハク「そうですよ。」

フ「ふ〜ん。あなたがそうなのね？」

ハク「あなた、ずいぶんと私のこと詳しく言ってくれますね？」

フ「それはどうも。」

ハク「とにかく。これからも、私は魔理沙のFDにいるつもりだから。以後お見知りおきを。」

ハクが再び、幽霊となってFDに吸い込まれる。

レ「さて、帰りましょうか。着いたら休暇を取りましょう。そうね…2週間でもいいかしら？」

フ「わかった！」

咲「賛成です！」

設定集2 &用語集

用語集

Dワールド

↓架空世界。車の暴走行為のみ規制がかなり緩くなっている。だから、走り屋文化が盛ん。我々の世界で言えば、『頭文字D』や、『湾岸ミッドナイト』といった、架空のアニメの舞台となった。規制が緩い理由として、この世界の住人は、飲酒や天候に左右されないとても安全な運転ができることがあげられる。ちなみに、幻想郷住人が移住してきたときには、プロジェクトD解散から3か月。啓介と拓海がプロのレーサーとなり、国内で活躍し始めたころ。

事務所兼住居（第1話より）

↓事務所とは、チームの中心となり、活動の拠点となる場所のこと。住居と一緒なのは言わなくともわかるはず。

ギャラリーのプレハブ的な何か（第4話、第9話、第15話より）

↓事務兼とおんなじイメージ。違うところといえば、事務所を改造して、ショップにしたところ。

RS

↓赤城レッドサンズの略

TRRD

↓チームレミアレーシングドライバーズの略

GodWings

↓プロジェクトDと同じ遠征チーム。本拠地は群馬。主旨は、幻想郷にいた住人の所在を確認することだが、このDワールドの環境に慣れ、主に車に乗っているのが大体だと考えられる。だから、ついでに倒しておこうというものだ。ちなみに、バトルはGodWingsから、対戦予定者に手紙を送る。所在の確認のほうは、基本的にレミアアがインターネットで行う。

幻想レーシング

↓レミアアがTRRD時代に建てた、いわゆる車両修理工場的な。走り屋に有名となった群馬県に備わる。一般車両の修理、納車はもちろん、チューニングパーツの販売、設置も行う。(委託販売のもの。) 人気はそこそこ。後のサンドレーシング

サンドレーシング

↓GodWingsが使う、ガレージの名前。サンドガレージともいわれる。幻想時代と比べ、客足が滞ってしまったため、サンド(砂漠)ガレージ・レーシングと名付け

られた。

八雲紫の憂鬱

↓八雲紫が、幻想郷からDワールドに移住させる際、能力に差をつけたことの名称。幻想郷時代のことをはつきりと覚えていられる者もいれば、記憶さえもないものもいる。能力が全く使えないものもあれば、そんなに差支えなく使えるものもいる。しかし、結果的には調和して±0になると、紫は主張する。

設定集2

チーム月の兎 本拠地 定峰

鈴仙・優曇華院・イナバ 搭乗者種 トヨタ セリカGT-FOUR 白

チューニング(参考) 頭文字Dスペース Aコース

地元 定峰 通り名『凶器のレッドアイズ』・・・本編より、目を紅くして相手の視界を鈍らせるため

『八雲紫の憂鬱』により、能力が残ってしまった一人。しかし、彼女自身はそれが気に入り、攻めるときは必ず能力を使うといわれる。いわゆる、厳しくしたけど結果的にはいい方向に向かつてる、てきな。てゐることだが、妹っぽく見ている。(全然違うけど。)

因幡てゐ 搭乗者種 スバルインプレッサ (GD8) 白

チューニング (参考) 頭文字Dスペース Dコース

地元 定峰 通り名『クリスタルラビット』・・・言わずもがな兎だから。
チーム名の起点になった人。

2次創作なんかでは、う詐欺師とか、お姉さんっぽいキャラで描かれることが多いが、こちらは正反対。ちよつとぐらいじやへこたれないが、気持ちが大不安定になると、正直に泣く。泣き虫じゃないよ！幻想郷時代の反省を生かし、おとなしくかつ大胆な走りをする。パワーには頼り(たかない)だそうです。

八意永琳・蓬莱山輝夜 搭乗者種 不明

地元 不明 (神奈川エリア)

チームもこけーね

藤原妹紅 搭乗者種 トヨタスプリンタートレノ 赤

地元 不定期 通り名『紅の86』

現在はもこけーねの公道担当。

86の名にふさわしい、理論のはいった走りをする。レース現場ではメカニックとして活躍しているため、車の知識は(結構)豊富。86を選んだ理由は、中古屋で一目ぼれた。だそうです。(本当は頭〇〇〇〇の藤〇とかけてます。はい。ごめんさい)

上白沢慧音 搭乗者種 ホンダNSX (N1) 青

地元 不定期 通り名『』

チームのレーシングドライバーだが、現在負傷中。

ドライバーになった理由↓妹紅だけなんかクールな感じで、嫌だったから。自分も目立ちたかったから。

あくまで妹紅の相棒的存在。

チームR&R

河城にとり・鍵山雛 すべて不明

チームFamily's

大妖精 搭乗者種 トヨタカラーレビン (AE86) 白

地元 不明 (たぶん秋名) 通り名『ブラックフェアリー』・・チルノへの愛情 (愛とは言っていない) が膨らみ、腫れついた結果、ものすごい嫉妬妖精になってしまったから。

チルノに解散を迫られ、拒否したものの、結局解散という、ものすごい過去を持つ。嫉妬 (愛情) の力で覚醒し、自分の車のボンネットを自身の気分に応じて変えるという派生技をもつ。

チルノ 搭乗者種 ホンダインテグラ 白

地元 筑波 通り名『氷精』：：茨城では、クールな振る舞いをしてい
から。

Family's 解散の原因。茨城ではかなり満足な練習ができてい
るとか、いないんだとか。ちなみに愛車は筑波でコーチをしている人の師匠が作った車。

チーム埼玉フリー新聞記者

射命丸文 搭乗者種 三菱ランサーエボリユーシヨンⅢ 黒

地元 土坂 通り名『走りの文』

地元では、公式新聞記者をやろうとしたが、やむなくフリーのライターに。

だが、彼女はあまり取材とかはしていないようだ。やることは専ら走り込み。唯一の取
材といえば、ハクがこの世界に来たことを取材したぐらいだ。

犬走楯 搭乗者種 トヨタカローラレビン (AE85)

地元 土坂・間瀬 通り名『85クライマー』『記者の楯』

こちらは記者としてきちんと活動している。だが、昔は走り屋を総なめした
もすごく恐ろしい存在だとしている。バトル時は遠征取材のため不在。

姫海道はたて 搭乗者種 スバルインプレッサ (GC8) グレー

地元 土坂・間瀬 通り名『白の付添』：：昔、楯の隣にいて、楯のナビゲー

トをしていた。

現在は、間瀬で主に活動しているため、ほとんど出ていない。あんまり速くはない。

その他

封獣ぬえ 搭乗者種 日産GT-R32 黒

地元 不定期 通り名『死の宣告』

ここでは明らかなDQNとして書かれている。どうやら、命蓮寺といろいろ関係があるようだが…？

VS 命蓮寺混合チーム

第33話「不安」

—— 8日後 栃木県某所 ——

走り屋1 「なあ、ここにも来るんだってな？ゴッドウイングス。」

走り屋2 「ああ。なんか、すごい情報は入ったんだけど、前回のバトルでアザーカーが乱入してきたらしいぜ。」

走り屋3 「それまじかよ！」

走り屋2 「だって公式のHPに乗ってたんだぜ。ウソなわけないだろ。」

走り屋3 「それもそうだな。」

?? 「今の聞いたかい？」

?? 「ああ、奇妙なこともあるもんだなあ。」

?? 「それより、さ。ゴッドウイングスから手紙が来たんだ。」

?? 「それ、ほんとかい!？」

?? 「本当だよ。ほら、ここに手紙があるんだ。」

『 拝啓 命蓮寺仮拠点 様へ

ようやく草木もえいづる季節となりました。

さて、今回はバトルのお知らせをおも仕上げます。こちらの詳細については、HPを作つてあるので、そちらをご覧ください。

良い返事をお待ちしております。

では、都合がよければ1週間後に命蓮寺（仮拠点）前駐車場にてお待ちください。

敬具

God Wings 代表取締役 レミリア・スカー

レット 『』

?? 「フーン、なかなか礼儀正しいもんじゃないか。なあ、星ちゃん？」

星 「そうだね。見る限りはかなり礼儀正しいな。ナズー。」

ナ 「ところで…。相談なんだが。」

星 「どうした？」

ナ 「聖が捕まつたらしい。」

星 「はあ…。つて！それって相当まずいんじゃないか。」

ナ 「そうですね？本当はうちは聖がダウンヒルで、星ちゃんがヒルクライムなはずだったんだけど…。聖の罪状は、1か月と反省車両の製作らしい。」

星「またうちのガレージに車が増えるのか…。」

ナ「はあ…。うちに命蓮寺システムなんて変なものがないかなあ…。」

星「そうだね。それよりさ、ナズーが出るってことはできないの？」

ナ「それも考えてみたんだけど…。どうも最近はギャランの調子が特に悪くて…。おそらく、いま走り出せば確実に逝って、私も牢屋逝きさ。」

星「それは非常にまずい…。小傘も今はいないし。」

ナ「でしょ？だから私が出られる可能性は低いんじゃないかな。」

星「じゃあ誰が——」

??「あ、あのっ！」

ナ「ん？君は…ムラサ？」

ム「そうです。私。村紗水蜜です。」

ナ「ああ、そういえば聖が、幻想郷時代に特に悪いことしたやつは、リスポーンするって言ってたっけな。」

ム「そうなんですよ！だから私、秋田からわざわざここまで来たんですよ!!」

ナ「おお、それは疲れたな。ところでさ、ムラサ。」

ム「はい？」

ナ「何でここまで来たんだ？」

ム「もちろん…車ですよ？」

ナ「見せてもらってもいいか？」

ム「いいですけど…。」

ナ「行くよ、星ちゃん。」

星「うん。」

2人は席を立ち、お会計を済ませ、外に出る。

そして、ムラサの車を見た2人は啞然とした。ムラサの車S14だった。

ナ「ね、ねえムラサ。これって…ほんとにムラサのだよね…。」

ム「そうですよ♪」

ナ「まじかよ…。」

星「いいんじゃない？今度のb——」

ナ「ば、馬鹿っ！言うんじゃない！」

—

ム「なんです？」

ナ「はあ…。ここまで行ったら、言うしかないか。とにかく、寺院までついてきて。事

情はそこで説明するから。」

ム「分かりました。」

そうすると、3人はそれぞれの車に乗り、一路、命蓮寺に向かう。

—— 妙蓮寺寺院 午後16：45 ——

ム「で、話ってなんですか？」

ナ「あのね……。ムラサ。私たちは来週、あるチームとバトルしなければならぬんだ。」

ム「あるチーム？」

ナ「God Wingsと言つて……。聞いたことない？ 幻想郷時代に住人だった人物を倒しに行ってるんだけど。」

ム「へく。そういうチームがあるんですか。」

ナ「それでね、単刀直入に言おう。君のそのS14を貸してもらいたい。あと、命蓮寺グループにも所属してもらいたいんだ。」

ム「つていうか、そんなチームとどうするってんです？ 第一、S14を走らせる場所がないですし、あつたとしても私がやった方がいいんじゃない？」

ナ「あんたねえ……。場所はここ。もみじライン。もしあなたがやったとして、それで負けなしの霊夢を倒せるとしても？ 相手は初見とはいえ、あなたも全然走ってないじゃない？」

ム「あのー、星さん。その『捕まる』ってどういう意味なんですか？」

星「ああ、そうか。ムラサにはまだこのシステムについて話してなかったね。」

ム「システム？」

星「ここには、なんでも外の世界と同じ刑罰のシステムがあるらしいんだ。例えば、事故を起こして、起こした側が何か月勤務所に入るとか、そういうことらしい。まあ、こつちではムシヨに入ること、『修行し直し』って言うらしい。ムラサが目覚ました時秋田にいた理由も恐らくそうなんじゃないかな。」

ム「へー。そんなシステムがあるんですか。」

星「ま、正直そのシステムが役立つとは私は思っていないけどね。」

—— 同時刻 サンドガレージ 舎内 ——

レ『さて、今から作業再開よ。みんな持ち場についてね。』

魔「はあく。今日は深夜営業か。なんかかかったるいな。」

霊「でもさ、なんも作業とかしないよりはましじゃない？ いつもより時間は確実に少ないわけだし。」

魔「それもそうだな。」

番外編「レミリアの納車」

—— サンドガレージ 社長室 ——

レミリアは電話とにらめっこしていた。

レ（まだかな〜連絡。そろそろ来るって言ってたなく私のS2000。レーシングエンジン積むって言ってたからきつと屠自古のとかなきつと。あく待ちどおしい！）

咲（すごい…オーラのながバンバン出てる…。やだ…かつこいい…。）

テユルルルルルル…。

レ「来たっ！」

ガチャツ

レ「もしもし？」

ナ『あんたがレミリアさんかな？ナズーリンだけど。』

レ「ああ、なずー。どうしたの？手紙の返事？」

ナ『そうだよ。じゃあ来週のここで待つてるから。』

レ「ええ、じゃあ。」

ガチャツ

レ「はあ〜・・・。なんで来ないのかな〜。」

咲「違ったんですか。」

レ「大当たり。なんか眠くなってきた〜。ちよつと寝ようかな。」

テユルルルルルルルルルル・・・

レ「また来たっ！」

ガチャッ

レ「もしもし。。。」

屠「もしもし。レミリアさんかい？あんだのお偉いさんに頼まれてたS2000. 出
来上がったよ。取りに来てね。待ってるから。」

レ「ええ！今すぐにも取りに行くわ！」

咲「よかった。。。こんどはあってみたい。。。」

レ「咲夜！すぐに車の用意をして！出るわよ！」

咲「はい！^^」

そうすると、咲夜とレミリアは、社長室を出て、ガレージへと向かった。

レ「ちよつとガレージ開けるわよ、魔理沙。」

魔「なんだ？どっかいくのか？」

レ「フフフ♪秘密よ♪」

レ「ふくん♪ふくん♪」

咲（すごい上機嫌…珍しい…）

—— 屠自古レーシング 午後13:30 ——

レ「来たわよ（^ー^）屠自古^^」

屠「妙に上機嫌だな…。逆に気持ち悪い…」

咲「そ、それより、速く見せてくださる？」

屠「あ、ああ。これだよ。」

そういうと、ガレージの中にある車にかかっているカバーを外す。

レ「うわあー！これが私の新しいS2000かあー！！」

屠「うーん、なんか調子狂うなあ。」

咲「ま、まあ勘弁してやってくださいな。こんな時しかこんなことできる時間ないん

ですし。」

屠「ま、それもそうだな。」

レ「♪」

屠「それじゃ、ほら。これがこいつのキーだよ。」

レ「ありがと♪」

すると早速レミリアはS2000に乗り込み、エンジンをかける。

ブロロロロオオオオオオオーン

レ「フフ♪いい音♪」

咲「いつものお嬢様よりかなり扱い辛い・・・。」

レ「ねえ、咲夜。今日私と走ってくれない？」

咲「一緒に…ですか!？」

レ「そうよ♪さつそくこいつの性能を試してみたくなったの♪」

咲「は、はあ…。私は別にかまいませんけど。で、でももうちよつと慣れてからのほうがよいのでは？」

レ「そんなこと知ってるわよ。でも、それでもいち早くこいつを試してみたいの♪だからお願い、ね？」

レミリアは渾身のお願ひ顔で咲夜を見つめる。

レ「ね?」

咲「か、かわええ!こ、これはもう認めざるを得ないツ…!」

咲「分かりました。それじゃあ、秋名でいいですかね？」

レ「ええ♪8時ぐらいにね♪それじゃ♪」

レミリアはS2000を動かし、工場を後にした。

咲「じゃあ、私も行きますね。屠自古さん。ありがとうございました。」

屠「ああ。またなんかあったら呼んでくれ。」

咲「ええ、では。」

そういうと、咲夜も立ち去った。

それを見送り、屠自古はこうつぶやく。

屠「カリスマの御嬢さんには、あんなのは似合わないな…。」

第34話 「ナズとレミとあの車」

—— 4日後 命蓮寺前駐車場 ——

ナ「ふう……。いよいよ明日か。」

星「そうだね。調整のほうはどうだい？ナズ。」

ナ「うん。かなりいい感じだな。あとは…私のテクニクが、あいつらに通用するかどうか…か。」

星「そうだな。」

ム「あのっ！ナズさんと星さん。頑張ってください！」

ナ「ああ、ありがとう。」

星「限界まで寄ってくるよ。ムラサ。」

ム「はい！」

そうムラサが言うと、なずと星はそれぞれの車に乗り込む。

ナ「それじゃ、もう一本走ったら今日は終わりにするかな。」

星「あんまり前日にやりすぎてもあれだからね。」

ム「はい！いってらしゃい！お茶入れて待ってますね！」

魔「ゲッ。フラン。いたんだ。」

フ「そりや、こんなでかいとはいえよく響くガレージで私の名前出されたら、気づかないはずないでしょ。」

魔「おまえ…。」

フ「んでさ、霊夢。セットのことなんだけど。」

霊「セットがどうかしたの？フラン。」

フ「うん。万能セットって言ったじゃん？あれ、私がたまにいじってるんだ。」

霊「え!？」

フ「だからさ、万能っていうのはおそらく私がいじってるからだと思ってるんだよねえ。」

霊「いやいやいや!!そういう意味じゃなくて!え!?!何かっ手にいじってるの!？」

フ「え、いやだって、私霊夢のメカニックだし。あ、でもさ、最初のセットは記録してあるよ。ほら。」

フランから、霊夢に今までのセッティング変更が事細かに書かれた紙がわたる。

霊「ふうん。あんた、だいたいいじってるわね?」

フ「こんなことがきつとあると思って、きちんと書いておいたのさ。」

霊「そうね…。たとえば、これ。私が土坂走ったときのセット。これなんか、再現で

きるの?」

フ「やろうと思えば、いつでもできるよ。」

霊「分かったわ。」

フ「やる?」

霊「結構です。」

フ「…。」

こうして、時は流れていった。

そして、バトル当日。

——バトル当日 サンドレーシング 午後16:00——

日の入りの時間が遅くなり、空には太陽がまだ顔を出している。

さて、こちらはサンドレーシングのガレージ。

ずらつとならんだ4台の精鋭部隊。

シビック、FD、サポート車1号、2号。

いま、ガレージのシャッターがゆっくりと開き、順々に走り出す4台。

今から向かうのは、栃木県にある、もみじライン。

かつてセブンスターリーフがはびこっていたこの地で向かい打つのは幻想郷の空に

星蓮船を浮かべ、異変を起こした命連寺メンバー。

さて、勝敗はいかに。

——命連寺(仮) 前駐車場 午後20:00——

子ナズ「上がってきますよ! God Wingsです!」

ナ「そうか…。」

星「ついに来たね。」

ム「そうですね…。」

ナ(昨日はよく寝たし。だいぶ攻略もうまくいつてる。こっちには負ける要素なんて一つもないんだ…。)

——勝てるものなら勝ってみな! God Wings!!——

——午後20:05——

フ「ふ〜! やつとついたら〜!」

咲「なんか、今回はずいぶんかかりましたね。お嬢様。」

レ「あんたねえ…。ごはん食べたらずりや遅くなるでしょ。それじゃ、エースの2人はいつも通り慣らしに入って。それと…霊夢? 今回もあんたは別のとこの車使ってるんだから、くれぐれも大切に使ってちょうだいね?」

霊「分かつてるわよ。」

エースの二人とメカニックはそれぞれ車に乗り込み、もみじラインを攻め始める。ふと、さすがレミリアに近づく。挨拶に来たのだ。

ナ「やあ、レミリアさん。許可もなしに攻め始めるとは、良い度胸してるじゃないか。」
レ「ええ、こんにちは。あら、許可ならもうとつてあるじゃない。電話で。」

ナ（言い返せない……!）「それでなんだけど、君たちのチームに2つ聞きたいことがあるんだ。」

レ「なにかしら?」

ナ「まず一つ目。さっきあなたは霊夢に、『別のところの車』って言ってたけど、あれはどういう意味なんだい?」

レ「実はね、霊夢はもともとロードスターに乗ってたんだけど、今は修理に出してるの。」

ナ「修理?」

レ「エンジンブローって言ったらわかってくれるかしら?」

ナ「納得。じゃあ二つ目。前回のバトルで、白いFDが乱入してきたらしいけど、あれは結局どうなったの?」

レ「あの白いFDにはおかえりいただいて、もう一度仕切りなおしてバトルしたわ。」

HPに乘せてあるのはその時のタイムよ。」

ナ「ふくん。いろいろとありがとう。」

レ「じゃあこつちからも一ついいかしら？」

ナ「なんだい？」

レ「あなたたちのところってたしか聖がいたはずよね？どうしたの？」

ナ「聖なら今経営ミスで今ムシヨにいるわ。」

レ「ふくん。わかったわ。いろいろありがとう。明日は良いバトルにしましょうね。」

ナ「ああ。」

第35話 「私にできること」

——翌日 午前4：30 命連寺（仮）前駐車場——

いつも通りレミアは、プラクティスを4時に切り上げ、皆が眠るころだった。

魔「ふう〜。私もそろそろ眠るか。」

そういつて、魔理沙が後ろのシートに移動しようとする時だった。ふと、魔理沙の肩をたたく者がいた。

トントン

魔「誰だぜ？」

針「俺だよ、俺。」

魔「ああ、なんだお前か。何の用ぜ？」

針「別にどうってことないけどさ、ちよつとハクとうまくいつてるか確認しに来ただけだ。」

魔「ああ…。その話か。ま、うまくいつてるよ。ここ最近はずいぶん調子いいんだ。」

針「そうか…。やはりハクはこのFDと同化していつてるのか。」

魔「そういえばさ、針助。お前とハクがどうやって幽霊になったのはわかったんだが、どうしてこの世界にやってきたんだ？」

針「すまんが：それは俺にもわからないんだ。気が付いたら土坂の頂上付近にいてな。わけもわからず8年一緒にいたら偶然あんたらがやってきたってわけさ。」

魔「なるほどな。じゃ、私は寝るからよ。」

針「おお、おやすみ。」

そういうと、魔理沙は後部座席に入り、布団をかぶって寝た。

——このやり取りを、誰かが見ていた。

——同日 午後17：00——

フ「んー！よく寝た。」

咲「寝すぎですよ…。今何時だと思ってるんですか…。」

フ「いや～さ？私実は、みんなが寝た後、ちよつと霊夢のシビック借りて何本か走ってたんだよ。」

霊「だから私が2号車で寝てたのか！この野郎め…！」

フ「ご、ごめん。ゆ、許してくれる…よね？」

霊「許さん。レミ。もう一本走ってくるわ。フランは助手席に乗って。本気で行くわよ。」

レ「ええ。お願いするわ。」

フ（な、なんだ…。よかった。）

魔「ふう…。やっと目が覚めてきたな…。3時ぐらいに起きたのに何であんなに眠かったんだろう…。」

フ「あ、魔理沙おh（無理やり霊夢に助手席に突っ込まれる）」

霊「あら、魔理沙おはよう。ちよつと待っててね。」

魔「ちよ、ちよつと霊夢？どうなつて——」

バタン！ブロロロロロロロオオオオオオオオオオオ——

咲「おはよう魔理沙。」

魔「おはようだぜ。霊夢はどうしたんだぜ？」

レ「現在フラン処刑中。」

魔「ああなるほど。じゃあ私も、1本走つてこようかな。ハクをちよつと鳴らしておかないといけないしな。」

ハク「うん。そうだね。」

レ「ええ。いつてらつしやい。」

魔理沙がFDに乗り込み、もみじラインに消える。

それを見送り、レミリアがポツリとつぶやく。

レ「なんか：勇ましくなつたじゃない。」

咲「え？」

レ「この計画を始めたばかりのころは、まだ2人ともおぼつかなかつたけど、土坂の県があつて以降は、真剣に取り組むようになったと思つたのよ。さ、咲夜。私たちもセツトとかの準備しましょ。もしかしたらがあるかもしれないからね。」

咲「あ、はい。」

——午後21：00——

レ「さて：。そろそろ始めましょうか。」

ナ「ああ。そういうえば、先攻後攻はどうやってきめてるんだい？」

レ「相手側にいつも任せてるわ。ダウンヒルは：誰がやるのかしら？」

ナ「私がやる。先攻で行かせてもらうよ。」

レ「分かつたわ。それじゃ、2人とも車並べて！」

霊夢とながうなずく。そしてそれぞれの車に乗り込み、車を順に並べる。

ナ（問題は、私のテクがこいつらにどれぐらい通用するか。ま、気楽にいけば大丈夫だろう。）

霊（相手はS14か：。（ため息）さて、見せてもらうわよ。なず。）

咲「カウント行きます！」

2台とも、ここらは簡単にクリア。

その次。すぐに2へアが来る。さっきのコーナーで油断していると、ここで減速する。

2人とも、ここは楽々とクリアしていく。

霊（さすがに早いわね…。ミスればたぶん速攻でおいでかれる。とにかく今は我慢よ。今日の、フランを隣に乗せたときのペースにするのはまだ早い。）

ナ（食いついてくる…。か。予想はしてたけど、さすがにちよつときついかな…。）

モブ32 「すげえ！」

モブ33 「すごいな！2人ともすげえ突込みだ！」

モブ34 「しかも立ち上がりもうまい！」

ナ（ため息）とにかく、今は落ち着くんだ。まだ始まったばかりじゃないか。）

2台は、しばしの直線の後、3連続コーナー。そしてこのコース最長のストレートがある。

そして順々にバトルは進んでいく。

直線を過ぎ、またも連続コーナー。大きく回った後、テクニカルセクションに入る。

ナ（ここからテクニカルセクションか…。（チラツつとバックミラーを見る。）（ため息）まだ来ないか…。なら、来る場所はあそこしかないな。）

霊（この先の側溝があるセクションでぶち抜いて終わりにする。）

車体を滑らせながらも、すいすいと抜けていく2台。

霊（!!）

ふと、シビツクのライトが消える。そして、霊夢自身も目を閉じる。妹紅戦でやったあのブラインドアタックと同じだ。

ナ（な?!?むちゃ言うな!こんなところでブラインドアタックなんて…死にたいのか!）

テクニカルセクションの最後のコーナーはセクションを高速で抜けると、一番きついコーナーだ。

難なく抜ける2台。そして側溝のあるセクションに入る。

霊（まだだ…。まだ早い。仕掛けるのは2本目の側溝。）

ナ（くっ…。集中力が下がったのか?!?だいぶラインがぶれてきた…!）

霊（ふらついた…ならここで!!）

コーナーに入った瞬間、ナズのS14がアウトにグラツとなる。

ナ（な…!）

霊「ここだ!」

シビツクのほうを見る。すると、溝またぎをしている。ということはライトを消しな

がら溝またぎをしていたということになる。

ナ（な……！）「なんだってあんな派生技を!!」

霊「一気にペースを上げて終わらせてやる!」

ナ「ペースが上がった!?逃げ切らせるもんか!」

シビツクのペース上がったのに対応して、S14のペースも上がる。

ナ「向こうだつて所詮は同じ車なんだ!向こうが行けるならこつちが行けないなんてことは絶対ないはずなんだ!」

霊（食いついてくる……?つてことは向こうもペースアップしてるのか……。）「まったく往生際が悪いわね!」

ナ（く……!なんてペースだ!）

——あるギヤラリーコーナー……の向こう岸にある茂み——

??「ねえ、そろそろ来るみたいだよ、ぬえちゃん。」

ぬ「あ・ああ。」

ブオオオオオオオオン……ブロロロロオオオオオオオオン

??「ああ……ナズちゃん抜かれちゃってるね……。」

ぬ「なあ、小傘。そんなにギヤラリーみたいに騒いで大丈夫なのか?」

子「ああ、大丈夫だよ。私はどうせ、捕まる身なんだし。」

ぬ「へ？」

子「私ね……。昨日とか見て思ったんだ。星さんとか、ナズちゃんも、自分にできるところを最大限やってる。だからさ、私も今できることきちんとやってまたこの地で光を浴びられたらいいな……ってさ。」

ぬ「光……か。」

子「何？どうかした？」

ぬ「いや、なんでもない。そろそろ私は帰る。」

子「え!? もう帰っちゃうの!？」

ぬ「……………」(ボタン

————— バトルはいよいよ、佳境に入る。

側溝のセクションを抜けると、ずっと続く高速セクション。たまに入るコーナーで減速しないように気を付けないと、ここで決着がつく可能性もある。

シビックとS14はかなりのハイペースでこのセクションに入る。

コーナーも相当なスピードで抜ける。

そうなつてくると、心配なのがタイヤだ。

だいぶハイペースで来てるから、タイヤがかなりきつくなつてきている。当然グリツプは効かない。

ナ（クツ……。タイヤがやばい……。のか？）

霊（まだだ……。まだ食いついてくる。ならラストの2回の折り返しでバックミラーから消す！）

ちよつとペースが上がる。

霊（あなたがこのペースについてこれなければ私の勝ち。ついてこれればあなたの勝ちよ！）

ナ（ペースが……。クソツ。クソツたれええええええええええ！やれる！やってやるぞおおお！）相当絞り出したS14がシビックに並ぶ。そしてすぐにコーナーが迫る。

霊（ここでサイドバイサイドか……。面白いじゃない！）

ナ（……………！）

一瞬、並んだ2台そしてコーナーがすぐに来る。

シビックが耐え切れず、膨らむ。そしてS14を少し押し出す。
ドン

ナ（！）

S14はそのまま押し出されスピン。

今ここに終止符が打たれたのであった。

第36話 「全開走行（意味深）」

……。負けた、か。

スピンしたS14から降りたナズーリンがポツリとつぶやく。

ナ「……。〈ため息〉私……。もう一度やりたいな……。今度は、私のギャランで。」

——命連寺（仮）前駐車場 午後21:15——

2台が戻ってくる。

フ「あ、二人とも帰ってきた！」

2台がそれぞれの陣地で停車する。

ム「お帰りなさいです。なんだか、うかない表情ですね。」

ナ「ああ。なんか、鮮やかすぎて何も言えないんだ。なにもかも。」

星「鮮やか？」

ナ「星ちゃんも、あいつらの後ろを走ってればすぐにわかるさ。昨日のプラクティスで相当のことをこのコースから学び取ってる。恐ろしいよ。私は少し寺院で座禅でも

組んでるから、後は任せたよ。星ちゃん。」

星「うん。わかった。」

そういうと、ナズーリンはとぼとぼとした足取りで寺院のほうへ向かう。

その後姿には、哀愁さえ感じられた。

星「恐ろしい…か。」

ム「どうかしたんですか？」

星「いや？でも、一つだけ私にも引つかかるところがあるんだ。」

ム「引つかかること？」

星「昨日私、興奮して眠れなかったんだ。それで、少しだけ走るところと思つてき、エ

ボのほうに向かったんだ。すると、…。」

ム「すると？」

星「ここからは大声禁止だよ？」

ム「わかりました。」

星「魔理沙が幽霊らしき何かと話していたんだ。」

ム「!!」

星（言つといてよかった…。）

「だからさ、幽霊が取りついてたやつと戦うつてのもなあ…。つてさ。」

ム「それは違いますよ。」

星「どういう意味？」

ム「相手が誰だろうと、全力で相手するだけじゃないですか。」

星「それそうだな…。やれるだけやってみる。いや、私にできることを全力でやる。」
ム「その意気です。」

—— God Wings 側

フ「お帰り！ 霊夢。」

霊「ただいま。フラン。後、なんかごめんなさい。」

フ「私なんか霊夢に謝られるようなことしたっけ？」

霊「セツトのことなんだけど、全然気にする余裕なかったわ。」

フ「ああ、なるほど。」

魔「それだけ速いやつってことなのか？」

霊「詳しいこと言うともたまた違ってくるけど、大体あってるわ。」

魔「分かった。私もそれなりの覚悟で臨ませてもらうぜ。」

霊「その意気よ。」

魔「これに、ハクのこともあるんだ。こう思うと、うずうずしてきた…！なあ、レミ。」

もう下行つてもてもいいか？」

レ「ええ。いいけど…。まだバトルの予定時間までかなりあるわよ？」

魔「いいんだ。どうせ、やることはハクのアップぐらいだし。だからいいだろ？」

レ「なら…いいけど。」

魔「よし、行くか！」

キュルルルルルグオオオオオオオオオオオ——ン————!!!!!!

FDのエンジンが勢いよくかかる。

ハク「もうバトル？わかった。じゃあ行こう！魔理沙。」

魔「おう！」

咲「ちよーととまって。」

魔「なんだぜ？咲夜。」

咲「どうせ行くなら私もつれてって。」

魔「別にいいが…。下まで飛ばすぜ？」

咲「別にかまわないわ。フランが霊夢の助手席にいて余裕だったように、私もそうしたいの。」

魔「お前も私の助手席には何度も乗ってるし、別にそこに対抗心持たなくてもいいんじゃないかなーと思うんだけどな。ま、咲夜にはカウントもやってもらおうし、良いだろ

う。速く乗んな。」

咲「ええ。じゃあお願い。」

咲夜が助手席に乗り込む。

ハク「ああ、私の席が…。」

魔「別にいいじゃねえか。」

咲「ごめんなさいね。(汗)」

ハク「魔理沙。」

魔「なんだぜ？」

ハク「まじで本気で飛ばして。そうじゃないと私怒るから。」

咲(あ、この人絶対キレてる。)

魔「了解だぜハク。じゃあ咲夜、くれぐれも舌をかまないように身構えとけよ？」

咲「(ため息) わかったわ。」

ブおおおおおおオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

星「お、あっちも出てるみたいだな。私ももう出ようかな。」

ム「もう出るんですか？」

星「ああ。」

そうつぶやきながら、星はエボのほうに向かう。

咲「へべシツ！あ、あれ？私確か…上で…つて魔理沙？私なんでこんなところにいるの？私確かk（へべシ！）」

魔「あー危ねえ危ねえ。あそこにいるところの記憶が戻りかけてたぜ。」

咲「あ、ああ魔理沙。うつ…ちよつとまだ気持ち悪い…。」

魔「おおう。少し休んでな。」

—— 10分後

魔「咲夜―。起きろ―。」

咲「ん・ああ、魔理沙おはよう。」

魔「気分のほうはどうだ？」

咲「まだ眠い…。でも、大丈夫。」

魔「分かったぜ。」

星「じゃあカウントできるんだね？」

咲「あれ？星ちゃん。どうしてここに？事情は魔理沙から聞いて。」

魔「お前が眠ってから2分ぐらいたって、こいつが来たんだよ。」

咲「つてことはバトルは私待ち？」

星「そういうことになるね。」

咲夜は恥ずかしそうにして、急いで道の真ん中に向かう。

咲「それじゃあ、バトル始めるわよー！」

魔（何事もなかったかのように言いやがったぞこいつ。）

バトルする2人も急いでそれぞれの車に乗り込み、発車の準備をする。

咲「カウント行きます！」

「5！4！3！2！1！GO！！」

第38話「1本目」

「5!4!3!2!1!GO!!」

魔理沙が後攻、星が先行でバトルがスタートする。

勢いよくスタートし、すぐにコーナーに入る。開幕1秒でコーナーに入り、それから
はだらだらと続く中速区間が続く。

星（私にできることは：何かわからないけど、全力で仕事をこなす。それだけだ。）
魔（さーて、まずは観察だ。）

ハク「ねえ、魔理沙。」

魔「なんだぜ？」

ハク「私は：どうすればいい？」

魔「そうだな。融合にはまだ早い。2本目まで待つてくれないか？」

ハク「分かった。」

中速区間を進む2台。時々、緩いヘアピンカーブで足を取られそうになるが、すぐに

取り戻し、追いつく。いわゆる膠着状態だった。

モブ37 「のぼりもすげえ！ほとんど直角だぜ！」

モブ38 「ああ！」

魔（ちよつと近づいてもすぐ離される…ちよつと離されてもすぐ追いつく…もしかして、むこう、私を待ってるのか？）

星（なんというか…ふしぎだな。あつちは必ずこつちより上のはずなのに…。）
そう思いながらも、2人は距離を保つ。離す、食いつくを繰り返しながら。

——— どこかのギャラリーの向こう側の茂みの中

ブローローンブローン

小「あの二人…。星ちゃんがFDに食いつかれてるのはなぜか気に食わない。FD
…。なにか企んでる…。」

小傘は、ふと隣を見る。しかしぬえの姿はない。

小「あ、そつか。ぬえちゃん帰っちゃったんだ。それじゃ、私も帰ろうかな。元私が
いるべき場所に。」

そういうと、小傘は茂みから飛び降りる。

モブ39 「お、おい。あれって…。」

モブ40 「捕まってるはずの小傘じゃねえか!？」

っそう、慌てふためくモブたちを睨みながら、小傘は愛車のもとに付く。

それは、盗んできた、相当チューンされたBIZZだった。

小「なんか…楽しいんだよな。走ることが、最速に快樂なんてないんだって、教えられた気がするよ。」

側溝のあるセクションに入る。こちらへんは、のぼりではかなり道幅が狭く感じられる。

星「どういうつもりか知らないけど、向こうが仕掛けないならこつちから仕掛けて終わらせてもらおうよ！」

エボのペースが上がる。

魔「さすが…エボだな。加速のしようが鋭い。だったら、こつちも少しづつ上げていくか。」

FDのペースも上がる。

2台とも、容赦なく溝またぎを使い、素速くコーナーを抜ける。

モブ41「うおー！どっちもうめーな！」

星「さて…こつからは私が得意であり、苦手であるセクション。ここをどう攻略してくるか…だな。」

側溝セクションを抜けると、すぐ最長のストレート。そのご、短い連続コーナーがあ

る。

ストレートでスピードを出しすぎると、その後のコーナーに対応できなくなるし、かといって、コーナーにビビってストレートでアクセルを抜くと、直線で決着がつく。

だが星と魔理沙は、それを考えることもせず、ストレートでアクセルを踏む。

星（ついてくる…か。ということは向こうもおんなじことを考えてるってことか。そりゃ、そうだよな。だってこんな並行したバトルで、手を抜くなんてできないもん。）

魔（…。速え…な。さすがエボ…だ。）

ハク「魔理沙…?」

魔「ん?どうした?」

ハク「大丈夫?」

魔「私は別にどうということはないぜ。ただ…」

ハク「ただ?」

魔「ただエボ強いってことに浸ってた。それだけだ。」

ハク「なるほど…。」

そろそろストレートが終わる。エボが少しずつ減速していく。

魔（減速してる…。だったら詰める!）

フ「あ、帰ってきた。」

咲「お帰りなさい。さっそくガスを足すわね。」

魔「おう。頼むぜ。」

ハク「ねえ…魔理沙。」

魔「なんだぜ…？ぶわっ!!」

ハクが実体化して魔理沙に本気でかかる。

魔理沙から少し鼻血が少し出る。

フ「え…ハクちゃん？」

魔「な…なに？」

ハク「あんたねえ…。集中しなさいよ…。針助君から言われたはずでしょ…。？私はF

Dと同化してるって…。」

魔理沙がヌクツツと起き上がり、そのまま蹴りだし、ハクをビンタする。

魔「お前…。」

レ「あんたたち…!」

魔「レミ…。」

レ「いい？魔理沙。2本目、あなたは後攻。しかも5秒ハンデで行くわ。」

魔「…!」

レ「感情的になるのは、バトル後にして頂戴。それと、ハクさん。」
ハク「何？」

レ「あなたはFDに吸い込まれるだろうけど、バトル中は一切魔理沙に手を貸さないように。会話もダメよ。」

魔「お前……。私を試しているのか……？」

レ「当然よ。」

魔「分かった。咲夜。とつとと足してくれ。」

咲「もう終わったわ。」

魔「分かったぜ。あんがと。」

そういうと、魔理沙は速攻でFDに乗り込み、ターンして下を指した。
頂上にハクは取り残されたままだった。

レ「あなたはいかないの？」

ハク「ええ。私もまだ、完全にFDになったわけじゃないですから。」

——命連寺側。

ム「お疲れ様です。星さん。はいこれ。お水です。」

星「おう。ありがと。つてあれ、ナズ。座禅はどうした？」

ナ「ああ、座禅？なんか今日は気持ちが悪く落ち着かないんだ。浮き沈みを繰り返してい

てね。どうもひとつにまとまらないんだ。(ガス足しながら)「

星「そうか。さて、行くか。」

ナ「もう行くのかい？速いね。」

星「気持ちはまだ続いているんだ。バトルはまだ続いている。」

ナ「星ちゃんが望むなら、止めはしないさ。輝ける場なんて、そうないからね。」

ナズがガス足しを止めると、星はさっさとエボに乗り込み、下を目指した。

———もみじライン上りスタート地点 午後21:35———

咲「2本目！カウント行きます！」

———見せてやる…私のヒルクライム

!!!!!!

第39話「私∥FD FD∥私」

魔「ストップ！」

咲「何よ？」

魔「エボを先に行かせてくれ。私はその5秒後に出る。」

咲「（ため息）わかったわ。それじゃあ、カウント行きます！」

「5！4！3！2！1！スタート！！」

先にエボが出る。

「続いて5！4！3！2！1！GO！！」

続いて、FDが飛び出す。

魔（1本目でうすうす気づいてはいたが…こいつ、速い。ハンデをやると、それが地味によくわかる。赤城のころはすべてが慣れで把握できてたんだ…。集中しろ…。前を見ることだけに意識を置くんのだ。）

後ろのFDのペースはすさまじかった。

滑りやすい路面でさえも、いとも簡単に乗りこなす。

魔理沙はこの時、遠征の厳しさを痛感していた。

遠征とはつまり、アウエーで向こうの地元のやつに勝つこと。幻想レーシング時代とは全くわけが違う。あのころは、まだ群馬県内だったから、いつでも走りに行ける。そんな軽い気分だった。でも、今は違う。1日のプラクティスでそのコースのすべてを学ばなきゃならない。自分はそれをバトルに生かし切れていない。なら…なら。生かせばいい。路面の状況、タイヤの状態。そのすべてを、こいつ（FD）にささげる。ハクがそうであるように、私もそうじゃなきゃならない、

と。

あいからず、FDは突っ走る。コーナーも、直線も、魔理沙はほとんどアクセルを離さなかった。ブレーキをするときは、アクセルをちよん踏みする。魔理沙にはそれが、FDに負担がかかることもわかっていた。痛いほどわかっていた。だが、それはやめられない。なぜなら、前に自分がいるから。相手のペースに合わせていた自分がいるから。

魔（とにかく…集中だ…）

星（まだ追ってこない…ってことは…私のほうが速いのか？）

バトルはいつの間にか、側溝のあるセクションに入る。

エボは側溝を使わずとも、インをしつかり詰める。FDは側溝を容赦なく使い、怒涛の走りを見せる。

魔（そうだ…この感じ。だんだんエボが近づくのが手に取るようにわかる。）

——これは、きついことなのかもしれない。

——だけど、同時に楽しいんだ。

——FDから伝わるこの感覚。

——こいつがいかにも走りたがっていたかが、ほんとにわかる。

——………！石！

魔「くっつ！」

降ってきた石で、一時的にFDのペースが崩れる。

だが、それはほんの一瞬だった。すぐに取り戻す。さらに、その前よりペースが上が

る。

魔理沙は決して焦ってなどいなかった。FDに従うだけ。やりたいことをやらせる、やってあげる。それだけ。決してそれ以上でも、それ以下でもない。

星（来てる…バツクミラーには見られないけど…FDから出る、すさまじいほどのプレッシャーが、私にはわかる！）

麓では6秒差だったのが、側溝セクシヨンの終わりには、2秒差まで詰められていた。

魔（3本目はない…あるなら、潔く負けてやるよ…。負けないがな！）
ストレートに入る。

星（来るか…来るなら早く来い！）

星はどこかからくるプレッシャーが怖くてたまらなかった。だから、ストレートはアクセルべた踏みだった。加速しすぎたまま、コーナーに入る。

星（しまった！）

思ってももう遅い。コーナーを抜けたころには、もうだいぶ減速してしまっていた。一方FDは、こちらもまたアクセルべた踏みだった、が、コーナーの前で、全力ブレーキング。するりとコーナーを抜ける。

抜けた先には…エポのテールランプがいた。

魔（とらえたっ！）

——さーて、こっからは遠慮は無しだ。一気にけりをつける！

星（来たっ！なら！）

星は少し楽になったのか、少しずつペースを戻し始める。

——だが、

もう手遅れだった。FDがもうスピードでするりと横を抜け、そのままコーナーに入る。

明らかにFDのほうはオーバースピードだった。

星（そんなスピードで行けるはずない！）

魔（行ける…いや、行ってやる！）

——今の私は、FDそのものなんだっ！

ビカツ！

星（うっ！）

突然のフラッシュに、エボの体制が乱れる。

星（……………！）

光の先には…誰もいなかった。もうFDは2つ目の折り返しに入っていた。

——もみじライン頂上 午後21:45——

ひっそりと静まり返った駐車場に、FDのロータリー音が響く。

フ「あ、帰ってきたよ！」

ハク「……………」

レ「あなたも、すぐにわかるわ。魔理沙の本気の顔。」

ハク「本気の顔なら今まで何度も見たことありますよ。今日は魔理沙一人で走っているから、あの人なりに新鮮なことがあったんでしょね。」

FDが駐車場に入る。すると、ハクの姿が薄くなりやがて消え、FDに吸い込まれる。

ハク「お帰り、魔理沙。」

魔「おいおい、お帰りを言うのはこっちの方だぜ。」

ハク「魔理沙……。私……」

魔「いいのさ。お前もどうせレミに言っただら？おまえがいなかったせいで私は新鮮なことだったって。」

ハク「ちえ。なんでばれちゃうかな。」

魔「なんだかんだでもう3年だぜ？それぐらいわかんなくやしようがないだろ。」

魔理沙はFDを止め、外に出る。

魔「うわっ!？」

魔理沙の体がグラツとゆらぐ。あのハイペースで集中していたのが3分も続いたのだ。体力の消耗も激しい。

すかさずレミリアが支えに向かう。

レ「おかえり。大丈夫？」

魔「あ、ああ。大丈夫だ。だがちよつとくらくらする…。」

レ「そうね…。じゃあ帰りのFDの運転は咲夜に任せなさい。あなたは1号車に乗ってゆつくり休んでなさい。」

魔「ほんとなら断るとこだが…。ま、事故つてもハクに申し訳ないからな。了解だ。」

魔理沙がとぼとぼと1号車に向かう。

エンジンつけっぱのFDのヘッドライトが、それをギラギラと照らしていた。

霊「あれ？なんか忘れてるような気が…。」

レ「気のせいじゃん？それより咲夜は？」

フ「下じゃないの？」

魔「下だと思うぜ。」

レ「しょうがない…。霊夢。私を乗せて下に咲夜を取りに行くわよ。」

フ（あ、絶対強がつてるわ、これ。）

レ「その声…聞いたことある…。アリス？」

ア「よくわかったわね。やっぱりわかっちゃう？」

レ「当たり前でしょ。あんた、あの時かなり魔理沙みて興奮して叫んでたじゃない。あの声、2度と忘れることなんてないわよ。で？」

ア「魔理沙はいる？」

レ「もちろんいるけど…電話には出ないわよ？」

ア「何故?!」

レ「だって、あなたと魔理沙を合わせたら、長電話になるうえに、一方的に——」
ガチャッ

レ「切りやがったわね…まったく。」

咲「誰からの電話だったんですか？」

レ「(ため息) アリスよ。」

咲「そのアリスが次回の対戦相手ってことは？」

レ「ちよつと調べてみるわ…。」

————— 数十分後 —————

レ「あつたあつた。えつと…チームMRS。通称…魔理沙好きの集まりい!」

咲「は？」

レ「チームメンバー。アリス、パチュリー、魅魔…。これ、全員魔理沙に関係ある人物ばかりじゃない！」

咲「前回メンタル鍛えといて本当によかったですね…。」

レ「本当よ…。今回はかなりあれそうね…。」

コンコン

レ「はい？どうぞ。」

ガチャツ

魔「入るぜ、レミ。」

レ「あら、魔理沙。どうかしたの？」

魔「どうしたのじゃないぜ。なんか騒ぎ声が聞こえた方向に向かったらここだったんだぜ。」

レ「ああ…そういうこと。そうね…魔理沙には先に話しておかないといけないわね…。」

トウルルルルルルルルルルルルル

レ（さつきと同じ番号…まさか!?!）

「魔理沙…とにかくこの部屋から出て！」

魔「は!?!」

ア『ああ…魔理沙…。やっと会えた…。すぐ会いに行くからね。待ってて。』
魔「…は？」

ガチャツ

魔「おい…レミ…なんか寒気がしてきた…隠れさせてくれ…。」

レ「了解。咲夜。隣に案内して。」

咲「了解です。魔理沙。こつちよ。」

魔「できるだ…け…。ん？」

ドタドタドタドタドタドタドタドタドタドタ…

魔「やばい！急げ！！」

咲「さっさと行け！」

咲夜が魔理沙を隣の部屋に蹴っ飛ばすと同時にアリスが入る。

ア「まーりさ！は…いない？」

レ「あんたに驚いて今出たわよ？というかあんた…。なんでここにいるのよ…。」

ア「会いに来た（率直）」

レ「もはやあんたが狂気に満ちてるとしか言いようがないわね…。ささ、とつとと出

てつてよ。」

ア「へいへい。」

アリスがとぼとぼ部屋を出る。ドアが閉まった瞬間に魔理沙が出てくる。

魔理沙は何も言う気にならなかった。

レ「魔理沙…？大丈夫？」

魔「全然大丈夫じゃないぜ。」

ア（え…？魔理沙？）

またアリスが部屋の戸に手をかける。すると魔理沙がすぐ部屋に入る。

ガチャツ

レ「あら、アリスまだいたの？」

ア「い、いや、あなた今…魔理沙って…。」

レ「は？だからいるわけじゃないでしょ？」

ア「う〜ん（汗）聞き間違いじゃないと思うんだけどなあ…。」

そういうながら、アリスは部屋を出る。そして、魔理沙が戻る。

魔「あー怖かった。」

するとまた部屋の戸がガチャツとなり、魔理沙がサツと隠れる。

アリスが少し会話し、不思議そうに帰り、部屋をでると同時に魔理沙が戻る。

アリスがフェイントを入れても、それは魔理沙に全く通用しなかった。

そして100回前後繰り返し返したところで、アリスが震えだし、急いで帰ったそう。

魔 「おー怖かった。」

レ 「ねえ：魔理沙。アリスと何かあったの？」

魔 「いやゝな？私とアリスって同じ魔法の森に住んでたじゃん？」

レ 「うん。」

魔 「それが理由。」

レ 「うわぁないわーあの子」

魔 「だろ？」

レ 「ま、いいわ。そのうち、正式に申し込むから。」

魔 「バトルの日が怖いぜ…。」

レ 「ほんとよね。」

第41話「迷走」

その後1日。レミリアは何とかMRSとのバトル交渉にこぎつけ、3日後。塩那峠にてバトルすることになった。

——翌日 13:30 サンドレーシング 会議室

レ「それじゃ、会議始めるわ。今回の相手はMRSよ。」

霊「え？MRSって、トヨタの？」

レ「違うわよ。——魔理沙？説明できる？」

魔「無理。」

レ「OK。じゃあ私から説明しよう。まずはチームメンバーから。アリス、パチュリー、魅魔。」

魔「へ？師匠もいるのか？」

レ「ええ、そうよ。場所は塩那峠。今回も、栃木ね。」

霊「メンバーの変更とかは？」

レ「そんなもんないわよ。」

霊「おい」

レ「じゃあ、バトルは4日後。解散。」

咲「あの、」

レ「ん？何？咲夜。」

咲「このくだりいらなくないですか？」

レ「ではここで、メンバー全員に一瞬で今までの情報をすべて伝える方法を考えよ、ただし決して周りに知られてはならない。」

咲「そんな方法すぐに思いつくわけじゃないじゃないですか。」

レ「ではこの方法で決定。解散。」

そういうと、メンバーたちは会議室を去る。

レミリアは大きいため息をつく。

レ「故郷に帰ってみようかな…。」

そう呟く。

レ（私に求められるものは…指揮力…。あの人なら…）

哀愁漂うレミリアの姿を、咲夜は見つめずに作業に取り掛かった。

レミリアは一人、栃木の研究所へと向かう。

午後14：25 栃木某所研究所

レミリアは、もともと自分がいつも停めていたところに自分の車を止め、正面玄関か

ら、研究所の中に入る。

ドアが開くと、そこには、受付のミスチーがいた。

ミ「あの…ここは関係者以外立ち入り…ってレミリアさん!? どうしたんですか?」

レ「やあ、ミス。お久しぶり。」

ミ「その言い方やめてください。」

レ「ところで、所長に合わせてくれる?」

ミ「いいですけど…認めてくれるかわからないですよ?」

レ「いいのよ。認めてくれないなら帰るだけだし。」

ミ「一応、相談してみますね。」

——十数分後——

ミ「やっぱり駄目ですって。」

レ「分かったわ…。」

ミ「何かあったんですか? 私ではければ相手になりますよ?」

レ「いや、いいのよ。ひよっこりとここにきてしまった私が悪いんだから。」

ミ「は、はあ…。」

レ「じゃあね。ミス。」

ミ「だからその言い方やめてください。」

レミリアが手を振りながら、正面玄関から出ていく。

レ（ダメ…か。ま、わかつてはいたけど…。）

そういいながら、駐車場に向かう。駐車場には、ついこの前帰ってきたS2000があった。

あのころとは違い、エアロはついてない。

レ（いろは…か。）

レミリアはとりあえずいろは坂でも攻めてみることにした。

——第2いろはスタート地点 エネ○ス前——

太（あなたが悩んでいるのなら…解決してあげるわ。でもね…あなたはもうこの子じゃないの…。）

ブロオオオオオオオオオオオオオオオオ——

太「いいわ・そんなに教えてほしければ、バトルで身に着けるといいわ。ま、最初からそのつもりだけどね。」

そう呟くと、エンジンをかけ、ふかし始める。

レ（前に誰かいる…。まさかあの茶色のワンエイティ…！所長じゃないの!!?）

太（試してあげる…今のあなたをね。）

S2000が横を通り過ぎると、180SXが発進する。

もちろんすぐには追いつかないが、太子用に特別チューンされた180SXだ。

「第2や、第1いろはで数少ないヘアピンから立ち上がって数秒のアクセルできっちり
と加速できるような仕上がりになっている。なにせこの太子は所長だ。所員には負け
たことがない。」

レ「さうて、どう出る？所長。」

太（……！）

太子が集中モードに入る。こうすると、太子は誰とも話さなくなる。

レ（やはりそう来るか……。ならっ！）

レミリアも集中する。

——バトルの結果はレミリアにはわかっていた。

——もとより、自分の師匠ともいべき相手だ。

——それなりの覚悟も自分には出来ていない。

——だから、負けるのは当然……なはずだった。

——
だが、違った。

——
どんなに 抜けるポイントでも、

——
どんなに、ミスをして、

——
抜いてこない。

——
そうこうしていううちに、いろは坂の分岐点に来てしまった。
すかさずウインカーを光らせるS2000。

——
すると、2台共に路肩に停まる。
そして、車から2人が出てくる。

——
レ「所長…お久しぶりです。」

——
太「あなた…悩んでるんですね。ミスチーから聞いたわ。走ってても、迷いがビ
ンビンと伝わってくる。」

——
レ「所長…。」

太「確かに私にこの所を任された身だけ……そこまで悩むことじゃないのよ。」

レ「へ？」

太「私は、ただ確認してほしい。それだけよ。」

レ「そこは別に悩んでいるところではないんです。私が悩んでいるのは、リーダーとしての悩みなんです。」

太「リーダーとしての……？ま、まあとりあえず場所を変えましょう。」

レ「は、はい。」

レ「ミアと太子は場所を近くのカフェに変え、再び話始める。」

レ「で、さっきの続きなんですけど……。最近、私から一歩引いて活動してるように思えてくるんです。」

太「はあ……。まあ、それくらいは、誰でも感じる域よね。」

レ「それです。それで悩んで来たんです。」

太「そうね……。それぐらいなら、私にもアドバイスできそうね。」

レ「は、はあ……。」

太「耐えなさい。」

レ「へ？」

太「みんな、そうなのよ。離れていくのが怖い。そう言ってくるのよ。そこで一歩耐

えれば、きつといいチームになると思うわ。」

レ「は、はい。」

太「と。いうことよ。あとは自分でじっくりと考えるといいわ。お会計は私がやっ
てあげるから。」

そういいながら、太子は去る。

レ（ため息）一歩先…か。）

それから、レミリアは閉店まで考えた。

——
自分がいるべき場所とは。

——
自分がやるべきこととは。

——
自分の居場所とは。

——
チームのために何をすればいいのか。

——
すべてをまとめて考えた結果が、これ。

私はメンバーでもなければ、リーダーでもない。

今のメンバーは、皆初心者なんだ。

私が個別に指導してあげなければ、生き残っていけない。

独自でなければ負ける。

そう結論を出し、

一人、サンドガレージに向かうのであった。

第42話 「やり直しと魔女の儀式」

—— サンドレーシングガレージ 午後22：10 ——

レミリアは帰ってきた。このチームを変えるために。
シャッターが開きっぱなしのガレージの中に入る。

車を降り、閑散としたガレージを見つめるレミリア。メンバーたちは、練習に行っていて、いないようだ。

レ「このチームを変える…か。」

そう呟くと、舎内のほうに向かっていく。

これからチームのメニユーを考えるのだ。

バトルまでの期限は、あと2日。

時間はあまりに少ないが、レミリアには迷いなどなかった。

—— 翌日 サンドレーシング 会議室 午前9：00 ——

この時、メンバー全員が会議室に集められた。

メンバーたちはわけもわからず困惑していた。

そこに、メンバーのリーダーである、レミリアがやってくる。そのレミリアの目は曇

りなき綺麗な目だった。

レ「みなさんおはよう。」

魔「おはよう…:なんだけどさ。」

レ「どうかしたの？」

魔「なんだつてここに集めたんだぜ？」

霊「そうよ…。」

フ「まったく意味が分からないよ。」

レ「そうね。ここに集めた意味について話すわ。さつそくだけど、昨日いなかったことを謝るわ。ごめんなさい。」

魔「は、はあ。」

レ「昨日は自分のことについて悩んでいたの。そして、一つの結論にたどり着いたわ。」
そして、メンバーはその一言に驚愕した。

レ「今日限りで、私はこのチームのリーダーを辞めるわ。」

霊・フ・咲・魔「はあ？リーダーを辞めるう?!」

魔「そ、それって…?!」

レ「言葉の通りよ。リーダーを辞めるの。それと、咲夜とフラン。あなたたちも、メカニックを辞めてもらうわ。」

フ「まったく意味が分からないよ…。」

レ「そうね…言い方を変えると、『メカニック限定で活動するのは禁止』ってことよ。」

咲「メカニック…限…定…?」

レ「そうよ。あなたたちにも、きちんと走ってもらわね。もちろん、公式戦でもね。」

魔「それで…? 私たちは?」

レ「あなたたちには、抽象的などところに集中してもらわね。」

魔「抽象的?」

霊「それって?」

レ「そこらへんはまだ決まってないわ。あとあと決めていくつもりよ。」

魔「は、はあ。」

レ「とにかく、今日の車の整備はあなたたち『だけで』やってもらわね。さ、取り

あえず行つた行つた。」

魔「は、はあ。」

困惑しながら、部屋を出るエース2人。

そして…

レ「残った2人には、これから走り込みをもらわね。コースは…秋名と赤城を交代交替でやってもらわね。そして、今日の設定タイムは、秋名が3分20秒、赤城が2

分40秒よ。このタイムを切ったら帰ってきてもいいわ。」

フ「は、はあ。」

咲「乗ってくのは愛車でいいんですか？」

レ「ええ。それじゃあ行つてらっしゃい。」

フ「ちよつと待って。姉さんは何かするの？」

レ「私？私はいースたちのお☆手☆伝☆い☆よ。」

咲（うわあ。）

フ「それじゃ、行こう咲夜。」

咲「あ、はい。」

それから1時間。エースたちはメカニック作業に少しずつ慣れてきたころ。

咲夜とフランは秋名でのタイムアタックを終え、赤城でのTAに取り掛かっていた。

2人とも相当詰んだようで、疲れていた。

そして、赤城の頂上で休んでいた。

フ「ふうう。ほんとに秋名では詰んだね。」

咲「そうですね。」

そういいながら、フランのGTRはスタート地点に付く。

フ「さ、とつとと終わらせて速く戻ろう」

咲「(うなずく) 5, 4, 3, 2, 1, GO.:」
飛び出していく、白のGTR。

咲(今までは…見てるだけだったから、何でもないように思ってたけど…。いざやってみるとなると、かなり体力的にきつい…。最初に決めようとしても侵入の仕方とかが中途半端で結局つぶれるし…あとあとやろうとしても、最初の疲れがあとあとで来て、集中できない…。これほど難しいことを、うちのエースたちは簡単にこなしていたのか…。それにペース配分も考えないといけないから、頭も使う。きつい…)。

そういうしながら、頂上の案内店で買ったソフトクリームを舐める。

タイムは自己計測。麓の駐車場のところについた時点でストップウォッチを押し、頂上まで上がってくるというものだ。

—— 40分後 ——

フ「ふう…。やっと終わった。こっちは2, 3本走っただけで終わった。」

咲「じゃ、帰りますか。」

フ「そうだね。」

—— サンドレーシング ガレージ ——

魔「えつと…。これをこうして…こうか。」

レ「そうそう。」

魔「よっしゃ。終わったぜ。」

霊「こつちも終わったわ。」

レ「じゃあ、そろそろ休憩しましょうか。」

そこに、フランのG T Rと咲夜のF Cが帰ってくる。

フ「姉さん帰ってきたよ。」

レ「あら、フラン、咲夜、お帰り。ちょうど休憩しようと思ってたのよ。2人もどうぞ。さ、魔理沙と霊夢は車どかして。」

霊「(ため息) はいはい。」

こうして、1日が終わっていった。体力的に疲れたのか、夕方には全員へとへとだった。

そして、夜のプラクティスでメンバーは、レミリアの行っていた意味がわかっていった。メカニックだった咲夜とフランは、データのさらに意味が分かるようになり、エースの霊夢と魔理沙は路面の状態や、車の状態が少しずつ分かるようになっていた。改めてレミリアの偉大さに感激した1日だった。

そして翌日……。いよいよ遠征に行く日。

メンバー全員が勝ちたいと思って臨めば、それほど大きい自信はないだろう。

4月後半の暖かい日差しがかかるこのころ。

ガレージのシャッターが上がり、4台の車たちが塩那目指して走り出した。シビツク、FD、サポート車2台。

これから始まる、展開を誰も知るわけがなかった。――

――塩那峠頂上 駐車場午後19:50――

モブメンバー「上がってきます！ゴッドウイングスです！」

パチエ「ついに来たわね：レミ。楽しみにしてたわ：。この夜を。」

ア「バトルは明日だけど？」

パ「い、いいのよ！会えればそれでいいんだから！」

魅「それより2人とも、やることはわかってるな？」

??「仮にも魔女だったんだし、頼むわよ。」

パ「そ、それぐらいわかるわよ。やればいいんでしょ、やれば。」

ア「それよりさ、何で母さんたちが出ないのさ。」

魅「だって：魔理沙に会うのなんか恥ずかしい：というかもう八方ヶ原が地元だって言っちゃってるし。」

??「私もねえ。会いたいのはやまやまだけど、明日予定あるし：。」

ア「どーせ誰かとデートでしょ？」

?? 「それ以上いけない。」

モブメンバー2 「そろそろ来ますよ！」

魅 「それじゃ、そろそろ行くわ。」

?? 「それじゃあね。アリス。」

ア 「はあ…。ま、やるしかないんじゃない？パチエ。」

パ 「それもそうね。ま、やれるだけやってみるわ。」

そういうと、2人ともに愛車に乗り込み、塩那峠を下る。

モブメンバー2 「なあ？そういうえば2人は何をやってるんだ？」

モブメンバー3 「ありや？おまえ知らないのか？あれはなんでも魔女の儀式って言われてるんだ。」

モブメンバー2 「魔女の…儀式？」

モブメンバー4 「さ、そろそろ俺たちも行こうぜ。」

モブメンバー2・3 「お、おう。」

そういうと、モブメンバーたちも引き上げる。

God Wings が駐車場に来たときは、まさにもぬけの殻だった。

レ 「ふう…。あれ？誰もいない…？」

咲 「誰も…いないですね。えっと…MRSのメンバーも？いないんですかね？」

フ「私の目が正しければ：そうだね。」

魔「なんか、舐められてる感じだぜ：。」

霊「とにかく！やるしかない。でしょ？レミ。」

レ「そ、そうね。それじゃ、いつものよろしく。」

メンバー全員がうなずくと、メカニックは担当の車に乗り込む。

エースは自分の愛車に乗り込み、魔理沙、霊夢の順に走り出す。

ア「こつちは準備できたわ。パチエ。」

パ『ええ。こつちもよ。』

ア「おっと、先に出るわね。」

パ『ええ、見せてあげましょう。』

——塩那（ここ）の恐ろしさをね——

第42, 5話「魔女の儀式」

ア（あとちよつとで…プラクティスの赤いロードスターが来る…。5・4・3・2・1…。）

「来たっ…!?ロスタじゃない…。ま、いつか。とにかく行くわー！」

そう思う瞬間、アリスはとっさにエボIVのライトを光らせ、動き出す。

霊（…?誰か追ってくる…?パッシング…どうすつかない…。ま、セット出しのためには悪いことではないわね。いいわ。付き合っただけよ。）

霊夢は、今までアクセルのふみが75%のを、100%にして、飛ばす。

その状況は、魔理沙もまた同じだった。

パ（私がついていけるかなんて知ったこっちゃない。私は魔理沙と走ればそれでいい。）

魔（追ってくる…?あのライトの形…。180SXか。無茶だつてことに気付いてないようだな。いいぜ。その勝負乗った。）

——まずは…。ダウンヒルから見に行こう。

ロスタVSエボIV。

一見見ると、エボIVのほうが断然有利に見えるのだが、それは同時スタートでの話。今回はある意味でのハンデ戦とも言える。ある程度までの距離まで近づければエボIVの勝ち。このままの距離ならシビックの勝ち。

霊（ハンデ戦か…。むこうの車種まではわかんないけど、そうとう出てるわね…。ま、だいぶプラクティスも終わりのところに近づいてるわけだし、このコースもだいぶわかってきた。飛ばしても全然視界は悪くならない…。）

ア（な…。速い！まともについていけないようなスピードじゃない！仕方がないわね…。このエボのパワーに頼らざるを得ない！）

——勝負は2ヘアで決まる。

アリスの集中力がついに切れ、スピンしてしまったのだ…。

ア（まさか、私がこの儀式で負けを喫するなんて…。まったく、タフじゃないの。霊夢。）

——続いて、ヒルクライム。

F D V S 1 8 0 S X

こちらは…ダウンヒルより速く決着がつく。

いままで隠していた融合を魔理沙が出し、一気に引き離したのだ。

パ(クツ…！何故負けた…!?仕掛けるのが遅かったか…!?…ま、いい。とにかくアリスと合流して、上にいけないとね。)

—— 10分後 塩那峠頂上 ——

魔「お、来たみたいだぜ。あいつだ。つい10分前に私たちを追ってきたやつはよ。」
頂上の駐車場に180SXとエボIVがつく。

そして、二つの人影が姿を見せる。

パ「お久しぶりね、レミ。何年ぶりかしら？」

レ「さあね。そんなことはどうでもいいの。説明してもらえるかしら？プラクティス中に割り込んでむりやりバトルした理由。」

パ「言い方が悪いのが癪に障るけど、いいわ。あなたの可愛いメンバーさんを巻き込んだ理由。ここではね、プラクティスがある日には必ず、魔女が現れるの。」

フ「ま、魔女？」

パ「その魔女はとも速くて、絶対に追いつけない。すぐにちぎられて、ゲームセットっていうシチュエーションだったんだけどね。」

レ「何故それを、申し込みの時に言わなかった？」

パ「そんなこと、決まってるじゃない。言ったところで、決して来なくなるわけじゃないし、死亡事故も多々報告されているわ。本音を言うと、あなたたちがどれだけやるか知りたかった。それだけよ。」

レ「分かったわ。説明ありがとう。さっさと帰ってきてくれるかしら？紫の魔女さん。」
パ「はいはい分かりましたよ。それじゃ、また明日、ここで会いましょう。月明かりの吸血鬼さん。」

そういうと、2人は愛車に乗り、その場を立ち去った。

——翌日 午前2：30——

この時間にプラクティスは終了し、メンバー全員が寢床に付いた。

——30分後。

皆は眠れずにいた。勝ちたい。その思いが強すぎて、興奮してしまっているのだ。

——FDの車内。

静かにエンジンがかかり、ハクが現れる。

ハク「ねえ：魔理沙。」

魔「なんだ？」

ハク「眠れないの？」

魔「んなこと、見りゃわかるだろ。」

ハク「ほかのみんなも眠れないみたいだね…。」
魔「ああ。」

——なんで眠れないんだろうな…。

——たぶん皆は勝ちたくて勝ちたくて…。仕方ないんだと思う。

——だけど…。私は違う。

——なんか…。気持ちが悪らつくんだ…。

魔「私には何かが違うって見えるんだ…。」

第43話「パペットマスター」

——翌日 午後21:00 塩那峠頂上——

魔理沙は結局、昨日の夜感じたざらつきが何かわからなかった。

だが、アリスを見ると、すぐくざらつきが激しくなった。

魔理沙は今、FDの中で気持ちを落ち着かせてる。

魔「まだざらついでる…。」

ハク「何を血迷ってるのさ。」

魔「やらなきやいけないことはわかってるんだ…。」

ハク「やるしかない。そうでしょ？ だったら全力でやってやろうじゃん。」

魔「ああ…。。 やってやるさ。」

そういつた魔理沙は、FDの中から出る。

霊「あ、魔理沙。 どう？ 少しはましになった？」

魔「ああ。 少し…な。」

霊「やっぱり完全になおらない…か。」

魔「ま、でもやる気は出てきたから大丈夫だ。 行けるぜ、レミ。」

レ「ええ。じゃあ行かせるわ。」

魔「じゃ、行ってくるぜ。」

霊「勝つてきなさいよ？」

魔「当たり前だろ♪」

FDに乗り、走り出す魔理沙。下にはいつも通り咲夜がいる。

FDが駐車場を出ると、レミリアがMRS側に行こうとする・・・が。もうアリスのエボIVの姿はなかった。

レ（あ…れ…？おかしいな…。）

——— 塩那峠 ヒルクライムスタート地点 ———

2台のフロントライトがスタート地点に来る。

咲「お、魔理沙が来た。」

フ「あれ？もう1台来るよ？あれってアリス？」

咲「そうですね。」

FDとエボIVが、進行方向に一度向かい、ターンして戻ってくる。

そして、咲夜とフランがいるところでぴたりと止まる。

魔理沙がFDから顔を乗り出して、咲夜に話す。

魔「なあ…咲夜。」

咲「何？」

魔「さつきから気になってたんだが……。アリスから何か出てないか？」

咲「え？特に何も出てないけど……。」。

魔「そうか……」。

そういうと、魔理沙はFDから降りるそぶりを見せ、再び乗り込む。

すると、アリスも同じようなそぶりを見せる。それを見た魔理沙は、顔色が変わった。

魔（フツ。そういうことか。やっとわかったぜ。この気持ち悪さの意味。）

「いいぜ。咲夜。始めても。」

咲「え、ええ。それじゃ、カウント行きます！」

「5！4！3！2！1！GO!!」

エボIV先行、FD後追いでバトルが始まる。

勢いよくスタートした2台は、軽いコーナーをいくつか抜ける。

迷いが無いFDの動きにも、アリスは動じなかった。せつかくの魔理沙とのバトルなんだから、私の本気絵おきちゃんと見せてあげないとね。そんな走りだった。

ハク「さすがにエボだね。結構速い。」

魔「そうか？私はそういう風に見えないけどな。」

ハク「どういうこと？」

魔「じきにわかるさ。こいつの『本当の姿が』な。」

ハク「……………」

2台は一つ目の折り返しに入る。

1つ前のコーナーを抜けたところから減速していった魔理沙に対し、アリスはコーナー前35M前ほどで急にブレーキをかける。

魔（あいつの走り方は…あんなもんじゃない。私とは紙一重の違いで、コーナー出てすぐにブレーキかけるのが私で、10Mほどでブレーキかけるのがアリスだったはずだ。…ま、そんなことばかり気にしてももちが明かないんだけどな。）

折り返しへアピンの後は、中速セクションが3段目まで続く。

魔「ハク。じきに見えるといったが、もう見えてくるぜ。」

ハク「え?」

魔「次の折り返し、そしてそこからは岸壁から目を離すなよ。」

ハク「う、うん。」

中速セクションでアクセル全開にするFD。中間でエボが体制を崩し、その隙をついてFDが前に入る。

魔（さて…前に出れたのはいいが、問題はここからだ。とにかくもつと離しておこう。）

アクセル全開でコーナーをひよいひよいと抜けるFD。そして、2つ目の折り返しに入る。

ハク「ここから…?」

魔「ハク。融合できるか?」

ハク「いいけど…どうして?もう前に出てるよ?」

魔「私と同じ視線で見た方が分かりやすいし、もつと離しておきたいからな。」

ハク「う、うん。」

そう会話を交わすと、FDが光りはじめ、光の中から白いFDが現れる。

白魔「さて、攻めるか!」

(う、うん。)

アクセルを踏みこむ。当然前にぐんぐんと進む。

あつという間に3つ目の折り返しポイントに付く。エボがぴつたりと張り付いている。

すると、折り返しのポイントの岸壁に、本来エボの中にいるべきアリスがいたのだ。

白魔(!!)

「分かっただろ?あいつはアリスじゃない。おそらくあいつの人形。蓬莱か上海だろう。」

(…え!?あれって…人形が操ってるの!?)

「そうとしか考えられまい。」

(た、たしかにそうだけど…。)

すると、アリスにも魔理沙の姿が見えたのか、折り返しの後、ブーストをかけたようにエゴを加速させた。

白魔「やはり来たか…。だが、そつちの動きは想定済みだ!!」

FDが加速する。白いFDの加速はすさまじい。なにせ、VS文戦で体制を崩した文を速攻で置いてきぼりにしたほどだから。

—— 3つ目の折り返しの岸壁。

パ「まったく。あなたも大胆なこと考えるわね。」

ア「当然よ。魔理沙と直接バトルだなんて、私にはまだ不向きなもの。」

パ「不向き?あなた、魔理沙を愛してたんじやないの?」

ア「当然魔理沙のことは好きよ。実力でまだ追いつかないって面もあるし、私はこっち側のほうが速く走れるのよ。」

パ「ふーん。不思議なものね。実際に走るより、いいタイム出るなんて。」

ア「だから私はこう呼ばれるのよ。」

『パペットマスター』ってね。

バトルはいよいよ終盤に入る。

スパートをかけたエボのペースに合わせて、FDも加速する。

当然、アリス（上海）のほうは人形のため、マスター以上のことはできないし、指示以上のことには対処しようがない。

アリスには、前を走るFDの姿は見えていた。だが、それ以上アリスはペースを上げなかった。

攻めて魔理沙とは正々堂々バトルしたい。私がこのエボに乗ってることがばれたって、それで魔理沙は降りて文句を言うような人じゃない。だから、私は私なりにやれることをやる。それがこのバトルで見出す、私なりの見解だから。

バトルはそのまま決着がついた。エボは永遠とFDの後ろをつけていた。

それで、アリスは満足だったのだろうか。正々堂々バトルするとは、どういうことなのか。はつきりとけりをつけたい魔理沙は、頂上に戻ってきた魔理沙に喝を入れる。

魔「アリス…。お前にとって正々堂々とはなんだ？」

ア「もちろん。こういうことよ。私は私にしかできないことをやる。それが私がこの世界でやる目的みたいなものだから。」

魔「ふーん。」

なぜか納得してしまった。

冷静に考えると、そうだ。私自身の考えを押し付けることはよくない。

むしろ、いろんな人のことを聞くことで、良いドライバーになれる。

そう理解したからだ。